

筑波大学博士（言語学）学位請求論文

格結合頻度に基づく対象移動動詞の研究

趙 金昌

2021年度

筑波大学博士（言語学）学位請求論文

格結合頻度に基づく対象移動動詞の研究

趙 金昌

2021年度

目次

第1章 序章	1
1.0 本章の概要	1
1.1 本論文の学術的背景	1
1.2 本論文の研究目的	4
1.3 本論文の構成及び各章の概要	5
第2章 先行研究と本論文の立場	10
2.0 本章の概要	10
2.1 先行研究	10
2.2 先行研究の問題点と本論文の立場	18
第3章 格結合頻度に基づく対象移動動詞の分類	
—ニ格、へ格、マデ格を中心に—	24
3.0 本章の概要	24
3.1 はじめに	24
3.2 先行研究	25
3.3 調査対象と調査結果	33
3.4 対象移動動詞の格結合頻度の調査結果	38
3.5 対象移動動詞とニ格及びへ格との結合分布に基づく動詞分類	41
3.6 対象移動動詞とニ格及びマデ格の結合頻度	44
3.7 本章のまとめ	46
第4章 起点志向型動詞と着点志向型動詞	
—ニ格、マデ格、へ格、カラ格を中心に—	48
4.0 本章の概要	48
4.1 はじめに	48
4.2 先行研究	50
4.3 対象移動動詞とニ格及びカラ格の結合頻度	51
4.4 対象移動動詞とカラ格及びマデ格の結合頻度	56
4.5 対象移動動詞とカラ格及びへ格の結合頻度	58
4.6 本章のまとめ	59
第5章 Vテイル形の格結合頻度について	61

5.0	本章の概要	61
5.1	はじめに	61
5.2	先行研究	63
5.3	テイル形の格結合頻度の調査結果	76
5.4	テイル形が述語としての意味	78
5.5	本章のまとめ	82
第6章	移動表現における自動詞と他動詞	83
6.0	本章の概要	83
6.1	はじめに	83
6.2	先行研究	84
6.3	調査対象、調査方法及び調査結果	88
6.4	考察	91
6.5	本章のまとめ	100
第7章	テイク形の格結合頻度について	101
7.0	本章の概要	101
7.1	はじめに	101
7.2	先行研究	103
7.3	考察対象と調査結果	105
7.4	対象移動動詞のテイク形の格結合頻度についての考察	108
7.5	本章のまとめ	122
第8章	テクル形の格結合頻度について	124
8.0	本章の概要	124
8.1	はじめに	124
8.2	先行研究	125
8.3	調査結果	127
8.4	対象移動動詞のテクル形の格結合頻度についての考察	129
8.5	本章のまとめ	143
第9章	終章	144
9.0	本章の概要	144
9.1	本論文の結論	144
9.2	本論文の意義	149
9.3	今後の展望と課題	149

参考資料	152
参考文献	153
本論文の各章と既発表論文との関係	156

凡例

- 一 用例番号、図表番号は章ごとに付す。
- 一 注は通し番号を付し、各ページに脚注として示す。
- 一 必要に応じて、対象とする形式や強調したい箇所に下線や波線を付すことがある。
- 一 例文の前に示した記号は文の容認度を示す。記号「*」は文法的に容認されないことを示し、記号「?」は非文ではないが文法的に不自然であることを示す。
- 一 引用に際しては、記号の使い方などは基本的に原文そのままとするため、以上の凡例に従わない場合がある。

第1章 序章

1.0 本章の概要

本章では、本論文の学術的背景、研究目的、及び本論文の構成について述べる。

本章の構成は次の通りである。まず、1.1 節では、移動動詞に関する学術的背景を概観した上で、先行研究にどのような課題が残されているのか述べる。次に、1.2 節では、研究課題を踏まえてどのような目的を設けることでそれらの課題を解決できるのか述べる。最後に、1.3 節では、本論文の構成と各章の概要について説明する。

1.1 本論文の学術的背景

日本語の移動動詞については、これまで自動詞を中心に数多くの先行研究の蓄積がある。英語などの他言語との対照を踏まえながら、意味特徴、成分分析による議論（宮島達夫 1972、影山太郎 1996a など）、格支配・構文的特徴を主軸とした議論（森田良行 1982、寺村秀夫 1982、宮島達夫 1986、森山卓郎 1988、李善姫 2009 など）、認知的観点による分析（田中茂範・松本曜 1997）など¹、様々な観点からの分析が進められている。

まず、意味特徴・成分分析による研究を概観する。宮島（1972）は移動の開始から終了にいたるまでのどの段階に重点をおいて表現するかという広い意味でのアスペクト的な違いによって、ある動詞が移動の開始の段階（すなわち出発）を表すのか、終了の段階（すなわち到着）を表すのかを分析しており、その際、いわゆる「移動の段階」という意味特徴を立てている。宮島（1972）は移動のどの段階にあるのかに注目することによって、移動動詞を「出発の段階に重点があるもの」「経過の段階に重点があるもの」「到着の段階に重点があるもの」「全部の段階を含むもの」といった4種類に分けて考察している。ま

¹ ①意味特徴、成分分析による分析、②格支配・構文的特徴による分析、③認知的観点による分析といった分類の仕方は李善姫（2009）を従うものである。

た、影山（1996a）は、他言語との対照を踏まえながら、移動動詞を分析している。同論は日本語において、様態は移動の概念に組み込むことができないが、一方で真に重要なのは、移動動詞が様態を表すかどうかではなく、動詞に伴う場所表現の性質の違いであることを指摘している。また、日本語において、移動の過程は起点と着点、途中の経路（Path）という2つの領域に分けられることを論じ、このような考え方に基づいて移動動詞を〈起点／着点指向〉と〈経路指向〉との2つのタイプに分類している。以上挙げた宮島（1972）と影山（1996a）は分析のアプローチと移動動詞に対する分類の仕方においては異なっているものの、日本語の移動動詞に対して、移動に伴う場所表現が重要視される点で一致していると言える。

次に、格支配・構文的特徴を主軸とした研究について概観する。代表的な研究として森田（1982）、寺村（1982）、宮島（1986）、森山（1988）、李（2009）などが挙げられる。これらの研究は格の捉え方に関して、大きく理念的に格を捉えるタイプと、実証的に格を捉えるタイプとに分けることができ、付随して同じ動詞に対して分類が異なることも多い。従って説明がやや煩雑になるため、先行研究についての議論は第2章で詳しく取り上げることにする。

最後に、田中・松本（1997）は移動動詞を認知的な観点から分析した代表的な研究として挙げるができる。田中・松本（1997）は移動という表現が何らかの構成要素によって表されるにあたって、どのような側面が動詞で表され、どのような側面が他の語句（名詞句、前置詞句、副詞句など）で表現されるかについて、日本語と英語を対照している。その結果、両言語が異なる性質を持ちつつも、共通性を見せていることを述べている。また、田中・松本（1997）は物理的な移動表現の拡張として、「そのハイウェイは東京から新潟へ走っている。」（田中・松本 1997：207）のような主観的な移動表現（いわゆる「虚構移動」）が生じることについても考察している。

以上見てきたように、移動を表す動詞に関する従来の研究では、自動詞を中心とした分析が盛んに行われてきた。一方で、他動詞についての研究はほとんどなされていないと言える。これは、移動に関して、自動詞と他動詞が似たような振る舞いをすると思われてきたためであろう。

しかしながら、先行研究を概観すると、特に以下の3点について課題が残されている、あるいは十分に考察されていないと考えられる。

- (1) a. 自動詞と対応する移動を表す他動詞については、これまで十分に研究されていない。他動詞は自動詞と似たような格支配あるいは動詞分類を示すのかどうか。
- b. 移動表現について、自動詞を対象として言われてきたことはそのまま他動詞にも当てはまるのか。他動詞と比べてどのような違いがあるのか。
- c. 別の単語と見なされている「V テイク/テクル」形はどのような格結合関係を持っているのか。本動詞の格結合頻度と比べてどのような違いがあるのか。

まず、(1a) について、これまでの移動動詞に関する研究は自動詞を中心に行われてきたが、移動を表す他動詞についての研究はあまりなされていない。その背後には、自他の対応を持つ移動動詞がしばしば、場所名詞句との結びつきにおいてよく似た振る舞いを見せると言われてきたことがあると言える。また、他動詞を扱う数少ない研究（宮島 1986、森山 1988）でも、同じ動詞が異なる分類の仕方を施されている様子が見られる。したがって、対象移動動詞に注目し、新たな動詞分類を示す必要があることが示唆される。

また、(1b) について、移動を表す自動詞に重きを置いている先行研究の中でも、寺村（1982）、宮島（1986）、森山（1988）は自動詞と形態的に対立をなす他動詞に気を配っているが、論考は未だ不十分なところが残されていると言える。これまで自動詞に関して分析されたことがそのまま他動詞に当てはまるのかという問題をめぐっては、先行研究を 2 つに分けることができる。森山（1988）は移動表現において自他が似たような振る舞いを示すとする立場を取るのに対し、寺村（1982）と宮島（1986）は、対応する他動詞が自動詞と似たような振る舞いを見せる場合もあれば、全く異なった振る舞いを見せる場合もあるとする立場を取る。このように、移動表現において、自他が対応する動詞の内実を明らかにする上ではさらに他動詞を研究する必要性が示唆される。

さらに、(1c) について、そもそも従来、格結合頻度の観点からの分析はあまりなされてこなかったと言える。唯一の研究として宮島（1986）は、動詞分類を行う際、「V テイク/テクル」形について、「移動に直接関係する格支配のうえで、ちがった性質をもっている」ため、別の単語と見なしている。しかし、「V テイク/テクル」が本動詞の格結合頻度にどのような影響を与えるのか、

また、本動詞の格結合頻度と「V テイク/テクル」形の格結合頻度にどのような違いがあるかという点について十分な言及は行っていない。

1.2 本論文の研究目的

以上の問題提起を踏まえ、本論文では主に次の3点を目的として議論する。

- (2) a. 宮島（1986）が提示した格結合頻度調査を参考にしながら BCCWJ における対象移動動詞と場所名詞句との結合頻度を調査し、新たな対象移動動詞の分類の可能性を示す。
- b. 移動表現において自他が対応する動詞について、格結合頻度の観点から、自他で格結合頻度（あるいは動詞のタイプ）が変化するものと、自他で格結合頻度が変化しないものに分けて検討する。
- c. 対象移動動詞に「テイク/テクル」がついた場合の格結合頻度を調査し、本動詞の格結合頻度との比較を行う。更に両者から見出された違いに関わる要因について考察する。

まず、(2a) については、主として第3章～第5章で扱う。移動動詞に関するこれまでの研究のうち、特に宮島（1986）では二格、へ格、マデ格を着点として同等に扱っている。しかし、影山（1996a）、矢澤（1998）、北原（1998）などの論考から、二格は〈+継続性〉を持たない点で、へ格及びマデ格とは区別されることが示唆されている。このような考え方にに基づき、第3章では対象移動動詞と二格及びへ格、二格及びマデ格との結合頻度を散布図で示すことによって動詞分類の可視化を図る。また、第4章では、ある動詞が起点志向型であるか、それとも着点志向型であるかという問題に注目し、対象移動動詞と二格及びカラ格、二格及びマデ格、二格及びへ格との結合頻度を散布図で示すことで、第3章と同様に動詞分類の可視化を目指す。さらに、第5章では、対象移動動詞の「テイル」形と二格、へ格、マデ格、カラ格との結合頻度から、対象移動動詞と〈±結果性〉〈±継続性〉との関係を導き出す。

次に、(2b) については、第6章で扱う。この章では、格結合頻度の観点から、自他が対応する移動動詞について考察する。特に、対象移動動詞に関して

用いられてきた方法と同様の方法を用い、自他が対応する動詞とニ格及びへ格、ニ格及びマデ格、ニ格及びカラ格、マデ格及びカラ格、へ格及びカラ格、ニ格及びヲ格との結合頻度を合わせて散布図で示す。その上で、自他で格結合頻度が増加するものと、自他で格結合頻度が減少しないものに分けて検討する。

最後に、(2c) については、主として第7章と第8章で扱う。「V テイク/テクル」形については多くの先行研究があるが、格の結合頻度に基づき対象の空間的移動を表す「V テイク/テクル」について取り上げる考察はこれまでほとんどなされてこなかった。そこで本論文では、第3章～第5章で提案した対象移動動詞の新たな分類とそれに関わる素性から、「テイク/テクル」が後続する場合に生じた格の結合変化をどのように説明できるか検討する。

1.3 本論文の構成及び各章の概要

本論文の構成は次の通りである。

第1章 序章

第2章 先行研究と問題の所在

第3章 格結合頻度に基づく対象移動動詞の分類—ニ格、へ格、マデ格を中心に—

第4章 起点志向型動詞と着点志向型動詞の格結合頻度—ニ格、マデ格、へ格、カラ格を中心に—

第5章 V テイル形の格結合頻度について

第6章 移動表現における自動詞と他動詞

第7章 V テイク形の格結合頻度について—本動詞の格結合頻度との比較を通して—

第8章 V テクル形の格結合頻度について—本動詞の格結合頻度との比較を通して—

第9章 終章

第1章では、本論文の学術的背景、研究目的、及び本論文の構成について述べる。

第2章では、これまでの移動動詞に関する研究を概観する。特に本論文と関わる構文的特徴・格関係を主軸とした先行研究を取り上げ、問題の所在を明らかにした上、本論文の立場を述べる。

第3章では、対象移動動詞と二格、へ格、マデ格との結合頻度に基づき、新たな動詞分類を試みる。本論文で扱う対象移動動詞は、二格とへ格を取る割合を散布図で示すことにより、大きく3つのグループに分けることができる。宮島(1986)の分類との対応においてAグループは着点志向型とされる動詞であり、Cグループは起点志向型とされる動詞である。一方、Bグループでは、着点志向型動詞と経路志向型動詞が混在する。宮島(1986)では、経路志向型とより近い位置に出現する着点志向型の存在について言及されていないが、本論文では確認された。また、動詞の限界性に注目すると、AグループとCグループは限界動詞であり、BグループはさらにB1とB2の二つに分けることができる。BグループのうちB1グループは着点志向型とされる限界動詞であり、B2グループは経路志向型とされる非限界動詞である。動詞の限界性と、従来論じられてきたへ格・マデ格の継続性、二格、へ格、マデ格の着点性を加えると、Aグループは〈+限界性、+着点性、-継続性〉、B1グループは〈+限界性、+着点性、+継続性〉、B2グループは〈-限界性、+着点性、+継続性〉、Cグループは〈+限界性、-着点性、-継続性〉を持つと捉えることができる。第3章では、この新たな対象移動動詞の分類を、後の章の内容の基盤として位置づける。

第4章では、宮島(1986)が取り上げている「出発点志向型」「到着点志向型」に着眼し、対象移動動詞と二格及びカラ格、マデ格及びカラ格、へ格及びカラ格との結合頻度を調査することを通して、宮島の分類を検証していく。この章では、第3章と同様の方法を用いて、対象移動動詞が二格とカラ格を取る割合を散布図で示し、本論文で扱う動詞がX、Y、Z、Wの4つに分類できることを示す。また、この分類の仕方と第3章の4分類を比較すると、次のような対応関係が見受けられることを述べる。

X≐A（「入れる、出す、集まる」を除く）

Z=C

Y≐B1（「移す」を除く）

W=B2

Aグループは「入れる、出す、集まる」を除き着点専用、Cグループは起点専用、B1グループは着点起点共用である。この分類から、「起点性」という素性が導き出される。第3章及び第4章における、動詞分類と動詞の類ごとに導き出される素性をまとめると、表 1-1 のように示すことができる。

表 1-1 動詞別と限界性、着点性、継続性、起点性との関係

X≡A	着点専用型	+限界性、+着点性、-継続性、-起点性
Z=C	起点専用型	+限界性、-着点性、-継続性、+起点性
Y≡B1	着点起点共用型	+限界性、+着点性、+継続性、+起点性
W=B2	経路志向型	-限界性、+着点性、+継続性、+起点性

第5章では、対象移動動詞の「テイル」形と共起する格の結合頻度を検討し、対象移動動詞の格パターンとアスペクト形式「テイル」との関係をつめる。基本的に動詞が「テイル」形を取る際、自動詞の「テイル」形は結果残存、他動詞の「テイル」形は動作進行を表すと思われる。これを踏まえ第3章で取り上げた動詞分類と結果性、継続性との関係をまとめると、表 1-2 のように示すことができることを示す。

表 1-2 動詞別と結果性、継続性との関係

Aグループ	+結果性、-継続性	ex. 入れる、置くなど
B1グループ	+結果性、+継続性	B1a ex. 移す、落とすなど
	-結果性、+継続性	B1b ex. 送る、運ぶ
B2グループ	-結果性、+継続性	ex. 進める、動かすなど
Cグループ	+結果性、-継続性	C1 ex. 離す、奪うなど
	<-結果性、+継続性>	C2 ex. 経路ヲ格を取る動詞

第6章では、移動表現で用いられる、自他が対応する動詞について、自他で格結合頻度（あるいは動詞のタイプ）が変化するものと、自他で格結合頻度が変化しないものに分けて検討する。従来、移動動詞についての研究は自動詞を中心に進められてきた。これは自動詞の分析がそのまま他動詞にも当てはまる

と思われてきたためであると考えられる。そこでこの章では、移動と自他の対立がどのように関わっているのか、他動詞の分析と同様に散布図を用いて分析する。その上で、自他が対応する移動動詞でも、自他で移動のタイプが変更しないものと、変更されるものがあることを明らかにする。さらに、タイプが変更される場合、どのような傾向性があるのかを示す。

第7章では、対象の空間的移動を表す「V テイク」形の格結合頻度について考察を行う。本論文では第3章から第5章までの議論を通して、対象移動動詞の格のあり方に、「限界性」「着点性」「継続性」「起点性」「結果性」という5つの素性が関わっていることを検討しているが、第7章では、本動詞の格のあり方に関与するそのような素性が「テイク」形の格結合にも関わると考える。この章ではまず、コーパスに現れる「V テイク」形とニ格及びへ格、ニ格及びマデ格、カラ格及びニ格、カラ格及びマデ格、カラ格及びへ格との格結合頻度の実態を散布図で示す。その結果、本動詞に「テイク」が付いた場合、動詞が縦軸の方に引き寄せられる、横軸の方へ偏っていく、原点に引っ張られる、といった3つの格結合変化の傾向が見られることを指摘する。また、次に、「テイク」の後続した場合に生じる格の結合頻度の変化にも「限界性」「結果性」「継続性」「着点性」「起点性」という5つの素性が関わっていることを示す。具体的にいうと、第一に縦軸の方（すなわちニ格の方）に引き寄せられた動詞は、〈+結果性、+限界性、+着点性〉を持つ点で共通しており、〈-継続性〉に捉えられるニ格との共起が助長されることを示す。第二に横軸の方（すなわち、へ格あるいはマデ格の方）に引っ張られた動詞は、〈-結果性、+継続性、+着点性〉において共通しており、〈+継続性〉に捉えられるへ格、マデ格との共起が助長されることを示す。第三に原点に引っ張られる動詞については、起点のカラ格とニ格、へ格、マデ格を一緒に考えると、「テイク」が後続した場合、カラ格の助長に〈+起点性〉が、ニ格の助長に〈+着点性〉が、へ格とマデ格の助長に〈+継続性〉が、それぞれ関与していることを示す。

第8章では、対象の空間的移動を表す「V テクル」形の格結合頻度について考察を行う。この章では第7章と同様の手順を用い、コーパスに現れる「V テクル形」とニ格及びへ格、ニ格及びマデ格、カラ格及びニ格、カラ格及びマデ格、カラ格及びへ格との結合頻度を調査・分析をすると共に、本動詞の格パターンと比較する。これを通じて、「V テクル」の格結合頻度の変化に関わる要因について考察していく。本動詞に「テクル」を付けると、カラ格との結合頻

度が大幅に増える動詞と、大幅に下がる動詞が見られる。これは「テクル」の「求心性」によって着点志向型と経路志向型とされる動詞の一部が起点に注目するようになるためである。

第9章では、第3章から第8章までの議論をまとめ、そこから得られる結論と今後の課題について述べる。

第2章 先行研究と本論文の立場

2.0 本章の概要

第1章では、これまでの移動動詞に関する諸説を概観した上、本論文の目的と意義について述べた。第2章では、先行研究を整理した上で本論文の立場について述べる。

本章の構成は次の通りである。2.1節では、先行研究の中でも構文的特徴・格関係による分析を行うものを主軸として、それぞれの論考の指摘を整理する。また、その上で、①各論考では格の認定についてゆれが生じている、②各論考では同じ動詞に対して異なる分類の仕方を示している、③各論考では自他が対応する移動動詞の分類において違いが見られる、という3つの問題点があることを述べる。2.2節では、2.1節で挙げた3つの問題点に対する、本論文の立場について述べる。

2.1 先行研究

日本語の移動動詞に関しては、これまで様々な観点から研究がなされてきた。第1章では、意味特徴・成分分析、構文的特徴・格支配、認知的観点といった3つの観点から諸説を概観したが、本論文は、格の結合頻度から対象移動動詞について考察を行うため、以下では格関係に関わる先行研究を詳しく検討する。動詞と結びつく格の観点から移動動詞の考察を行った先行研究として、森田良行(1982)、寺村秀夫(1982)、宮島達夫(1986)、森山卓郎(1988)、李善姫(2009)などが挙げられる²。

² 格関係に関する先行研究として、成田徹男(1979)も挙げられるが、本論文は1980年代以降の研究を中心に概観するため、成田(1979)についての詳しい紹介は割愛する。

2.1.1 森田良行 (1982)

森田 (1982) は、特定の文脈内における動詞の意味特徴 (意味の強調される部分) は、格に支配される側面が大きく、述語動詞の意味にかかわる主要な格こそ分類の基準となすべきであるとしている。同論は格の組み合わせが文型を形作るとする立場を取っており、主要な格として、以下の六つを立てている。

- A、 主体……………～ガ、～ハ
- B、 相手……………～ト、～ニ、～カラ
- C、 対象……………～ヲ
- D、 結果・内容……………～ト、～ニ
- E、 場所・方向……………～ニ、～デ、～ヲ、～へ、～カラ、～マデ
- F、 材料・手段……………～デ

(森田 1994:36～37)

森田 (1982) は動詞全般を対象として文型を整理しているが、中でも対象移動動詞が取る文型は、次のように示されている。

- | | |
|-------------|----------------|
| EニCヲ他V | ……置く、捨てるなど |
| EデCヲ他V | ……拾う |
| Eニ／へCヲ他V | ……向ける、回す、押す、引く |
| EカラEニ／へCヲ他V | ……出す、入れる、移す、運ぶ |

(森田 1994 : 39)

2.1.2 寺村秀夫 (1982)

寺村 (1982) は、移動動詞に関して、「縁の深い特定の場所を示す表現は、それぞれにとって必須ないし準必須の補語と考える (…) 必須の補語というべきものを必須補語、その度合いの比較的低いものを準必須補語」と区別している。また、場所を表す補語が必須、準必須であるか、あるいは副次補語である

かによって、移動動詞を次の4つに分けている³。

- (1) 「出ル」動き
落ちる、降りる、出る、離れる、去るなど
- (2) 「通ル」動き
A：通る、渡る、遡る、通りすぎる（通過する）、経るなど
（通りみちが必須補語）
B：走る、歩く、飛ぶ、這う、進むなど
（通りみちが準必須補語）
- (3) 「入ル、着ク；泊マル」類：⁴
A：入れる、届く、着く、上がる、降りる、移る、進むなど
（出どころ「カラ」が副次補語）
B：集まる、集中する、近づく、沈む、広まる、広がるなど
（出どころ「カラ」が副次補語）
C：泊まる、浮く、浮かぶ、立つ、座る、倒れるなど
（出どころ「カラ」を取らない）
- (4) 「行ク」「来ル」「帰ル」「戻ル」—境遇性の介入⁵
「行く」（到達点が必須補語、出どころが副次補語）
「来る」「帰る」「戻る」（出どころ、到達点が副次補語）

さらに、寺村（1982）は移動を表す自動詞以外に、自動詞と形態的な対立をなす他動詞についてもふれている。

- (5) 「入レル、出ス」類—働きかけと移動の複合
A：上げる、入れる、移す、置く、落とす、近づける、着ける、届け

³ 「必須補語」「準必須補語」「副次補語」の定義は次の通りである。

状況についての知識による助けということが全くない場合に限って考えるのであるが、あるコトの表現において、言い換えればある述語にとって、それがなければそのコトの描写が不完全であると感じられるような補語を「必須補語」(primary complement)、そうでないものを「副次補語」(secondary complement)と呼ぶ事にする。(寺村 1982: 82)

すべてを「必須」と「副次」に二分することは無理な場合が出てくるため、必ずしも反問を誘発するとは言いがたいが、述語の下位分類にとっての意味が大きいと思われるようなものを、「準必須補語」と呼ぶことにする。(寺村 1982: 84)

⁴ 寺村（1982: 121）は、「A類は移動の動きを表すものであるが、C類は移動の動きは意識されず（どこからか移動してそこに至ったには違いないが）、その到達したときのさまを描くものである。B類はその中間」であるとしている。

⁵ 話し手自身の視点に使い分けが依存している点で注意すべき特性をもっている。

るなど

(出どころ「カラ」が副次補語)

B: 集める、沈める、捨てる、広める、広げるなど

(出どころ「カラ」を取らない)

C: 浮かべる、倒す、立てる、泊める、並べる、寝かすなど

(出どころ「カラ」を取らない)

寺村 (1982 : 122) は働きかけと移動の組合せを、「主体 (仕手) X が、受け手 Y に働きかけて、その力で Y がある場所から出たり、通ったり、入ったりする」表現としており、「このうち、出たり、通ったりは、場所 Z が「～ヲ」という形をとるため、働きの受け手 Y の形「～ヲ」とぶつかり」、同じ助詞の衝突という問題が起こると指摘している。寺村 (1982) によると、「出どころ」の「～ヲ」は、客体の「ヲ」とぶつかることになり、その結果「～カラ」に替わるという現象が見られる。

2.1.3 宮島達夫 (1986)

宮島 (1986) は格支配の量的側面から移動動詞と場所名詞句との結合について調査を行っている。同論は、動詞の格支配について、従来言われている〈必須成分〉と〈随意成分〉との区別がそれほど厳密なものではないと指摘した上で、必須か随意かの区別とは別に、量的な傾向として共起関係のつよいものを「典型成分」、よわいものを「例外成分」と呼んでいる。また、具体的に典型成分と例外成分を区別する方法として、国立国語研究所所蔵の現代雑誌 90 種を調査対象とし、計 5 回以上現れた動詞と、その動詞に結びついた場所名詞句との結合頻度を調査した。その際、出現度数 20 以上の基本的な動詞を、2 番目の要素⁶まで考慮し、大きく〈到着点志向型〉〈出発点志向型〉〈経過点志向型〉の 3 種類に分けている。また、2 番目の要素が 10% を超えるか否かによってさらに下位分類を行い、10% に満たないものは、〈純粹～型〉、10% を超える

⁶ 宮島のいう要素には〈到着点〉〈出発点〉〈経過点〉といった 3 つがある。同論は、ニ格・へ格・マデ格をまとめて到着点の格として、カラ格・ヲ格・ヨリ格を出発点の格として、カラ格・ヲ格を経過点の格として、それぞれ扱っている。

ものは〈到着出発型〉とそれぞれ呼んでいる。表 2-1 では、宮島（1986）が扱っている移動動詞をそれぞれの型の中では、その傾向の高いものの順に並べてある。

表 2-1 宮島（1986：48）の動詞分類⁷

			到着点	出発点	経過点
到着点 志向型	純粹 到着型	もどる	22 (.79)	— (0)	— (0)
		はいる	113 (.65)	10 (.06)	14 (.08)
		いく	270 (.60)	6 (.01)	14 (.03)
		いれる	112 (.57)	3 (.02)	— (0)
		かえる	93 (.43)	18 (.08)	2 (.01)
		くる	114 (.36)	26 (.08)	1 (.00)
		あげる	11 (.21)	1 (.02)	— (0)
	到着 出発型	かよう	15 (.71)	2 (.10)	1 (.05)
		はこぶ	20 (.57)	4 (.11)	2 (.06)
		おちる	15 (.43)	6 (.17)	— (0)
		でる	64 (.36)	50 (.28)	7 (.04)
		おろす	13 (.34)	12 (.32)	— (0)
		だす	9 (.16)	8 (.14)	— (0)
	到着 経過型	あがる	13 (.48)	2 (.07)	3 (.11)
のぼる		22 (.48)	1 (.02)	9 (.20)	
出発点 志向型	出発 到着型	おりる	10 (.24)	17 (.40)	4 (.10)
経過点 志向型	純粹 経過型	とおる	0 (0)	2 (.07)	22 (.76)
		あるく	4 (.04)	2 (.02)	36 (.34)
	経過 到着型	わたる	12 (.48)	1 (.04)	12 (.48)
		とぶ	5 (.19)	— (0)	8 (.31)
		はしる	6 (.11)	— (0)	15 (.28)

⁷ 表 2-1 の体裁は筆者による。括弧の中の数字は、動詞の使用度数 1 回につき、その結び付きが出てくる割合を示す。

宮島（1986）は以上の調査を通して、量的な事実に基づく研究の可能性と必要性を示した。特に、格結合の可能性としての結合能力調査は、辞典・教育・言語情報処理など実用的な面において意義があると指摘している。

2.1.4 森山卓郎（1988）

寺村（1982）が取り上げた格の必須度の問題を避け、動詞全体としてどのような典型的な格のパターンがあるかを考えたのが森山（1988）である。森山（1988）は、格助詞の置換を手掛かりにして連語としての意味を設定するという方法をもとに動詞の分析を行っている。同論は動詞全般に対して、典型的にとる格助詞は何かという格のパターンに基づいて動詞分類を行っており、特に対象の移動を表す他動詞に関するパターンは次のように示している。

- (6) [ガ, ヲ, ニ／ヘ] 型：対象接着動詞句
当てる、かける、飾る、塗るなど
- (7) [ガ, ヲ, カラ] 型：対象移動動詞句
採る、分ける、外すなど
- (8) [ガ, ヲ, カラ, ニ／ヘ] 型：対象移動動詞句
 - A. 起点に重点があるもの（「対象出発的移動動詞句」）：
出す、遠ざける
 - B. 移動全体が取り上げられるもの：
上げる、動かす、移す、下げる、運ぶなど
 - C. 終点に重点があるもの：
集める、送る、降ろす、落とす、届けるなど

森山（1988）は、各動詞がとる格パターンを個別に見ていくのではなく、全体としてどのような格のパターンがあるかを見ておいて、連語としての意味を設定する考え方を取っている。また、このような捉え方によって、同一の動詞でも格のとり方によって生じる意味に違いがあることが明らかになるばかりでなく、同じ格関係の動詞の意味の共通性も明らかにすることができると指摘している。

2.1.5 李善姬 (2009)

李 (2009) は宮島 (1986) をさらに発展させた研究として取り上げることができる。李 (2009) は、実際の言語資料に現れる移動動詞と場所名詞句との結びつき方からその語彙的意味、特に範疇的意味を明らかにしている。また、範疇的意味が動詞と名詞との結合という構文的現象以外の文法現象とも関係があることを示している。李 (2009) は宮島 (1986) の方法論に倣って分析を展開しているが、考察対象としては、物理的な位置変化を表す空間的移動のみならず、田中・松本 (1997) が取り上げている〈虚構移動〉についても検討している。李 (2009) が行った移動動詞と場所名詞句との結合頻度による動詞分類は次の表 2-2 のようにまとめられる。

表 2-2 李 (2009 : 77) による移動動詞の分類と各類の範疇的意味⁸

		動詞類		範疇的意味	動詞	
出発志向動詞		純粹出発動詞		出発の位置変化	はなれる	
		出発目的地動詞			たつ、さる	
		出発到着経路動詞			おりる	
経過志向動詞	経由志向動詞	純粹経由動詞		経由動作	すぎる、こえる等	
		経由到着動詞			ぬける、わたる	
		経由経路動詞			とおる	
	経路志向動詞	経路動詞	純粹経路動詞		経過動作	わたる、たどる等
			無方向経路動詞			さまよう等
			経路到着動詞			くだる
			様態経路方向動詞			はう、あるく等
		様態経路目的地動詞			はしる	
到着志向動詞		純粹到着動詞	純粹到着動詞①		うつる、つく等	
			純粹到着動詞②		あつまる、むれる等	
			純粹到着動詞③		いく、くる等	

⁸ 李 (2009 : 77) では、「範疇的意味」の他に、「その類独自の意味」という項目も立てられているが、特に本論文とはかかわらないため引用を割愛する。

	純粹到着動詞④		はいる
	到着出発動詞		でる
	到着経路動詞		あがる、のぼる等
目的地志向動詞	純粹目的地動詞	目的地への移動	むかう
方向志向動詞	方向到着動詞	ある方向への移動	さがる
	方向経路到着動詞		すすむ
	様態方向経路目的地動詞		とぶ

表 2-2 から、李（2009）は宮島（1986）の分類より細かく動詞分類を行っていることがわかる。李（2009）の分類ではまず、上位分類として、宮島のいう〈出発点志向型〉〈到着点志向型〉〈経過点志向型〉のほかに、〈目的地志向動詞〉と〈方向志向動詞〉が増やされている。また、従来言われている〈経過点志向型〉の動詞は、通り抜ける場所が点的な場所か線的な場所かによって、さらに〈経由点〉と〈経路〉といった二種類に分けられている。

このように、李（2009）では宮島（1986）の分類の改善が試みされているが、問題点も存在する。例えば、一つ目の問題点として、データ収集に用いた資料が『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』（1995）であり、コーパスの規模としては大量とは言えないことがある。特に移動動詞の出現頻度を見ると、用例数が 1000 件以上の動詞は「いく」「くる」「でる」「かえる」「はいる」「あるく」の 6 つしかない。用例数が最も少ない「むれる」「いたる」「ぶらつく」の用例はいずれも 10 件以下である。宮島（1986）と比べて用例数がそれほど多くないにもかかわらず、宮島（1986）より細かい分類が提示されていることから、特に用例の少ない分類に関して恣意的な整理がなされている可能性があると考えられる。

また、二つ目の問題点として、目的地志向動詞と方向志向動詞の違いがはっきりしないことがある。

- (9) 東へ向かっている。 (作例)
- (10) 白線の内側に下がっている。 (作例)

- (11) この道を突き当たりまで進んでいる。 (作例)
(12) 京都に飛んでいる。 (作例)

例として、「向かう」は李 (2009) において「目的地への移動」を示すとされているが、(9) のように最終地点ではなく、プロセスの方向を示す場合もあると言える。同様に、「下がる」「進む」「飛ぶ」は方向志向動詞として整理されているが、(10) ~ (12) のようにプロセスを示す読みと、到達を示す読みの双方の読みができる場合もあると言える。このように、目的地志向の動詞は結果残存の可能性がないが、方向志向の動詞はいずれも結果残存の可能性がある。

さらに、三つ目の問題点として、宮島 (1986) は自動詞のみならず、移動を表す他動詞についてもふれているが、李 (2009) は他動詞についてふれていないことがある。移動に関して、宮島 (1986) は自動詞と他動詞がよく似た格支配をすると指摘する一方、実際の動詞分類では、自他の間で異なった分類が適用されるものも見られる。李 (2009) はこの点について言及していない。

2.2 先行研究の問題点と本論文の立場

以上見てきたように、2.1 節で取り上げた先行研究はいずれも格関係を問題にしつつ、移動動詞の分類を行っている。一方、各論考では、主に三つの問題点があると言える。一つ目は、(13) ~ (16) の整理からわかる通り、一部の先行研究では格の認定に関して曖昧な部分が見られることである。

- (13) 森田 (1982) が考えている〈格〉の中には、場所を表すデ格や材料・手段を表すデ格も入っている。
(14) 寺村 (1982) は動詞文において、共起が必要となる度合いによって、場所表現をはじめとする補語を「必須補語」「準必須補語」「副次補語」に分けているが、必須かどうかはそれほど簡単に区別できるものではない。日本語の場合、文脈や場面によって、省略されることはよくある。
(15) 森山 (1988) において、〈格〉についての定義は、寺村 (1982) などの

「必須補語」と基本的に変わるところがないと主張されている。ただし、代換を起こすような場合は、デ格やト格が格と見なされていることもある。

- (16) 宮島 (1986) とそれを継承した李 (2009) は〈格〉あるいは〈格支配〉に対して同じ見方を取っている。寺村 (1982) の「必須補語」と異なり、必須であるかどうかを判断するのを避け、量的な事実から、共起関係を捉えている。

上述したように、従来の格体制に入るはずがないものを格として見なす先行研究も少なくない。ある動詞とある格との結びつきが必須であるかどうか、(必須であるならば) どれくらいの必須度があるかを判断するのは非常に難しい。移動動詞の場合は、可能性として起点格、経路格、着点格のいずれとも結びつく能力を持っていると言えるが、特に、格体制に入っていないへ格やマデ格は移動の本質に関わる格として広く認識されている。これらの格をどのように処理するのかによって移動動詞の本質をどのように説明するかは変わってくると考えられる。そこで、本論文は、『日本語基本動詞用法辞典』に従い、そこに出てくる格を基準に考えることにする。また、宮島 (1986) が提示した結合頻度調査を参考にしながら『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ) における対象移動動詞と場所名詞句との結合頻度の調査を行う。

二つ目は、先行研究において同じ動詞が異なる分類の仕方で整理されていることである。例えば、森田 (1982) も森山 (1988) も動詞が取る格のパターンを挙げているが、森田 (1982) では[カラ～ニ/へ]パターンを取る「出す」「移す」「運ぶ」がひとつのグループにまとめられているのに対して、森山 (1988) では、「出す」は移動の起点に重点を置いている動詞として、「移す」と「運ぶ」は移動全体が取り上げられる動詞として、分けて捉えられている。このことから、同じ格のパターンを持つ動詞であっても、実際の使用状況を考察すると、結合頻度は格によって異なり、すべてが同等なわけではないことが示唆される。

上記を踏まえ、特に先行研究において共通して挙げられている動詞の分類をまとめると、次の表 2-3 のようになる。

表 2-3 先行研究の比較⁹

	宮島 1986	森山 1988	李 2009
あがる	到着経過型	移動全体	到着経路
あげる	純粹到着型	移動全体	?
集まる	?	終点に重点がある	純粹到着
集める	?	終点に重点がある	?
はいる	純粹到着型	終点に重点がある	純粹到着
いれる	純粹到着型	?	?
動く	?	移動全体	?
動かす	?	移動全体	?
移る	純粹到着型	移動全体	純粹到着
移す	?	移動全体	?
送る	?	終点に重点がある	
おりる	出発到着型	起点的な経路	出発到着経路
おろす	到着出発型	終点に重点がある	?
おちる		終点に重点がある	?
おとす	純粹到着型	終点に重点がある	?
下がる	?	移動全体	方向到着
下げる	?	移動全体	?
進む	到着経過型	終点に重点がある	方向経路到着
進める	?	終点に重点がある	?
でる	到着出発型	出発動詞句	到着出発
だす	到着出発型	起点に重点がある	?
届ける	?	終点に重点がある	?
とおる	純粹経過型	経路動詞句	経由経路
とおす	純粹到着型	?	?
飛ぶ	経過到着型	移動全体・経路	様態方向経路目的地
流す	?	終点に重点がある	?
はこぶ	到着出発型	移動全体	?

⁹ 表 3 では該当する動詞が考察対象として扱われていない場合「?」で示している。

表 2-3 から、先行研究ごとの主な違いとして次の 3 点があることが窺える。

- (17) 宮島 (1986) がヲ格をまとめて経過点として扱っていることは、李 (2009) との大きな違いである。このことは 2 つの論文における、ヲ格と共起する動詞の分類から窺える。
- (18) 森山 (1988) の分類の中で最も特徴的なのは移動全体が取り上げられる動詞のタイプである。宮島 (1986)、李 (2009) と比べて同じ動詞に対する分類のゆれもこのタイプの動詞の存在によって生じることが多いようである。また、自他対応をなす移動動詞はほぼ同様な格関係を持つとされることから、対応を持つ自動詞と他動詞が同じタイプの動詞に分類されている点も他の論考と異なる。
- (19) 李 (2009) は宮島 (1986) をさらに発展させた研究であるため、動詞分類によく似た傾向が見られる。ただし、李 (2009) が新しく提示した目的地志向、方向志向のタイプの動詞に関しては宮島 (1986) の分類と違いがある。この点についての批判は 2.1 節ですでに述べた。

また、(17) ~ (19) のような違いが生じた理由として、以下の 3 点が考えられる。まず、森山 (1988) は、「筆者の判断で、必須とする格を考えたリストをもととした (修正の余地がないわけではない)」(森山 1988 : 66-67) と述べている。これに対して宮島 (1986) は実証的に移動の本質に関わる格を捉える点は評価されるが、用例数が少ないという問題点がある。特に、宮島の調査において「いれる」「おろす」などの動詞が着点を表すマデ格と共起する例は確認されておらず、他にも数例しか共起しないものもある。したがって、より多くのデータを収集していれば、調査結果に違いが生じた可能性もあると考えられる。同様に、李 (2009) については、前述したように目的地志向の動詞は結果残存の可能性がないが、方向志向の動詞はいずれも結果残存の可能性があり、李 (2009) が新しく提示した分類の妥当性は更なる検討を要する。

三つ目は、他動詞の取り扱いに関してである。以上取り上げた先行研究は主に自動詞を中心に考察を行ったが、寺村 (1982)、宮島 (1986)、森山 (1988) は自動詞と形態的に対立をなす他動詞についてもふれている。上述の表 2-3 から森山 (1988) が自他対応をなす移動動詞をまとめて同じタイプの動詞に分類していることはわかるため、以下では、自他で異なる分類を設けている寺村

(1982) と宮島 (1986) の論についてさらに補足しておこう。

まず、寺村 (1982) の動詞分類では、到達点と縁が深いとされる自動詞のグループ (3) と他動詞のグループ (5) がほぼ一致していることが分かる。ただし、その際、出どころ (あるいは出発点) との共起に関して違いが見られる。特に自動詞の A 類、B 類の場合、カラ格は副次補語として現れるが、C 類とは共起しない。一方、他動詞の場合、カラ格は A 類について副次補語として取ることがあるが、B 類、C 類は取らない。

次に、宮島 (1986 : 50) では、すでに言及した通り「自動詞と他動詞とは、移動について、よくにた型の格支配をする」と指摘されているものの、同論において実際には自他対応の移動動詞は以下の表 2-4 のようにまとめられている。

表 2-4 宮島 (1986) が扱う自他分類

動詞	種類
あがる〈自〉	到着経過型
あげる〈他〉	純粹到着型
おちる〈自〉	到着出発型
おとす〈他〉	純粹到着型
おりる〈自〉	出発到着型
おろす〈他〉	到着出発型
でる〈自〉	到着出発型
だす〈他〉	
とおる〈自〉	純粹経過型
とおす〈他〉	純粹到着型
はいる〈自〉	純粹到着型
いれる〈他〉	

表 2-4 を見ると、宮島 (1986) が取り上げている 6 対の自他対応移動動詞のうち、対応する他動詞も自動詞も似たような動詞分類が示されているのは「はいる—いれる」と「でる—だす」の 2 対のみである。「あがる」「おちる」「とおる」は対応する他動詞が自動詞と異なった動詞分類となっており、いずれも〈純

粹到着型)に属することが分かる。また、「おりる」と「おろす」の対は、自動詞で優位な要素〈出発点〉が他動詞で二番目に下がり、逆に自動詞で二番目の要素〈到着点〉が他動詞で優位になることがわかる。以上の4対の動詞を観察すると、〈到着点〉の要素が他動詞においていずれも強化される点で共通していることが窺える。

以上の三つの問題点に対して、本論文が取る立場を改めて整理しておく、次の通りである。

- (20) 対象移動動詞と共起可能な格との結合が必須であるかどうか、どれぐらいの必須度があるかを判断することを避け、本論文においては、『日本語基本動詞用法辞典』をベースにして、宮島(1986)が提示した結合頻度調査を参考にしながら検討を行う。具体的には、BCCWJにおける対象移動動詞と場所名詞句との結合頻度の調査及び考察を行う。
- (21) 先行研究において生じている分類の曖昧さを踏まえ、実際の言語資料と量的事実に基づいて新たな対象移動動詞の分類を試みる。
- (22) 自他対応の移動動詞は格結合頻度と動詞分類において異なった傾向が見られるため、改めて宮島(1986)の指摘を検証する。また、自他で差異が生じる移動動詞に注目し、宮島(1986)の動詞分類から導き出された、「他動詞において〈到着点〉の要素が優位にある」という傾向性を検証する。

第3章 格結合頻度に基づく対象移動動詞の分類

—二格、へ格、マデ格を中心に—

3.0 本章の概要

第2章では先行研究を概観し、本論文が宮島（1986）を参考に調査を行うことを述べた。特に宮島（1986）が二格、へ格、マデ格を着点としてすべて同等に扱っているが、この点については更なる検討の余地があると考えられる。そこで本章では、対象移動動詞と二格、へ格、マデ格との結合頻度に基づき、新たな動詞分類を試みる。

本章の構成は次の通りである。まず、3.1節では、日本語において二格、へ格、マデ格が類義的な格として交替できるという現象を取り上げる。次に、3.2節では、二格とへ格及び、二格とマデ格に関する先行研究を概観し、へ格とマデ格に共通する〈継続性〉に注目する。続いて、3.3節では、本論文で扱う考察対象の範囲及び調査基準を示し、タイプが異なる動詞の格結合頻度を示す。また、そのような格結合に現れる偏りから対象移動動詞の格結合頻度を調査する必要性が示唆されることを述べる。さらに、3.4節では対象移動動詞の格結合頻度を調査し、続く3.5節で対象移動動詞と二格及びへ格との結合頻度を散布図で示す。それらの取り組みにより、本論文で扱う考察対象を4種類に分けることができることを示す。3.4節及び3.5節を踏まえ、3.6節では、対象移動動詞と二格及びマデ格との結合頻度に関して新たに提案した分類の仕方を検証し、当該の分類が後の章の内容の基盤となることを論じる。最後に、3.7節では、本章の内容をまとめる。

3.1 はじめに

まず、以下の例文を見てみよう。

- | | | |
|-----|-------------|------------------|
| (1) | 東京に行く。 | (益岡・田窪 1987: 56) |
| (2) | 東京へ行く。 | (益岡・田窪 1987: 56) |
| (3) | 学校{に／まで}行く。 | (益岡・田窪 1987: 58) |
| (4) | 駅{まで／?に}歩く。 | (益岡・田窪 1987: 58) |

日本語では、二格とへ格が交替できる現象があることが、先行研究でしばしば指摘されている。例えば、例文 (1) (2) が示すように、二格、へ格は移動を表す動詞とともに使われると移動の目的地を表すことができる。一方、例文 (3) (4) から、二格とマデ格の対では、両方とも取れる動詞もあれば、マデ格とのみ共起しやすい動詞もあることが分かる。このように、〈移動性〉という素性を持つ動詞は「起点格」「経路格」「着点格」と結びつきやすいと想定できるが、実際の言語資料においては多様な結合能力を示すことが窺える。本章では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) 及び検索システム『中納言』を用いて個々の対象移動動詞と二格、へ格、マデ格との結合頻度を調べることを通して、対象移動動詞の分類を試みる。

3.2 先行研究

3.2.1 「に」「へ」についての先行研究

日本語には、「京へ筑紫に坂東さ」という室町時代の諺がある。その意味は、方向を示す際、京都地方では「へ」、九州地方では「に」、関東地方では「さ」という助詞をそれぞれ用いるというように、方言には特色があるということをととえていう¹⁰。この諺から、へ格、二格、サ格の使い方には地域差があることがわかる。また、特にへ格と二格に関しては、方言の差異のみならず、時代の流れとともに用法も変わってきたようである。そこで以下では、時代差と地域差に基づきへ格と二格について論じる先行研究として、青木怜子 (1956)、鶴岡昭夫 (1979、1980、1981)、森山卓郎 (1988)、矢澤真人・橋本修 (1998)、

¹⁰ 『日本国語大辞典』による。

<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2002011edf16Eo6l2Ha9> (最終確認日：2021年9月2日)

矢澤真人（1998）を取り上げる。

3.2.1.1 青木怜子（1956）

まず、通時的なへの用法の変化を扱う研究として、青木（1956）を取り上げる。青木（1956）は二格とへ格を対比しながら、上代から室町時代までの日本語の変化を概観しており、特に助詞への意味発達の歴史について次のようにまとめている。

- (5) 「へ」助詞は平安時代中期以前に於いては「移動性動作の目標」を示し、言語主体の現在地点から遠く離れた地点へ向かって行く、の意を担っている」。それが、院政時代になると、進み近づく場合をも含めて「すべての移動性動作の目標」を示すことが可能となり、鎌倉時代初期には、移動動作そのものではなく、それを前提とした「到着点」を示す用法が現れる。そして、鎌倉時代中期には「移動性を全くもたぬ動作に対しての目標」をも示すに至る。室町時代には、以上次々と用法が発展拡大して来たが、すべて動作の目標を示すという点においては一貫した中心的な用法から外れた「動作の行われる場所」を示す用法が現れた。

青木（1956）の指摘から、通時的にへの意味は発展・拡大してきたことが示唆される。

次に、近代語及び現代語における二格とへ格についての研究として、靄岡昭夫（1979、1980、1981）、森山卓郎（1988）、矢澤真人・橋本修（1998）、矢澤真人（1998）を取り上げる。

3.2.1.2 靄岡昭夫（1979、1980、1981）

靄岡（1979）は動詞「行く」「来る」を中心に、助詞ニとへが地域によってどのように使い分けられているのかを調べたものである。同論では、調査を通

して、近代（明治以降）の文章の中でも、作者の出身地によって、北九州を中心とするニを多く用いる地域と、京阪・関東を中心としたへを多く用いる地域との対立・並存が見られることが明らかにされている。特に、森鷗外作品ではニを多く用いる、すなわち北九州的傾向がやや見られる一方、夏目漱石作品ではへを多く用いる、すなわち京阪・関東的傾向が見られるということが指摘されている。

鶴岡（1979）に後続する鶴岡（1980）は、「行く」「来る」に限らず、夏目漱石の『坊っちゃん』と森鷗外の『雁』におけるニ格とへ格を受けるすべての動詞について調査を行っている。その結果、『坊っちゃん』は圧倒的にへ格を多く用いるのに対して、『雁』はニ格を多く使う傾向があることを示している。

鶴岡（1979、1980）を受け、鶴岡（1981）は、作品ごとにニ格、へ格を受ける動詞とニ格、へ格との結びつきの頻度を調べており、また助詞の前に来る名詞とニ、へとの音韻的傾向の面から、2語の使い分けに関わる要因の分析を試みている。鶴岡（1981：737）によると、ニとへの直前に来る音節の母音・撥音ごとの用例数は表 3-1 の通りであるとされる。

表 3-1 「へ」と「に」の前へ来る母音・撥音

作品	前の名詞末尾助詞	a	i	u	e	o	n	計
		坊っちゃん	へ	91 (82.7)	51 (70.8)	25 (73.5)	36 (72)	133 (89.9)
	に	19 (17.3)	21 (29.2)	9 (26.5)	14 (38)	15 (10.1)	19 (61.3)	97 (21.8)
雁	へ	25 (30.9)	38 (46.3)	4 (28.6)	11 (15.5)	61 (46.2)	1 (5.3)	139 (34.9)
	に	56 (69.1)	44 (53.7)	10 (71.4)	60 (84.5)	71 (53.8)	18 (94.7)	259 (65.1)

表 3-1 を踏まえ鶴岡（1981）は、『坊っちゃん』と『雁』とを比較すると、両者とも撥音 n のあとには「に」の方が多く、『雁』では e の音節あとに「へ」が来にくいのに『坊っちゃん』では、全体的な平均値とあまり差のない

数の「へ」がのe音節のあとに来ていること」がわかると述べている。

以上見てきたように、鶴岡による一連の論考では、北九州地域における二格の多用、京阪・関東圏におけるへ格の多用が明らかにされている。特に、音韻的な面から二格とへ格の使い分けに関わる要因についての指摘は管見の限り鶴岡（1981）を除いて存在せず、注目に値する。

ただし、鶴岡の論考では未だ課題も残されている。まず、動詞と助詞との結合頻度から、明らかに『坊っちゃん』のほうが『雁』と比べて、へ格が多く用いられることがわかるが、その結果が動詞とどのような意味的結びつきに基づいているのかは十分に分析されていない。また、ニとへを使い分ける要因について、鶴岡（1981：740、741）が、「「…へ（に）出る」とくらべて「…へ（に）出ている」のようにあとに状態性用言の付く場合はどうか、逆に「…へ（に）出てくる」のように下に移動性の強い動詞が来るとどうか…」と指摘している通り、アスペクト形式をはじめとする他のアプローチから研究する余地も未だ十分にあると考えられる。

3.2.1.3 森山卓郎（1988）

森山（1988）は動詞句の格の類型からニ／へを置き換える妥当性について論じた。森山（1988：97）では、ニ／への使い分けは、「単に、時代や方言（地方）差だけによるのではなく、それ以外にも、文法的な意味による使い分けも考えなくてはならない」と指摘している。方法としては、方言的な差異、時代的な差異を除外して、ニとへが共存している現代の関西方言の話者を対象としてアンケート調査を行った。アンケートをA、Bの二つに分け、その中の設問をいくつか変えて回答を比較した。結果、次のような結論が指摘されている。

- (6) 「から」格が共起すると、「へ」格の出現率が高くなる。
- (7) 人をめあてとする場合は、極端に「へ」格の出現率が低くなる。もっとも、「から」格があれば、幾分出現の余地がある。
- (8) 動詞のなかには、接着を意味とするもので、「貼る」「乗る」「着く」など、基本的に「に」格をとる傾向のあるものがある。
- (9) 「中」があれば、より「へ」格が出現しやすい。

森山（1988）には助詞の直前に来る名詞の意味素性や、動詞句の意味、格助詞の組み合わせなどから、ニとへが出現しやすい環境を考えた点で重要な意義があると考えられる。しかし、同論が取り上げた動詞は、広義の移動動詞の一部を除いてほとんどがいわゆる移動の着点に注目する動詞である¹¹。したがって、より移動の経路あるいはへ格が出やすい動詞に注目した際、以上の指摘が当てはまるかどうかは更なる検討の余地があると考えられる。

3.2.1.4 矢澤真人・橋本修（1998）、矢澤真人（1998）

矢澤・橋本（1998）及び矢澤（1998）は近代語・現代語の語法の変化の一つとして、文学作品に現れる格助詞への用法に注目し、近代から現代までの文学作品におけるへ格使用頻度について調査している。その結果、次のような傾向があると指摘している。

- (10) 「へ」格の使用頻度は近代から現代にかけて減少する傾向がある。
- (11) 「へ」格の出現数に占める「への」の使用頻度は増加する傾向がある。
- (12) 動詞ごとに場所「に」格と「へ」格を比較した場合、かつて「へ」格が優勢であった動詞でも、「に」格が用いられるようになる傾向がある。

さらに、ニ格とへ格両者の関係について、へ格は外心的な方向を表し、より動的であるが、場所ニ格は着点を示し、より静的であると解釈されている。

『坊っちゃん』にへ格が多用されるのは方言的な差異の現れであるとする鶴岡（1979、1980、1981）の指摘と異なり、矢澤・橋本（1998：18）は、『坊っちゃん』では、「する」型で文が終止することも多く、動きと表現の即時性が高い。移動動作も動きの瞬間を描写しようとするところから、動作性や方向性を特に示す「へ」の使用が高くなっている」と解釈している。特に、矢澤（1998）では、ニ格とへ格の日本語文法論における位置づけと両者が持っている意味素

¹¹ 森山（1988）で取り上げた動詞は「いく」「追い込む」「はる」「にげる」「伝える」「入る」「譲る」「かえす」「着く」「もぐる」「贈る」「引っ張る」「教える」「乗る」の14語である。

性について指摘を行っており、注目に価する。

続いて、次の節ではニ格とマデ格に注目する先行研究を概観する。

3.2.2 「ニ」「マデ」についての先行研究

3.0 節の冒頭で述べたように、宮島（1986）では、マデ格をニ格と同等に着点として扱っており、この点に関して更に検討する余地があると言える。まず、以下の例文を見ていく。

(13) 新幹線で青森に行った。 (作例)

(14) 新幹線で青森まで行った。 (作例)

(13) のように言った場合、移動動作は青森で終了する。一方、(14) のように言った場合、移動動作は青森で終了しても良いが、その後に「船で北海道に行った」という動作が後続する読みも可能になる。すなわち、移動動詞とともに使われるときは、ニ格は通常、移動の着点を表すが、マデ格は移動の到達範囲を表し、必ずしも着点を表すわけではない。この点で、〈着点〉と〈到達範囲〉とは区別する必要がある。この節では、ニ格とマデ格との違いに着目する影山太郎（1996a）と北原博雄（1998）を中心に概観する。

3.2.2.1 影山太郎（1996a）

影山（1996a）は、英語では移動に関わるすべての場所表現が PATH¹²という単一の意味概念のもとに統合されているが、日本語では、PATH の中身を細分化する必要があることを指摘している。同論は、日本語の場合、移動の過程は起点と着点、途中の経路（Path）という2つの領域に分けることができ、このような考え方に基づいて移動動詞は〈起点／着点指向〉と〈経路指向〉という2つのタイプに分類できることをと論じている。さらに、経路指向動詞の典型

¹² この PATH は本論文で言う「経路」とは異なる。Jackendoff の言う PATH には TO, FROM, TOWARD, AWAY-FROM, VIA が統合されている。

は「泳ぐ」などのような移動様態動詞とされ、到達範囲を示すマデ格であれば、移動様態動詞と自由に共起することができると指摘している。

(15) 崩れかけの石柱の間を急いで歩いた。

(影山 1996a : 97, (15) は原文 (12b) 下線は筆者)

(16) 真直ぐに床を横切って、演奏中の画家のところへ歩くことだった。

(影山 1996a : 99, (16) は原文 (17c) 下線は筆者)

(17) 銀座通りを1丁目から3丁目まで歩く。

(影山 1996a : 100, (17) は原文 (19c) 下線は筆者)

(18) ?*彼は絵を習っているスタジオに歩いたものだ。

(影山 1996a : 97, (18) は原文 (13a) 下線は筆者)

(15) ~ (18) の例文を踏まえ影山 (1996a : 100) は、「日本語の移動様態動詞は移動経路 (12)、方向 (17)、および到達範囲 (19) を表す表現となら共起できるが、明確な着点表現 (13) とは相容れないという性質を持っている」と述べている。この説明は 3.1 節で取り上げた例文 (4) 「駅まで / ? に歩く」を上手く解釈できる。「歩く」は移動様態動詞であり、到達範囲を表すマデ格と自由に共起できるが、着点を表すニ格とは相容れない。

ただし、以下の (19) ~ (22) に示すように、影山 (1996a) で経路指向動詞であるとされる動詞の中でも、「飛ぶ」「進む」などの自動詞や、本論文の考察対象である移動を表す他動詞では、意図的動作主と着点のニ格との共起がそれほど難しくないことがわかる。

(19) パリの公演が終わって、秀実は日本へは帰らず一行と別れてメキシコに飛ぶことになった。(野本一平著『箸とフォークの間』2002)

(20) 元々の目的地だったノースカロライナ州に到着した時には、意気揚々としていた。ニューヨークに飛んだ時も、まだ何も不都合はなかった。

(川端悠人著『ニコチアナ』2001)

(21) だまって、ヴァンスはろうかにひきかえし、そのまま、まっすぐドラッカーの部屋にすすんだ。

(ヴァン・ダイン著/浜野サトル訳『殺人は歌ではじまる』1986)

(22) 美奈子の驚きの声にも構わず書斎の中に進み、自分では読むことので

きないモニターの文章をくいいるように凝視した。

(丘野ゆうじ著『破界戦士』1994)

3.2.2.2 北原博雄 (1998)

北原 (1998) は、移動動詞と共起するニ格句とマデ格句の異同を、限界性に基づいて語彙意味論的に説明する研究である。北原の言う移動動詞とは、「行く」「入る」のような位置変化自動詞と、「泳ぐ」「走る」のような移動様態動詞あるいは移動動作動詞とを一括したものである。限界性に基づく動詞分類から移動動詞を考えると、非限界動詞が移動様態動詞に、限界動詞が位置変化自動詞にそれぞれ対応する。

北原 (1998) によれば、非限界動詞はマデ格句とは共起するが、ニ格句とは共起しない、あるいは共起しにくいとされる。一方、限界動詞は、ニ格句ともマデ格句とも共起するが、「入る」「移る」のようにマデ格句とは共起しない、あるいは共起しにくいものもあるとされる。

また、北原 (1998) は、移動動詞と共起するニ格句・マデ格句と数量表現¹³との共起関係の適格性も観察している。同論の観察をまとめると次のようになる。

- (23) マデ格句が存在する移動動詞句は、過程を表すとともに、
 - (i) マデ格句が限界点を明示化する。あるいは、
 - (ii) マデ格句が到達範囲を表す。
- (24) ニ格句が存在する移動動詞句は、過程を表さず、ニ格句は、点的に限界点を明示化する。

(北原 1998:93)

(23) (24) の指摘から、マデ格とニ格は過程あるいはプロセスを表すかどうかにおいて異なっていることが示唆されている。

¹³ 数量表現とは、「1時間で500m走る」における「1時間で」や「500m」のような表現を指す。

3.2.3 先行研究の整理

以上、先行研究を概観し、併せてその問題点を示してきたが、改めてここまでの内容を整理しておく。

- (25) ニ格とへ格について、鶴岡の一連の論考(鶴岡 1979、1980、1981)は、動詞と助詞との結合頻度から、『坊っちゃん』のほうが『雁』より、へ格を多く用いるという傾向を明らかにしている。ただし、量的な結果を示すにとどまり、その結果が動詞とのどのような意味的結びつきによって生じるのかまでの分析は十分になされていない。また、森山(1988)が取り上げた動詞は範囲が狭く、分析に限界があると言える。動詞の種類を増やした際、同論の分析が当てはまるかどうかはさらに検討する余地がある。
- (26) ニ格とマデ格について、影山(1996a)と北原(1998)はいずれも経路指向動詞とされている動詞が着点を表すニ格と相容れないとする点で類似の指摘をしている。ただし、実際には「飛ぶ」「進む」などの自動詞や、本論文の考察対象である対象移動動詞では、着点のニ格との共起がそれほど難しくないと問題がある。

以上の問題点を踏まえ、本章では、対象移動動詞とニ格、へ格、マデ格との結合頻度を調査する。特に、対象移動動詞とニ格、へ格、マデ格との結合頻度を散布図で示すことにより、動詞の類の可視化を目指す。さらに、対象移動動詞とニ格、へ格、マデ格との結合頻度に基づいて新たな対象移動動詞の分類の提示を試みる。

3.3 調査対象と調査結果

3.3.1 調査対象

本論文では調査対象を選定するに際して、『分類語彙表』と『日本語基本動

詞用法辞典』を参考にした。手順としては、まず『分類語彙表』から調査対象の範囲を決めた。『分類語彙表』は大分類として、語を、「1. 名詞の仲間——体の類」「2. 動詞の仲間——用の類」「3. 形容詞の仲間——相の類」「4. その他の仲間」の4類に分けている。そのうち用の類に注目し、対象の移動と関わる項目を抜き出すと、以下のようになる。

「2用の類」の「2.1 抽象的關係」の「2.151₀動き」「2.151₁揺れ・振れ」「2.151₂停止」「2.151₃起立・横臥など」「2.151₄傾斜・転倒など」「2.151₅据え・置き・つり・掛けなど」「2.151₆はめ・うずめ・投げなど」「2.152₁移動・発着」「2.152₃走り・飛び・流れなど」「2.152₄通過」「2.152₅追い・逃げなど」「2.152₆進退」「2.152₇往復」「2.153₀出入り」「2.153₁込み」「2.154₀上がり下がり」「2.154₁乗降・浮沈」「2.155₂散り・分かれなど」「2.155₄結び・重ね・積み」「2.155₅集合」「2.156₀接触・接近」「2.156₁隔離」「2.156₂寄り合い・並び」「2.156₄押し・引き・突き・すれなど」「2.157₁破壊・切断など」「2.17 位置・方向」

「2用の類」の「2.3 精神および行為」の項目の「2.333 生活・衣食住」「2.339₂足の動作」「2.339₃手の動作」

上記で挙げられている項目から移動を表す他動詞に属する和語の単純動詞を選び出した。さらに、『日本語基本動詞用法辞典』を参考にしなが、調査の対象を27語に絞った。『日本語基本動詞用法辞典』に立項されている動詞は意味用法ごとに文型が提示されている。これらの動詞は、提示されている共起格によって以下の表3-2のように分けることが出来る。ただし、辞典に示されている格のパターンはあくまでも一つの可能性に過ぎず、実際の言語資料においては、動詞と格との結合パターン及び結合頻度も異なるかもしれない。したがって、この分類方法は今後、実際の言語資料における使用状況の観察を通して検証すべきであると考えられる。

表 3-2 対象移動動詞リスト

共起格	例
カラ～ニ／ へ／マデ	上げる、集める、入れる、動かす、移す、送る、落とす、おろす、転がす、下げる、進める、出す、吊るす、運ぶ

カラ	奪う、抜く、外す、離す
ニ／へ	浮かべる、置く、配る、積む、通す、届ける、飛ばす、流す、並べる

3.3.2 調査方法

本論文は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び検索システム「中納言」を用いて調査を行った。具体的には、「中納言」のキーの語彙素を 3.3.1 節で挙げた語に指定し、用例の検索を行った。また、次の基準に従って、実際に分析の対象とする用例を選定した。

- (27) 各動詞の表記上の違い（漢字か平仮名かなど）は問わない。
- (28) 各動詞の原形と「～テイク／テクル」形について、宮島（1986：46）では、「移動に直接関係する格支配のうえで、ちがった性質をもっている」と指摘し、別の動詞とみなしている。本論文もその考えに従うことにする。
- (29) 「足を運ぶ」「腰を下ろす」のようなコロケーションは移動を表すというより、慣用句であると考えられるため、対象外とする。
- (30) 「キッチンから運んできた料理」のように、連体修飾的なものも考察対象として扱う。
- (31) 「～はじめる」「～つづける」など局面動詞が付いたものは考察対象から除外する。

3.3.3 格結合頻度の偏り

考察対象動詞全体の格結合頻度を示す前に、李（2009）に倣って代表的な対象移動動詞を取り上げ、それらの格結合頻度の偏りを観察する。ここでは、「移す」「出す」「運ぶ」「離す」を例として、格結合頻度を見ることにする。「移す」「出す」「運ぶ」「離す」は、移動という範疇的意味を持つ動詞であり、いずれもニ格、へ格、マデ格、カラ格と結びつくことができる。ところが、同じ結合

能力を持つ動詞であっても、実際の場所名詞句との結合においては、異なる結合頻度がある様子が見られる。

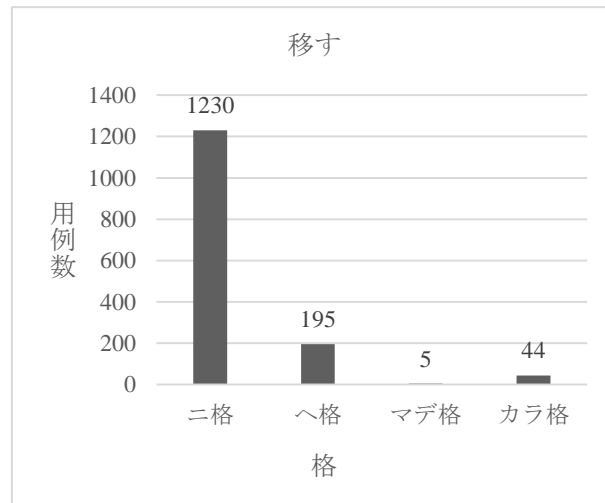


図 3-1¹⁴ 「移す」の格結合分布

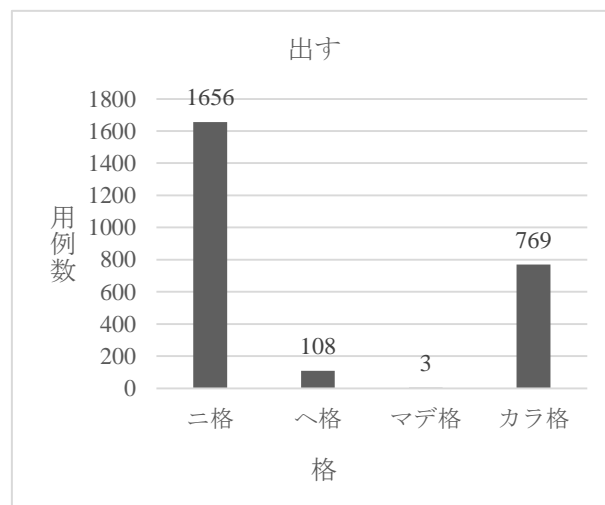


図 3-2 「出す」の格結合分布

¹⁴ 図 3-1～図 3-4 は BCCWJ から確認された用例数のことを指す。

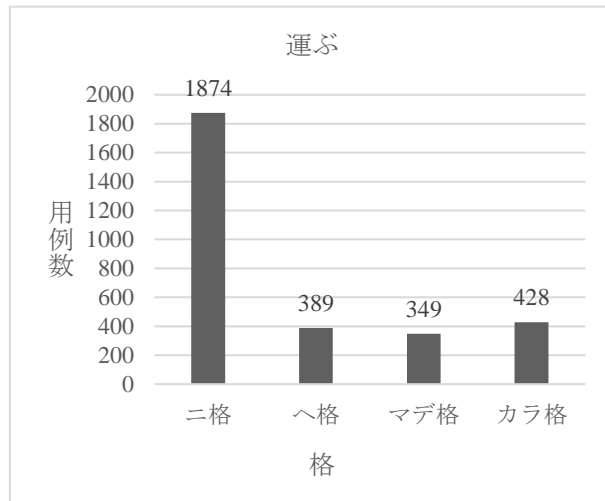


図 3-3 「運ぶ」の格結合分布

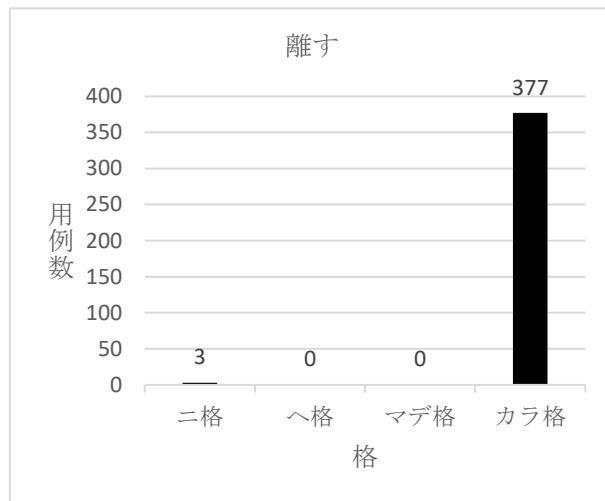


図 3-4 「離す」の格結合分布

まず、「移す」の場合、図 3-1 に示すように、コーパスにおいてはニ格との結びつく例が極めて多く見られ、それ以外の格との結びつきはそれほど多くない。次に、図 3-2 を見ると、「出す」はニ格との結びつく例が極めて多く、また、次いでカラ格との結びつきも他の動詞より多いことがわかる。続いて図 3-3 を見ると、「運ぶ」はニ格との結びつく例も多いが、ヘ格、マデ格、カラ格との結びつきも同等に見られる。一方、最後に図 3-4 を見ると、「離す」は「移す」「出す」「運ぶ」とは異なる結合分布を示していることがわかる。「離す」の場合、カラ格との結びつく例が極めて多く、その他の格とはほとんど共起しない傾向が窺える。このように、同じ結合能力を持つ動詞であっても実際の格結合においては少なからず偏りが見出されることが窺える。したがって、対象移動

動詞と各種の場所名詞句との結合頻度全般について調査する必要があると考えられる。

3.4. 対象移動動詞の格結合頻度の調査結果

3.3.2 節で示した調査方法と選定の基準に従って用例の選定を行った結果、該当例数を得た。これをもとに、表 3-2 に掲げた対象移動動詞が取る格のパターンと実際の結合頻度を以下の表 3-3 に示す。

表 3-3 対象移動動詞と場所名詞句との結合頻度¹⁵

	に 格 (%)	へ 格 (%)	まで 格 (%)	から 格 (%)	を 格 (%)	から ～に (%)	から ～へ (%)	から ～まで (%)	用 例 数
上げる	40 22.73	8 4.55	7 3.98	24 13.64	—	2 1.14	—	—	176
集める	383 7.84	13 0.27	—	282 5.77	—	7 0.14	1 0.02	2 0.04	4887
入れる	1848 52.44	138 3.92	30 0.85	342 9.7	—	8 0.23	4 0.11	—	3524
浮かべる	104 52	2 1	—	1 0.5	—	—	—	—	200
動かす	63 5.12	28 2.28	13 1.06	13 1.06	—	14 1.14	9 0.73	3 0.24	1230
移す	1230 60.74	195 9.63	5 0.25	44 2.17	—	175 8.64	35 1.73	1 0.05	2025
奪う	—	—	—	159 21.7	—	—	—	—	734

¹⁵ 宮島（1986）では、へ格とへト格を同様に扱っているが、矢澤真人・安部朋世（2000）では両者を別のものとして扱っている。本論文は矢澤・安部（2000）と同じ見方を取り、へト格を取る用例を分析の対象から除外した。

表 3-3 について、上の数字は格成分を取る用例数を表しており、下の数字は格成分を取る用例が全体に占める割合を表している。また、用例数には、格成分を取っていない例も含めている。

置く	4885 50.3	169 1.74	—	2 0.02	—	—	—	—	9705
送る	2300 23.7	463 4.66	354 3.65	401 4.1	—	94 0.97	43 0.44	8 0.08	9700
落とす	412 13.07	67 2.12	2 0.06	93 2.95	—	5 0.16	4 0.13	—	3152
下ろす	195 12.74	38 2.48	36 2.35	151 9.8	—	10 0.65	2 0.13	2 0.13	1531
配る	362 34.2	20 1.88	—	11 1.04	—	3 0.28	1 0.09	—	1059
転がす	12 2.96	6 1.48	3 0.74	9 2.22	—	—	2 0.49	1 0.25	405
下げる	230 23.3	7 0.7	14 1.4	94 9.5	—	3 0.3	—	—	988
進める	74 21.7	25 7.3	16 4.7	5 1.5	—	1 0.3	2 0.6	1 0.3	341
出す	1656 50.74	108 3.31	3 0.09	769 23.56	—	23 0.7	3 0.09	—	3264
積む	515 37.9	1 0.07	3 0.22	6 0.44	—	4 0.29	—	—	1358
通す	244 12.5	70 3.5	—	2 0.1	—	3 0.15	—	1 0.05	1956
届ける	575 25.3	120 5.28	56 2.46	56 2.46	—	9 0.4	5 0.22	2 0.09	2273
飛ばす	72 6.69	38 4	27 2.51	31 2.88	37 3.44	3 0.28	5 0.46	4 0.37	1081
吊るす	273 44.68	6 1.01	—	67 11.36	—	—	—	1 0.16	589
流す	412 13.37	100 3.2	14 0.45	129 4.2	—	10 0.32	5 0.16	1 0.03	3080
並べる	819	10	2	27	—	2	4	1	3132

	26.14	0.3	0.06	0.82		0.06	0.12	0.03	
抜く	—	—	—	195 8.7	—	—	—	—	2238
運ぶ	1874 44.1	389 9.16	349 8.21	428 10.07	18 0.42	48 1.13	55 1.29	19 0.45	4249
外す	—	—	—	371 12.4	—	—	—	—	2984
離す	3 0.19	—	—	377 24.77	—	—	2 0.13	—	1522

表 3-3 から、以下の四点が明らかであると言える。

一つ目は、結合頻度が一番高い格がニ格であるかカラ格であるかによって、すべての動詞を大きく二分することができるということである。

二つ目は、ニ格との結合頻度が一番高い動詞の場合、ニ格に次いで二番目高い格パターンは動詞によって異なる傾向があるということである。例えば、「移す」の場合、二番目に高い結合頻度を示すのはへ格であるのに対し、「出す」「おろす」などはカラ格である。

三つ目は、カラ格が一番高い結合頻度を示した動詞は、カラ格以外の格とは共起しない、あるいは共起しにくい傾向があるということである。例えば、「奪う」「抜く」「外す」などはカラ格のみと共起しているが、カラ格以外の格とはほぼ共起しない。

四つ目は、動詞によって、格パターンごとの用例数の全体に占める割合は異なっているということである。例えば、「集める」「動かす」「転がす」などの動詞がニ格、へ格、マデ格、カラ格と結びつく例文の数は全体の 20% を超えていないが、一方、「移す」「出す」「運ぶ」などの動詞がこれらの格パターンを取る割合は全体の 70% を超えている。

以下、3.5 節と 3.6 節では、類義的な格の観点から、各動詞がニ格を取る場合を中心として、ニ格及びへ格、ニ格及びマデ格がそれぞれどのような分布を成しているのかを考察する。

3.5 対象移動動詞と二格及びへ格との結合分布に基づく動詞分類

日本語には二格とへ格が交替できる現象があることが、先行研究で指摘されている。実際の用例においても二格とへ格の両方とも取れる動詞がある。この現象に関しては、二格とへ格両方を取れる動詞において、動詞の意味とは関係せずに二格とへ格がある一定の割合で交替している可能性と、動詞の意味によって二格を選ぶかへ格を選ぶかが選択されている可能性がある。2つの可能性の当否を明らかにするためには、散布図を用いて二格とへ格の現れ方を示すことが有効であると思われる。

まず3.4節の表3-3で掲げた各動詞が取る、二格とへ格の結合頻度を合わせて図1に示した。ここでは動詞と二格との結合頻度を縦軸とし、動詞とへ格との結合頻度を横軸として図示している。

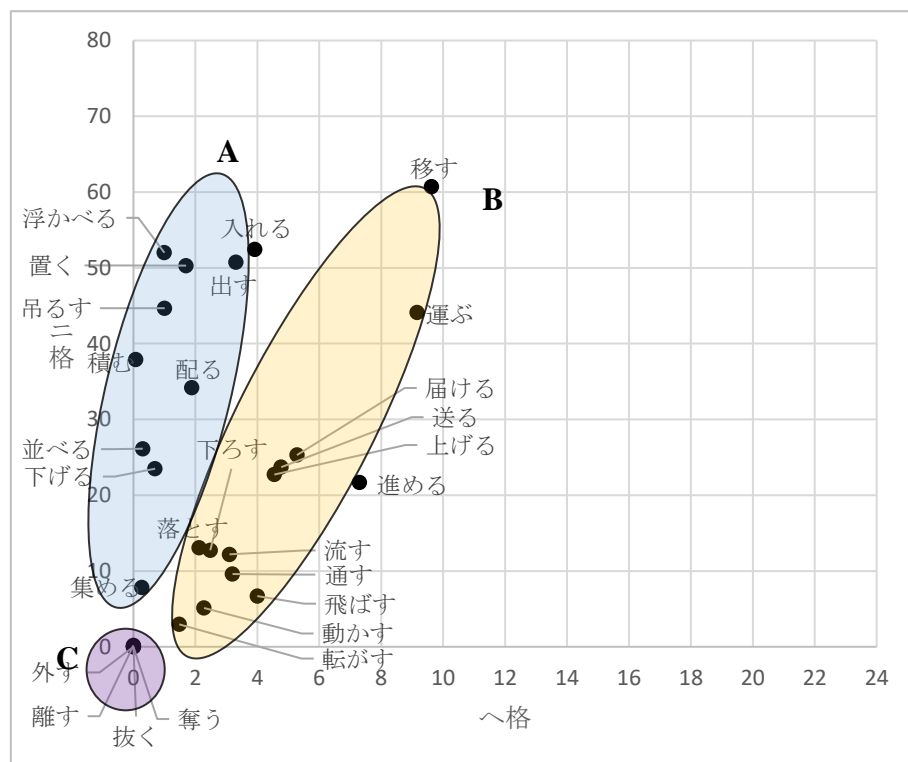


図 3-5 対象移動動詞と二格及びへ格の結合頻度

図 3-5 から、本論文で扱う動詞は大きく 3つのグループに分けることができると言える。まず、縦軸に偏って見られる、二格とより共起しやすい動詞のグ

ループがある。これを A グループとしておく。次に、その列から右下に離れて列をなすグループがある。これを B グループとしておく。さらに、原点に集まっている「奪う」「抜く」など二格とへ格のいずれも取らない動詞がある。これを C グループとしておく。

宮島 (1986) の分類では、A グループは着点志向型動詞¹⁶であり、原点の位置にある C グループは起点志向型とされる動詞である。一方、B グループには、着点志向型動詞「送る」「運ぶ」などと経路志向型の他動詞「飛ばす」「転がす」(対応する自動詞の「飛ぶ」「転がる」が経路志向型) が混在する。ここでは、近い位置に出現する二種類の動詞群がどの程度似た分布を持ち、どの程度異なる分布を持つか確かめるため、B グループの動詞と二格及びへ格との相関係数を求めることにする。まず、「送る」「運ぶ」など着点志向型動詞と二格の格結合頻度を独立変数とし、へ格との格結合頻度を従属変数として、ピアソンの積率相関係数を算出すると、 $r = .97$ という結果が得られた。同様に、「飛ばす」「転がす」など経路志向型動詞と二格及びへ格の相関係数を求めたところ、 $r = .92$ という結果が得られた。相関係数について、石川・前田・山崎 (2010: 86) は、「一般に、相関係数の絶対値が .7 より大きければ「強い相関」が、.4 より大きければ「中程度の相関」が、.2 より大きければ「弱い相関」がある」と指摘している。この指摘に従えば、B グループに混在している着点志向型と経路志向型は、ともにへ格との結合頻度が増加すれば二格との結合頻度も増加するという強い正の相関関係を持つと言える。これを踏まえ B グループはさらに B1 グループと B2 グループに二分することができる (図 3-6)。

¹⁶ 本論文でいう「着点志向型」「起点志向型」「経路志向型」について、宮島 (1986) では、それぞれ「到着点志向型」「出発点志向型」「経過点志向型」と名付けられている。本論文では次の 2 点の理由に基づき、宮島と異なる命名を取ることにする。一つ目の理由は、本論文が宮島 (1986) と同様、二格、へ格、マデ格の意味役割を着点として扱うが、へ格、マデ格が持っている〈+継続性〉に注目し、〈継続性〉の有無をめぐってそれら二つの格と二格は区別されるべきと考えていることである。また、二つ目の理由は、宮島 (1986) が場所格のヲを経過点として扱っている一方、本論文ではヲを起点、経過点、経路の 3 つに分けて捉えているという点である。

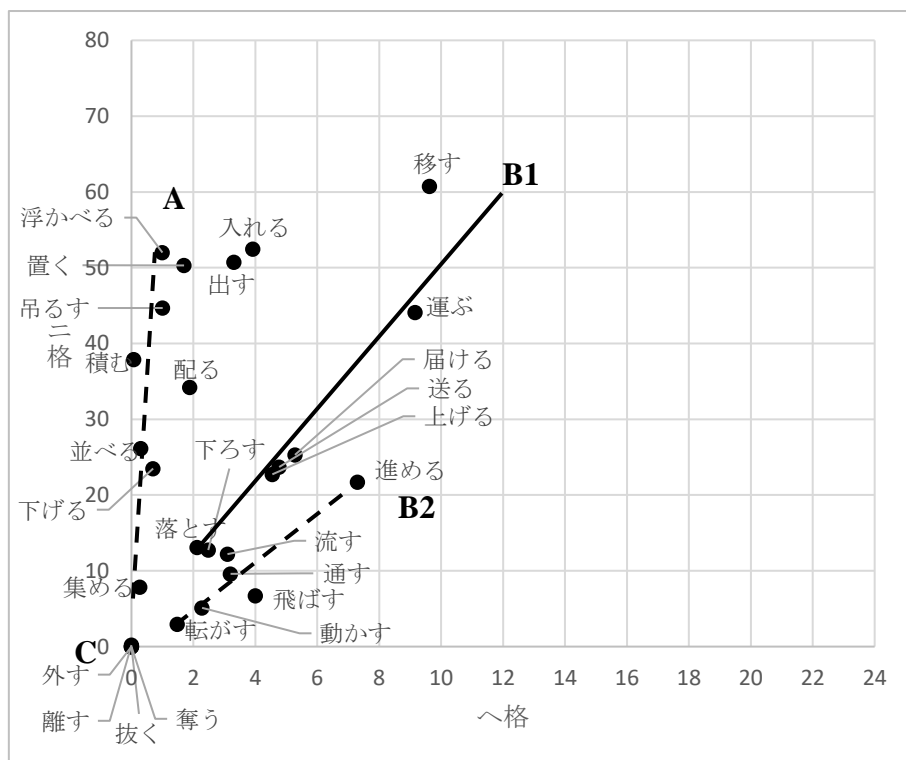


図 3-6 対象移動動詞とニ格及びへ格の結合頻度

なお、動詞の限界性¹⁷に注目すると、A グループは限界動詞であるが、B グループでは、「送る」「運ぶ」など着点志向型の動詞が限界動詞であり、「飛ばす」「進む」など経路志向型の動詞が非限界動詞である。B グループの「上げる」「届ける」などの着点志向型・限界動詞は、ニ格とへ格がほぼ 5 : 1 の割合で分布しているのに対し、「飛ばす」「通す」などの経路志向型・非限界動詞は、その右下に分布している。また、原点の位置にある C グループの動詞はカウ格しか共起しない点で、起点志向型・限界動詞である。

上記の観察を整理したものが表 3-4 である。

表 3-4 ニ格とへ格の現れ方に基づく動詞分類

A グループ	着点志向型動詞	限界動詞
B1 グループ	着点志向型動詞	限界動詞
B2 グループ	経路志向型動詞	非限界動詞
C グループ	起点志向型動詞	限界動詞
	〈経路志向型動詞〉	非限界動詞

¹⁷ 限界動詞と非限界動詞の定義や分類について、工藤（1995：73-78）を参照されたい。

図 3-6 に示されている動詞分類と、3.3.1 節で掲げた表 3-2 で提示した動詞分類を比べてみると、カラ格としか共起しない動詞グループ（図 3-6 における C グループ）は一致しているが、ニ格／へ格と共起する動詞グループ（図 3-6 における B グループ）には着点志向型（「浮かべる」「置く」「積む」「配る」「並べる」「届ける」）と経路志向型（「通す」「飛ばす」「流す」）とが混在している。したがって、ニ格とへ格の共起の仕方が類似する動詞であっても、限界性があるかどうかによってさらに細かく分ける必要がある。なお、「カラ～ニ／へ／マデ」と共起する動詞グループは起点に関わるものであり、A グループ及び B グループとは性質に違いがあるため、このグループについての議論は第 4 章に譲ることとする。

3.6 対象移動動詞とニ格及びマデ格の結合頻度

ニ格は移動動詞とともに使われると、通常は移動の着点を表す。一方、マデ格は、移動動詞とともに使われるとき、その移動の到達範囲を表し、必ずしも着点を表すわけではない。

(32) 学校{に／まで}行く。 (益岡・田窪 1987: 58)

(33) 駅{まで／？に}歩く。 (益岡・田窪 1987: 58)

益岡・田窪（1987）が取り上げる例文から見ると、「学校に／まで行く」のように、ニ格とマデ格両方を取れる動詞もあれば、「駅まで／？に歩く」のように、マデ格とは共起しやすいが、ニ格とは共起しにくい動詞もあることが示唆される。限界性に基づく動詞分類（北原 1998）によると、「行く」のような動詞は限界動詞、「歩く」のような動詞は非限界動詞とされる。実際、北原（1998）は、「非限界動詞はマデ格句とは共起するが、ニ格句とは共起しない、あるいは共起しにくい（…）限界動詞はニ格句ともマデ格句とも共起する」と指摘している。これを踏まえ以下ではコーパスから得た対象移動動詞とニ格及びマデ格の結合頻度の観察を通して、北原（1998）をはじめとする先行研究の指摘と同様の結果が得られるかどうかを検証する。

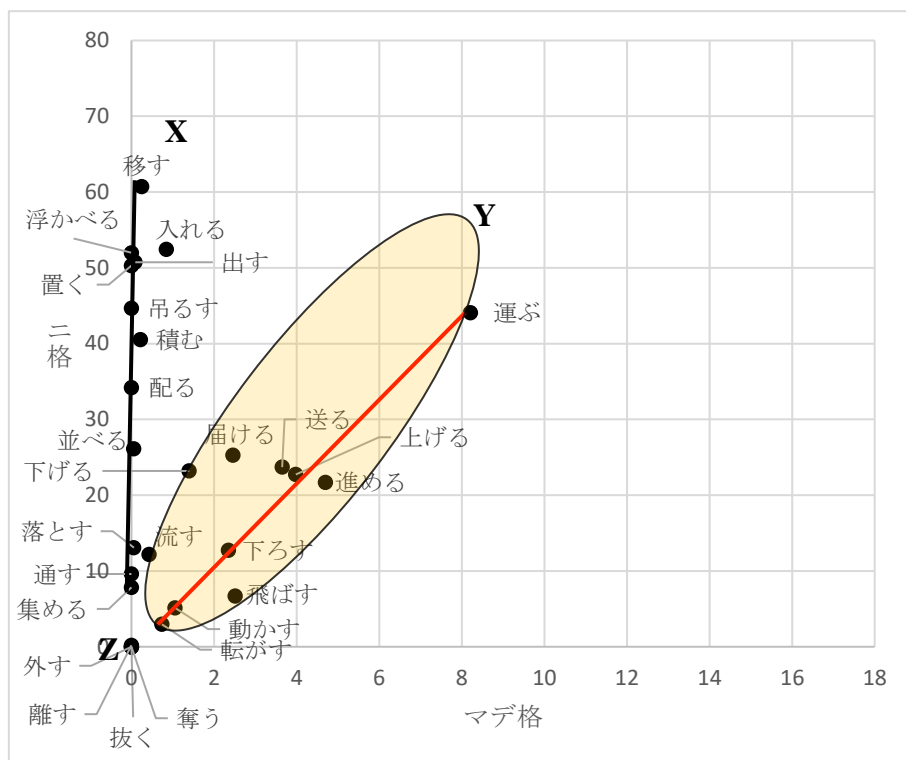


図 3-7 対象移動動詞二格及びマデ格の結合頻度

図 3-7 では、対象移動動詞と二格及びマデ格の結合頻度を示した。図 3-7 から、本論文が対象とする対象移動動詞は大きく 3 つのグループに分けることができると言える。まず、縦軸とほぼ重なる形で直線に並んでいる動詞のグループがある。これらの動詞はマデ格と共起せず、専ら二格と共起するものであり、X グループと呼ぶことにしておく。次に、縦軸から右下に離れて列をなすグループが見て取れる。これを Y グループと呼ぶことにしておく。最後に、原点に集まっており、二格もマデ格も取らない動詞のグループがある。これを Z グループと呼ぶことにしておく。以上のように、先行研究において限界動詞は二格句ともマデ格句とも共起すると指摘されるが、実際には「移す」「置く」「積む」などの一部の語がマデ格と共起しない（あるいは共起しにくい）ことも観察された。また、非限界動詞は二格句とは共起しない、あるいは共起しにくいとする指摘に対して、「通す」「飛ばす」などの非限界動詞は二格との共起がそれほど難しくないという現象も観察された。先行研究の指摘と一致しないこのような実態は、恐らく動詞の自他に関する問題に基づくものと思われるが、詳しい議論は第 6 章で行う。

また、図 3-6 と図 3-7 を比べると、次のような相違点・共通点が見られる。まず、「下げる」を除くすべての動詞において、へ格との結合頻度と比べ、マデ格との結合頻度が下がり、横軸の左方向に移行する傾向があることが挙げられる。特に、図 3-6 における B1 及び B2 グループの動詞の結合頻度は、図 3-7 において大きく変動していることが見て取れる。例えば、図 3-6 の B1 グループに属する「移す」「落とす」と B2 グループに属する「通す」は、図 3-7 においてともに X グループに固まっている。また、図 3-6 において B1 グループと B2 グループの動詞は、ある程度はっきり分かれて分布が見られたが、図 3-7 の Y グループにおいては、着点志向型動詞と経路志向型動詞が混在しているように見えることが挙げられる。

さらに、図 3-6 と図 3-7 を比較すると、いくつかの動詞の結合頻度に大きな変動が見られる一方、図 3-6 における A、B、C グループの動詞は、図 3-7 における X、Y、Z グループとほぼ重なっていることが挙げられる。このことから、ニとへの格結合頻度は、ニとマデの格結合頻度とよく似た傾向があることがわかる。これはすなわち、図 3-7 のニ格とマデ格の現れ方から対象移動動詞を分類した際も、3.5 節で提示した、ニ格とへ格の現れ方に基づく動詞分類とほぼ同様の結論が得られることを示唆している。すなわち、へ格とマデ格は〈+継続性〉において共通していると考えられるということである。

3.7 本章のまとめ

本章では、対象移動動詞とニ格、へ格、マデ格との結合頻度に基づき、新たな動詞分類を試みた。対象移動動詞がニ格とへ格を取る割合を散布図で示すことにより、本論文で扱う動詞は大きく 3 つのグループに分けることができる。宮島 (1986) の分類に沿うと、A グループは着点志向型動詞であり、C グループは起点志向型動詞である。この二種類の分類の妥当性は、本章の調査に基づくニ格とへ格の結合分布から裏付けることができる。一方、B グループには、着点志向型動詞と経路志向型動詞が混在する。宮島 (1986) における経路志向型と近い位置に出現する着点志向型の存在はこれまでの研究で言及されてこなかったが、本論文では確認された。なお、動詞の限界性に注目すると、A グループと C グループは限界動詞であり、B グループはさらに B1 と B2 の二つ

に分けることができる。B1 グループは着点志向型とされる限界動詞であり、B2 グループの経路志向型は非限界動詞である。本章では、対象移動動詞とニ格及びマデ格との格結合頻度を散布図で示すことでこの四分類を検証した。

以上見てきたように、動詞の限界性と、ニ格、へ格、マデ格の着点性、従来指摘されてきたへ格・マデ格の継続性を踏まえると、グループごとに対象移動動詞が持つ素性は表 3-5 のようにまとめられる。

表 3-5 動詞別と限界性、着点性、継続性との関係

A グループ	+限界性、+着点性、-継続性
B1 グループ	+限界性、+着点性、+継続性
B2 グループ	-限界性、+着点性、+継続性
C グループ	+限界性、-着点性、-継続性

この新たな対象移動動詞の分類は、本論文における後の章の内容の基盤として位置づけることができるものである。

第4章 起点志向型動詞と着点志向型動詞

—ニ格、マデ格、へ格、カラ格を中心に—

4.0 本章の概要

第3章では、ニ格及びへ格、ニ格及びマデ格を取り上げ、対象移動動詞との結合頻度を調べた。また、その結果に基づいて新たな動詞分類を行った。この章では、通常、交替できないと思われるニ格及びカラ格、マデ格及びカラ格、へ格及びカラ格と、対象移動動詞との結合頻度を調べることにより、第3章で行った動詞分類を検討する。

第4章の構成は次の通りである。まず、4.1節では、交替できない格パターンとして、「カラ～ニ」「カラ～マデ」「カラ～へ」を取り上げ、動詞によって、起点格と着点格との結合度合いに差異があるという現象を指摘する。次に、4.2節では、起点志向型動詞と着点志向型動詞を〈起点／着点指向の移動動詞〉として統括する先行研究の問題点を示す。さらに、4.3節～4.5節では、ニ格及びカラ格、マデ格及びカラ格、へ格及びカラ格と、対象移動動詞との結合頻度に基づき、考察対象の分類を行い、宮島（1986）の分類を検証する。また、検証を通してグループごとに動詞が持つ〈起点性〉という素性を導き出す。最後に、4.6節ではこの章の内容をまとめる。

4.1 はじめに

本章では、交替できない格パターン「カラ～ニ」「カラ～マデ」「カラ～へ」を取り上げ、対象移動動詞が起点志向型であるか着点志向型であるかについて考察を行う。

- (1) 東京{に／へ}行く。 (益岡・田窪 1987:56)

- (2) 学校{に／まで}行く。 (益岡・田窪 1987:58)
- (3) 古河から、列車で宇都宮に行き、紀美子をともなって、叔父の長沼高昭の家を訪ねた。 (高木彬光著『仮面よ、さらば』1988)
- (4) 前は、出血が心配でひとりでは出歩けなかったが、いまでは、入院治療のとき、ひとりで列車を乗り継いで広島の自宅から別府の野口病院まで行くことができる。
(波多江伸子著『からだに寄りそう』2003)

第3章では、(1) (2) のように、一つの例文において交替が可能であり、かつ、交替しても意味の変化が生じない類義的な格について考察を行った。一方、(3) の「カラ～ニ」や、(4) の「カラ～マデ」のように、移動の開始点と終了点を表す格パターンは交替できないと思われる¹⁸。

日本語において移動の起点と着点は常に共起するわけではない。

- (5) だが、その部屋から奪われたのは、極秘マニュアルだった可能性があるのだ。 (一橋文哉著『新潮 45』2005)
- (6) 寝たきり患者をベッドから離し、車いすやいすに座らされるにしても、その先を過ごす場所、空間が見当たらないのです。
(三野紘子著/大塚宣夫著/青木信雄著『「寝たきり」老人はつくられる』1991)
- (7) 小型トラックの荷台に薪ストーブを積み、その上に小石を詰めた窯。石の間には長くて赤いサツマイモが潜んでいる。
(デビッド・パワーズ著;木村千旗訳『不思議の国の特派員』1992)
- (8) そして、ハンドバッグをあけ、一枚の写真と、タイプライターで打った手紙のようなものを取り出すと、テーブルの上に置いた。
(アントニイ・バークリー著/麻生九美訳『毒入りチョコレート事件』1986)

上記の (5) (6) のように、カラ格と結びつきやすい動詞は、宮島 (1986) のいう「出発点志向型」(本論文では、「起点志向型」という) であるものと捉え

¹⁸ 「天井から／に～吊るす」「枝から／に～ぶら下がる」のように同一事象を表し、交替できる例外もある。ただし、「から～まで」には同様の例がない。

られる。また、(7) (8) のように、よりニ格と共起しやすい動詞は、「到着点志向型」(本論文では、「着点志向型」という)であると言える。このように、起点格と着点格との結合の度合いは、動詞によって差異が見られる。これを踏まえ、本章では宮島(1986)の分類を踏襲しつつ、ニ格及びカラ格、マデ格及びカラ格、へ格及びカラ格と対象移動動詞との結合頻度を調べ、その結果に基づいて改めて宮島の分類を検証する。

4.2 先行研究

これまでカラ格、ニ格、マデ格をそれぞれ個別に考察する研究は数多くあるが、「カラ～ニ」「カラ～マデ」「カラ～へ」のような複合的な形を対象とした研究は、管見の限りあまりなされてこなかった。ここでは、移動動詞の起点と着点に注目する先行研究として影山(1996a)を取り上げる。

影山(1996a)は、Talmy(1985)の意味概念を用いて移動動詞のタイポロジーを提案している。同論は、特に日本語の場合、様態を移動の概念に組み込むことができないが、真に重要なのは、移動動詞が様態を表すかどうかではなく、動詞に伴う場所表現の性質の違いであると指摘している。また、日本語において、移動の過程は起点と着点、途中の経路(Path)という2つの領域に分けられるとしており、このような考え方に基づいて、「起点「から」は着点「に」と組になって働くが、他方、経路「を」格は起点とも着点とも一緒にならず、単独で働くのが普通である」と指摘している。以上の議論に基づくと、移動動詞は、〈起点／着点指向〉と〈経路指向〉の2つのタイプに分類できる。

(9) 起点／着点指向の移動動詞

入る、着く、到着する、離れる、出発する、出る

(10) 経路指向の移動動詞

歩く、走る、泳ぐ、飛ぶ、転がる、滑る、這う、うろつく、漂う、さまよう、横切る

さらに、影山(1996a)は、日本語の移動様態動詞は移動経路、方向、到達範囲を表す表現とであれば共起できるが、明確な着点表現とは相容れないという

性質を持っていることも指摘している。影山（1996a）は、〈起点／着点指向〉と〈経路指向〉の違いを明瞭に区別し、さらにこの2つのグループの動詞の図式化を試みたことにおいて意義があると思われる。

ところで、上記のような影山（1996a）の議論の一方で、同論において経路指向動詞とされている動詞の中でも、「飛ぶ」「転がる」などは着点の二格との共起がそれほど難しくない。実際、影山（1996a）は例外的に、「入る、着く、到着する」などが意味的には着点を重視するものの、起点を付け加えることができること、同様に「離れる、出る」など起点重視の動詞でも二格あるいはへ格がカラ格と共起できることを指摘している。従来、カラ格と共起しやすい動詞は起点志向型動詞として、二格、へ格、マデ格と共起しやすい動詞は着点志向型動詞として、それぞれ整理されてきた。しかしながら、同じ着点志向型動詞であっても、起点のカラ格との結びつきにおいては異なる結合頻度を示す場合があり、より詳細な整理の上では、言語使用の実態を明らかにする必要があると考えられる。そこで、この章では対象移動動詞と、二格及びカラ格、マデ格及びカラ格、へ格及びカラ格との結合頻度を散布図で示し、本論文で扱う動詞が起点に注目するか、それとも着点に注目するかを考察する。

4.3 対象移動動詞と二格及びカラ格の結合頻度

まず、対象移動動詞が取る二格とカラ格の結合頻度を図4-1にまとめた。ここでは動詞と二格との結合頻度を縦軸とし、動詞とカラ格との結合頻度を横軸として図示している。

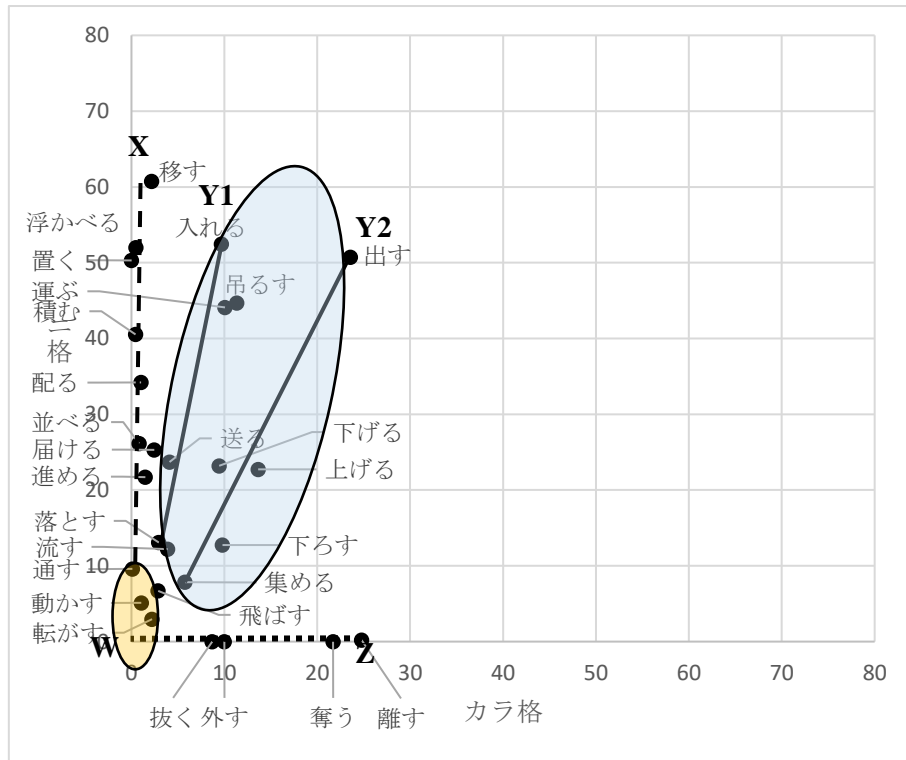


図 4-1 対象移動動詞とニ格及びカラ格の結合頻度

図 4-1 を見ると、本論文で扱う動詞は大きく 4 つのグループに分けることができると言える。まず、横軸の値（カラ格の結合頻度）が低く専ら縦軸のみに沿って出現するグループがある。これは、ニ格とのみ共起しやすい動詞群であり、X グループと呼ぶことにしておく。一方、縦軸の値（ニ格の結合頻度）が低く専ら横軸のみに沿う動詞のグループもある。これは、カラ格とのみ共起しやすい動詞群であり、Z グループと呼ぶことにする。さらに、X グループと Z グループの間には、ニ格とカラ格のいずれとも共起できる動詞群が分布している。これを Y グループと呼ぶことにする¹⁹。最後に、Y グループの左下方向にニ格とカラ格のいずれとも結びつきにくい動詞群がある。これを W グループと呼ぶことにしておく。

第 3 章では、ニ格とへ格の現れ方によって対象移動動詞を 4 つに分けることができることを論じた。第 3 章で提示した分類はニ格とへ格が同じく着点を表しながらも、〈継続性〉の有無に関して違いを持つことに着目した分類である。一方、図 4-1 に示すように、起点のカラ格と着点のニ格を考慮した場合、第 3

¹⁹ 経路志向動詞には、ニ格・カラ格のいずれとも共起しないものがある。自動詞では、これらは原点に出現するが、他動詞を対象とする図 4-1 では、二重ヲ格制約のため出現していない。

章の分析とは、いくつかの動詞の移行が見られる。これを踏まえ、以下では第3章で掲げた対象移動動詞と二格及びへ格の結合頻度を示す散布図（図 3-6）と、図 4-1 との比較を通して、動詞の現れ方の異同に関わる素性を明らかにしたい。

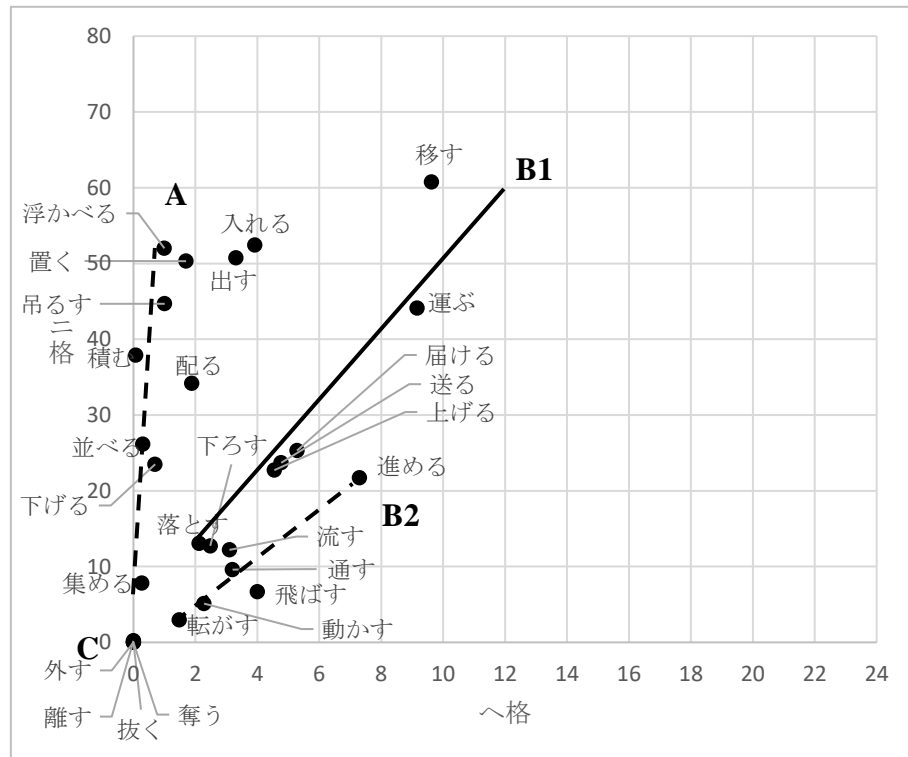


図 3-6 対象移動動詞と二格及びへ格の結合頻度（再掲）²⁰

図 4-1 と図 3-6 を比較すると、図 3-6 の A グループ²¹における動詞は、図 4-1 の X グループとほぼ重なっていることが分かる。ただし、そのうち、図 3-6 で A グループにある「入れる」「出す」「集める」は図 4-1 で Y グループの方に引っ張られており、よりカラ格と結びつきやすい傾向を示している。同様に、図 3-6 の B1 グループに属する「移す」は、図 4-1 の X グループに移行しており、カラ格と共起しにくいだが二格と共起しやすい傾向が見られる。このように若干の異同はあるが、X グループは A グループのほとんどの動詞と重なって

²⁰ 図 3-6 は第 3 章 p43 が初出となる。

²¹ 「吊るす」と「下げる」は、二格とカラ格の両方を取ることができる上に、それらが交替しても意味の変化を伴わない点で特殊な動詞である。従来の研究によると、「～に吊るす／下げる」と「～から吊るす／下げる」はそれぞれ着点と起点に注目しているが、「吊るす」と「下げる」の場合となると、起点と着点が重なって二格とカラ格を交替しても文としての意味は変わらない。したがって、本論文では「吊るす」「下げる」を考察対象から外すことにする。

おり、専ら着点のニ格と共起する着点専用動詞と見なして良いと言える。

また、起点志向型とされる図 3-6 の C グループは、図 4-1 の Z グループと完全に一致していることが分かる。これらの動詞はカラ格としか共起しないため、起点専用動詞と見なすことができる。

以上に対して、Y グループには図 3-6 の A グループの一部と、「移す」を除いた B1 グループが混在している様子が見られる。Y グループに属する動詞は、着点と起点のいずれとも共起できるため、着点起点共用動詞であると考えられる。なお、Y グループの動詞では、「入れる」「出す」「集める」のように、〈-継続〉のものもあれば、「移す」のように、〈+継続〉のものもある。つまり、同じ動詞がニ格とカラ格をとることができ、着点志向と起点志向は相反しない。この点で、継続性と起点・着点とは互いに別個の素性である可能もあるが、A グループと X グループ、B グループと Y グループが一致する傾向は見逃せない。

さらに、経路志向型とされる図 3-6 の B2 グループの動詞は、図 4-1 において、Y グループの左下方向に集まる W グループの動詞と重なる傾向があることがわかる。W グループに属する動詞が Y グループより下に位置することは、ニ格と共起しにくいことを表し、Y グループより左に位置する、あるいは縦軸に寄っていくことは、カラ格と共起しにくいことを表している。W グループの動詞群は Y グループと比べると、ニ格とカラ格のいずれとも共起できるが、実際に共起する度合いはニ格、カラ格ともに Y グループほど強いとは言えない。ただし、図 3-6 からわかるように、〈継続性〉においては Y グループより強い傾向が見て取れる。

最後に、Y グループに注目すると、このグループはさらに、ニ格とカラ格がおおよそ 5 : 1 (Y1) の割合で共起するものと、2 : 1 (Y2) の割合で共起するものに分けられることが読み取れる。これはすなわち、X、Y1、Y2 の 3 つの傾向から、対象移動動詞がニ格とカラ格を取る割合にはある程度の段階性があることを示唆する。また、そのような段階性は第 7 章と第 8 章で論じる「V テイク/テクル」の格結合頻度の変化に関わると考えられる。

上記の観察をまとめると、図 4-1 における X、Y、Z、W グループと図 3-6 における A、B1、B2、C グループには次のような対応関係が見られる。

(11) X ≡ A (「入れる、出す、集まる」を除く)

Z=C

Y≒B1（「移す」を除く）

W=B2

また、(11) を意味素性から考えると、それぞれの動詞グループが持つ素性は次のようにまとめられる。

表 4-1 動詞別と着点性、起点性、継続性、限界性との関係

X≒A	着点専用	+着点性、-起点性、-継続性、+限界性
Z=C	起点専用	-着点性、+起点性、-継続性、+限界性
Y≒B1	着点起点共用	+着点性、+起点性、+継続性、+限界性
W=B2	経路志向	+着点性、+起点性、+継続性、-限界性

表 4-1 から、着点専用（あるいは宮島（1986）のいう純粹到着型）、及び起点専用（あるいは宮島（1986）のいう純粹出発型²²）の動詞は、〈-継続性〉を持っているが、着点も起点も取る動詞は〈+継続性〉を持っている傾向があることがわかる。

以上見てきたように、第 3 章で取り上げた「起点志向型」「着点志向型」「経路志向型」といった動詞分類のうち「起点志向型」と「着点志向型」は、本章の検証を踏まえると、さらに「起点専用」「着点専用」「着点起点共用」という形で細かく分類することができると言える。また、そのような細分化により、各種の動詞が持つ素性の違いもより詳しく見えてきた。したがって、影山（1996a）が取り上げている「起点／着点指向の移動動詞」の分類は、さらに精緻化する余地があると考えられる。

また、本論文は宮島（1986）の分類を踏襲するものであるが、個別の動詞の分類について同論とは異なる傾向があることを確認した。例えば、宮島（1986）で「純粹到着型」とされる「入れる」「あげる」は、本論文の分類においていずれも「着点起点共用」（宮島のいう「到着出発型」）に属することがわかる。このような違いが生じた要因としては、宮島（1986）の扱う用例数が少ないことに基づく制約が考えられる。また、ある動詞が「純粹～型」であるかどうか

²² 宮島（1986）の考察対象では「純粹出発型」に該当する動詞がないが、宮島氏の分類基準を踏まえると、このタイプの動詞を「純粹出発型」と名づけることができる。

を判断する上で、宮島（1986）は二番目に多く出てくる要素が 10%を越えるかどうかという基準を設けているが、この基準は明確な根拠を伴うものではなく、恣意的な側面がある。したがって、量的基準を立てるより本論文のように散布図によって格の分布と変動を捉える手法の方が、格分布をダイナミックに把握することもできる点で客観的かつ合理的であると考えられる。

4.4 対象移動動詞とカラ格及びマデ格の結合頻度

次に、4.4 節では 4.3 節と同様に交替しない共起関係「カラ～マデ」を取り上げる。以下では、各対象移動動詞が取るカラ格とマデ格との結合頻度を図 4-2 に示した。図中では、動詞とカラ格との結合頻度を横軸とし、動詞とマデ格との結合頻度を縦軸として示している。

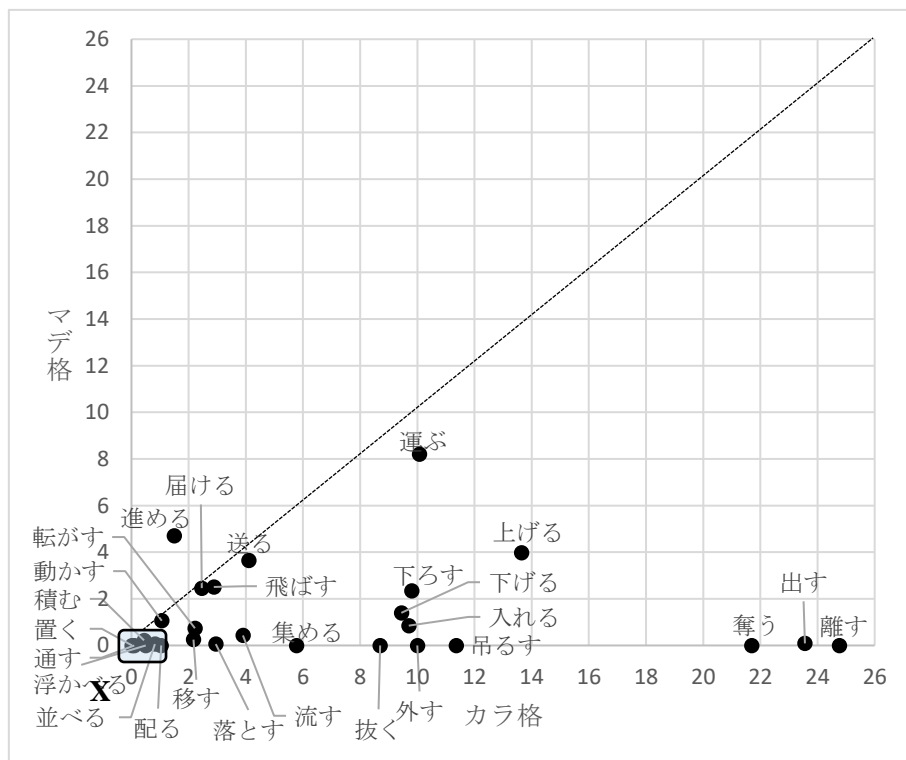


図 4-2 対象移動動詞とマデ格及びカラ格の結合頻度

図 4-2 から、すべての動詞を大きく、横軸に沿って（すなわち縦軸の値が低い形で）並んでいる動詞グループと、横軸から離れている（すなわち縦軸の値

が一定程度ある形で) 動詞グループに分けることができる。それらのうち、前者はマデ格と共起せず、専らカラ格と共起する傾向を示している。これに対して、後者は、マデ格とも共起する傾向を示している。

また、4.3 節で提示した図 4-1 と、図 4-2 を比べると、個々の動詞の分布が大きく変動していることがわかる。具体的に言えば、図 4-1 では、横軸に沿って並んでいる動詞を除けば、他の動詞は散布図の左上方向あるいは縦軸に沿う形で集まっているのに対して、図 4-2 では、すべての動詞が散布図の右下方向、つまり横軸に沿う形で集中している。特に、図 4-1 で着点専用とされる X グループと、起点専用とされる Z グループは、図 4-2 においてともに横軸に沿う形で並んでいることがわかる。4.3 節で掲げた表 4-1 を踏まえるとその背景には、X グループは Z グループがともに〈-継続性〉を持つことがあると考えられる。ただし、着点専用動詞とされる X グループはカラ格との結合頻度がおよそ 1% 以下であることがわかる。したがって、Z グループと比べると、X グループは、極めてカラ格と結びつく頻度が低い特徴があると言える。

次に、図 4-1 で着点起点共用とされる Y グループも、図 4-2 における分布にばらつきが見られる。例えば、「移す」「集める」「出す」などは横軸に沿って並んでおり、マデ格と共起しない傾向があるが、「上げる」「運ぶ」「送る」などは横軸から離れており、カラ格とマデ格のいずれとも共起できる傾向がある。なお、「移す」「集める」「出す」などの動詞は〈継続性〉が〈-〉となるが、「上げる」「運ぶ」「送る」などは〈継続性〉が〈+〉となる。

最後に、図 4-1 で経路志向とされる W グループは、図 4-2 で着点専用 X グループの近くに出現しており、カラ格とマデ格のいずれとも低い頻度で結びついている。これは、経路志向型動詞が起点を表すカラ格及び到達範囲を表すマデ格と相性が良くないためである。

以上のように 4.3 節と 4.4 節ではそれぞれ、カラ格及びニ格と、カラ格及びマデ格の結合頻度を調査してきたが、その結果、二つの格の組み合わせで異なる分布があることが明らかになった。第 3 章の考察では、ニ格が〈継続性〉の有無においてへ格及びマデ格と異なっていることを論じた。そのような議論を踏まえると、カラ格及びマデ格と、カラ格及びへ格と対象移動動詞の結合分布は、よく似ているものと推測できる。そこで 4.5 節では、対象移動動詞とカラ格及びへ格の結合分布を分析する。

4.5 対象移動動詞とカラ格及びへ格の結合頻度

以下では、対象移動動詞が取るカラ格とへ格との結合頻度を図4-3に示した。図中では動詞とカラ格との結合頻度を横軸とし、動詞とへ格との結合頻度を縦軸として示している。

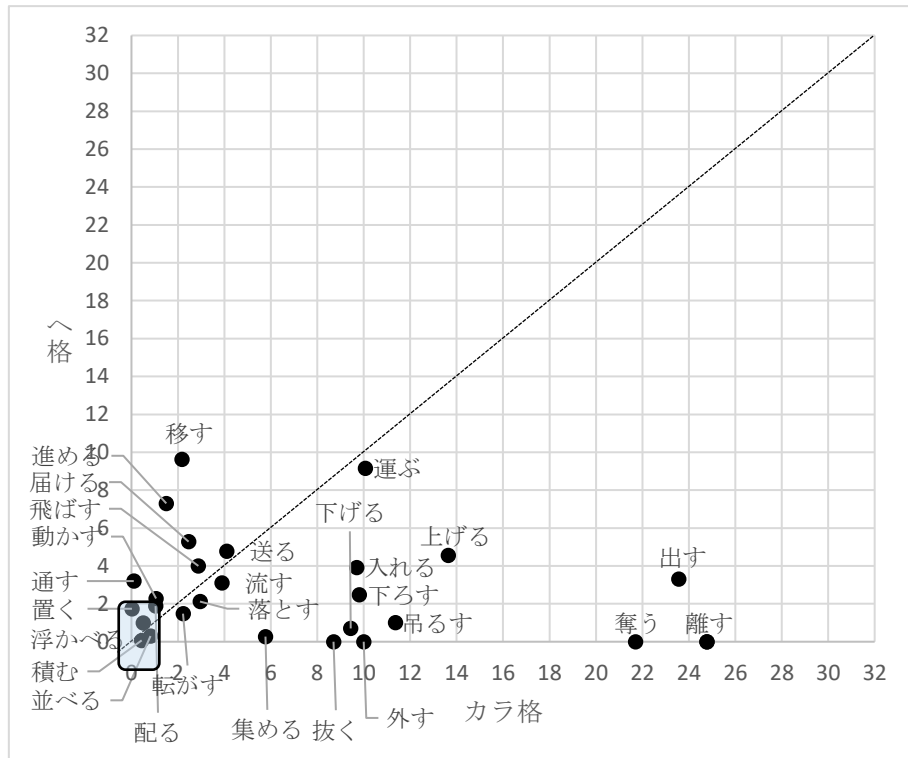


図 4-3 対象移動動詞とへ格及びカラ格の結合頻度

図 4-3 において、原点を起点として描いてある点線に沿う動詞は、へ格とカラ格の割合が 1 : 1 のものである。4.4 節で示した図 4-2 と図 4-3 を合わせて見ると、これらの動詞は類似の分布を示していることがわかる。特に、図 4-2 において起点専用とされる Z グループが横軸に並んでいることは図 4-3 においても一致している。また、図 4-2 において原点の近くに集まっている X グループの動詞は、図 4-3 においても、おおよそへ格の結合頻度が 2%以内、カラ格の結合頻度が 1%以内の範囲に収まっていることが見て取れる。つまり、着点専用動詞に関する分類の妥当性は、へ格とカラ格を対象とした観察からも確認されたと言える。このようにマデ格及びカラ格と、へ格及びカラ格の結合分布

では類似性のある動詞が多いが、一方で差異を示している動詞もある。

まず、起点専用とされる Z グループを除くと、図 4-3 では、ほとんどの動詞に関して縦軸の値が高くなっていることから、マデ格よりへ格と共起しやすいことがわかる。例えば、「移す」「出す」などの動詞は、図 4-2 においてはマデ格と共起しない、あるいは共起しにくい傾向があるが、図 4-3 においてはへ格と共起しやすい傾向がある。第 3 章では、マデ格とへ格が〈+継続性〉を有することを論じたが、ここで見られるように、同じ動詞であっても、マデ格との結合頻度とへ格との結合頻度は実際には違いがあり、〈継続性〉を持つかどうかを判定する上でより慎重な姿勢が必要であると言えるだろう。

次に、経路志向とされる「動かす」「転がす」「飛ばす」「流す」は、へ格とカラ格が 1 : 1 の割合で共起する点線の両側に並んでいるが、「通す」「進める」はより縦軸の方へ引っ張られている。図 4-2 と比較すると、経路志向型の動詞はマデ格よりへ格と共起しやすい傾向があることがわかる。特に「通す」「流す」はマデ格とほぼ共起しないが、へ格との結合頻度が非常に高い傾向が見られる。

本論文では、対象移動動詞と、へ格及びマデ格との共起傾向により、〈継続性〉を抽出するという基準を立てており、この基準をもとに判断する場合、「移す」「出す」「通す」「流す」のようにさらなる検討の余地が生じる動詞もあるものの、それら以外のほとんどの動詞にとってこの基準が有効であることを示した。

4.6 本章のまとめ

本章では、宮島 (1986) が取り上げている「出発点志向型」「到着点志向型」に着目し、宮島の分類を踏襲しながら、ニ格及びカラ格、マデ格及びカラ格、へ格及びカラ格と対象移動動詞との結合頻度を調べた。また、その結果に基づいて改めて宮島 (1986) の分類を検証した。検証の結果、対象移動動詞とニ格及びカラ格との結合頻度から、本論文で扱う動詞は X グループ、Y グループ、Z グループ、W グループの 4 つに分類された。この分類と第 3 章で取り上げた A グループ、B1 グループ、B2 グループ、C グループを比較すると、次のような対応関係が見られる。

(12) $X \div A$ (「入れる、出す、集まる」を除く)

$Z=C$

$Y \div B1$ (「移す」を除く)

$W=B2$

(再掲)

(12) から、第3章で取り上げた「起点志向型」と「着点志向型」は、さらに「起点専用」「着点専用」「着点起点共用」の3つに細分化することができる。また、本章で提示した分類では、新たに個々の動詞が持っている〈起点性〉という素性を導入した。

表 4-2 個々の動詞と着点性、起点性、継続性、限界性との関係

$X \div A$	着点 専用	+着点性、-起点性、 -継続性、+限界性	浮かべる、置く、積む、配 る、並べる
$Z=C$	起点 専用	-着点性、+起点性、 -継続性、+限界性	奪う、抜く、外す、離す
$Y \div B1$	起点着 点共用	+着点性、+起点性、 +継続性、+限界性	移す、集める、入れる、出 す、送る、運ぶなど
$W=B2$	経路 指向	+着点性、+起点性、 +継続性、-限界性	動かす、転がす、通す、流 す、飛ばす、進める

本章では、4.3 節～4.5 節において、着点専用、あるいは起点専用とされる個々の動詞が持っている〈起点性〉〈継続性〉のあり方について検証した。ただし、そのうち着点起点共用、または経路志向とされる動詞が持っている〈継続性〉については、4.4 節と 4.5 節の考察を通してさらなる検討の余地が生じることを示した。この問題に関して、本論文は〈継続性〉が、「テイル」形が動作進行を表すかどうかということにも関与すると考える。第5章では、対象移動動詞の「テイル」形と共起する格の結合頻度からこのことについて詳しく議論することにする。

第5章 V テイル形の格結合頻度について

5.0 本章の概要

第3章と第4章では、対象移動動詞と共起する格ごとの結合頻度に基づいて動詞分類を行った上、動詞の類ごとに持っている素性について検討した。その結果、〈限界性〉〈着点性〉〈継続性〉〈起点性〉といった素性が抽出された。第5章では、対象移動動詞の「テイル」形と共起する格の結合頻度を調査し、対象移動動詞の格パターンとアスペクト形式「テイル」との関係を抑える。具体的には、「テイル」形が動作進行を表すか結果残存を表すかに基づいて、対象移動動詞がグループごとに持っている〈継続性〉と〈結果性〉という素性を導出する。

本章の構成は次の通りである。まず、5.1節では、「テイル」形の基本的意味を提示し、他動詞が「テイル」形を取る際、動作進行を表すほかに、結果残存も表し得ることを示す。次に、5.2節では、「テイル」についての先行研究のうち、特に格のパターンとアスペクトとの意味的關係に関する研究に注目する。続いて5.3節では、ニ格、ヘ格、マデ格、カラ格と「テイル」形との結合頻度を調査し、その結果を示す。さらに、5.4節では、第3章と第4章で行った動詞分類を踏まえながら、「テイル」形と格との結合頻度を詳細に考察することによって、動詞がグループごとに持っている〈継続性〉と〈結果性〉を探る。最後に、5.5節では、本章の内容をまとめる。

5.1 はじめに

「テイル」形は、動作が継続していることを表す場合と、動作が終わってその結果が残存していることを表す場合とがある²³。「テイル」形がどちらを表す

²³ 二つの用法の名称は研究者によって若干異なるが、本論文では、それぞれ「動作進行」と「結果残存」と呼ぶことにする。本論文で用いる「動作進行」と「結果残存」は、先行研究で取り上げている「動きの継続」と「変化の結果の継続」に対応している。

のは前接する動詞のタイプによって決定される。通常、自動詞の「テイル」形は結果残存、他動詞の「テイル」形は動作進行を、それぞれ表すと言える。たとえば、以下の (1) (2) において、他動詞の「テイル」形は動作進行を表している。

- (1) 「彼はここでなにをしているの？」
「アンジェリカを家へ送っているときにポケットベルが鳴ったんですよ」
(バーバラ・ボズウェル著/山野紗織訳『シンデレラの初恋』2004)
- (2) もう片方の手では、マルボロの景品と思われるダミーバッグほどの大きさのソフトバッグを手提げ鞆のようにつまんで運んでいる。
(神山均著『ザ・スーパー・バッド・デュード』2001)
- (3) 料理で使うハーブ類だけにして、ローズマリー、バジリコ、ペパーミントなどの鉢植えを七階のベランダに並べている。
(上杉勇司著『変わりゆく国連 PKO と紛争解決』2004)
- (4) 十二畳ほどの洋間で、中ほどに大きな机を据えて、窓辺にテーブルセットを置いていた。
(太田蘭三著『被害者の刻印』1994)

ただし、(3) (4) では、同じく他動詞であるが、「テイル」形が動作が終わった後の結果自体の存続を示している。このように、他動詞の「テイル」形に関しては動作進行を表すだけでなく、結果残存の意味を表すこともできる。

第3章で提示した動詞分類によると、「並べる」「置く」と「送る」「運ぶ」はそれぞれ A グループと B1 グループに属することがわかる。すでに述べたように、「テイル」形は前接する動詞のタイプによって表す意味が異なり、A グループに属する「並べる」「置く」などの動詞では結果残存が表されるが、B1 グループに属する「送る」「運ぶ」などの動詞では動作進行を表される様子が見られる。このように、「テイル」の表す意味と本論文が提示する動詞分類との間には少なからず関係があるように思われる。そこで本章では、第3章と第4章で示した動詞分類を踏まえながら、「テイル」形と共起格との結合頻度を詳細に分析することにより、グループごとの動詞が持っている〈継続性〉と〈結果性〉を導き出す。

5.2 先行研究

現代日本語のアスペクトについては、金田一春彦（1950=1976）をはじめ、これまで数多くの研究の蓄積がある。金田一（1950）は動詞を「状態動詞」「継続動詞」「瞬間動詞」「第四種の動詞」の4つに分類している。同論によれば、このうち継続動詞の「テイル」形は動作進行を表し、瞬間動詞の「テイル」形は結果残存を表すとされる。また、このような、「テイル」の意味を決定づける本質的要因は《時間の長さ》であると捉えられている。

金田一（1950）の議論に対して、奥田靖雄（1978a,b）は「テイル」形の表すアスペクトの意味を決定づけるのは「継続」か「瞬間」かという「動詞の語彙的意味」ではなく、「動作」か「変化」かの違いであるとしている。同様に、奥田によるこの立場はその後、工藤真由美（1982a、1995）などに引き継がれている。

本章は、格のパターンとアスペクトの意味的關係に関する研究に注目し、代表的な論考として工藤真由美（1982a、1995）、杉本武（1988、2002）、川野靖子（2001、2006）、北原博雄（2006）、許宰碩（2008）を取り上げる。

5.2.1 工藤真由美（1982a、1995）

工藤（1995）は、従来の「状態動詞」と「非状態動詞（動作動詞）」の2分類をさらに細かく、次の3種類に分類している。

- (A) 外的運動動詞——開ける、切る、殺す、食べる、見る、読む、たたく、歩く、遊ぶ、動く、座る、行く、死ぬ、枯れる、曇る、……
- (B) 内的情態動詞——思う、考える、信じる、望む、心配する、感動する、苦しむ、驚く、あきれる、感じる、見える、痛む、疲れる、……
- (C) 静態動詞——ある、いる、値する、甘すぎる／存在する、異なる、意味する／優れている、精通している、そびえている、面している、…
… (工藤 1995 : 69)

また、3種類のうち、「スル」対「シテイル」の典型的なアスペクト対立は特に(A)グループにおいて成立するとされ、これを踏まえ(A)グループをさらに3つに分類している。

(A・1) 主体動作・客体変化動詞——開ける、折る、消す、倒す、入れる、並べる、抜く、出す、運ぶ、作る、……

(A・2) 主体変化動詞——行く、来る、帰る、立つ、開く、折れる、消える、入る、並ぶ、出る、太る、……

(A・3) 主体動作動詞——動かす、回す、打つ、蹴る、押す、食べる、見る、言う、歩く、泳ぐ、走る、泣く、飛ぶ、……

(工藤 1995 : 71)

奥田(1978a,b)による「動作動詞」「変化動詞」の2分類は、工藤(1995)により、さらに精密化されているが、工藤の分類では限界性(Telicity)の視点を取り入れられていることも注目される。同論は、変化が内在している動詞は内的限界動詞、主体動作動詞は非内的限界動詞であるとしている。工藤(1995)によると、(A・1)～(A・3)グループは「テイル」形においてそれぞれ次のようなアスペクト的意味を表している。

〈内的限界動詞〉

主体動作・客体変化動詞 動作継続(能動) / 結果継続(受動)

主体変化動詞 結果継続

〈非内的限界動詞〉

主体動作動詞 動作継続 (工藤 1995 : 72)

さらに、工藤(1995)は、「テイル」形が動作継続と結果状態の両方を表す動詞を「二側面動詞」と呼んでいる。また、そのような動詞が動作継続と結果状態のいずれの解釈を受けるかは「構文的条件」によって決まるとしている。工藤の言う「構文的条件」とは、(5a)のように二格句と共起すると結果状態を表し、(5b)のようにヲ格句と共起すると動作継続を表すという条件のことである。

- (5) {a. 崖の上に／b. 崖を}のぼっている (工藤 1995 : 79)

通常、動き動詞²⁴の「テイル」形は「動きの継続」、変化動詞の「テイル」形は「変化の結果の継続」を表すのが基本用法とされる。工藤 (1982a) は、動き動詞が「変化の結果の継続」、変化動詞が「動きの継続」を表すようになる構文的条件として、それぞれ4つの条件があると指摘している。本論文は主に移動を表す他動詞を考察対象としているため、以下では動作動詞が「客体の変化の結果の継続」を表す場合の構文的条件である①～③を示す。

- ① 主体の動きを表す動詞「歩く」「動く」など、また客体に働きかけていく主体の動きを表すが客体の変化については問題としない動詞「たたく」「飲む」「読む」などは、動作量＝変化量を規定する修飾語がつくと、「変化の結果の継続」を表すようになる。
- ② 「歩く、走る、流れる、飛ぶ」などの移動動詞は、移動動作の終了点、目的地を示すマデ格、ニ格がつくと、主体の位置変化をとらえつつ「変化の結果の継続」を表すようになる。
- ③ 伝達動詞は、基本的に伝達内容を示す引用の「一ト」をとりつつ伝達結果が問題とされている場合「変化の結果の継続」を表すようになる。

(工藤 1982a: 62-65)

- (6) 「この軸いつ見ても好きですわ。」「ぼくも気に入っている。(中略) 旅館の方で値打を知って出しているのか、知らないで出しているのかね。」 (工藤 1982a : 59『運河』)
- (7) 昨日、行ったけれど雨戸を閉めていましたよ。 (工藤 1982a: 59『海と毒薬』)
- (8) 三四郎は懐に三十円入れている。 (工藤 1982a : 61『三四郎』)
- (9) 眼鏡を外しているんで、眼が見えないんだよ。 (工藤 1982a: 61『夏草冬濤』)

²⁴ 工藤 (1982a : 55) では、「奥田氏は (A・1) を「動作動詞」と名づけているが、「揺れる、(風車が) 回る、降る、燃える」等もまた (A・1) に属していることを考えると、日常的用法において「動作」ということは不適當なので鈴木重幸氏に従って、動き動詞と改めた。」と述べている。

(6)～(9)のように、主体の観点からは動きが、客体の観点からは変化が、それぞれ捉えられる動詞として「出す」「閉める」「入れる」「外す」などがある。そのうち、(6)(7)の「出す」「閉める」は「意志的動作主体を表す主語が欠除している場合」、(8)(9)の「入れる」「外す」は「再帰的意味構造の文の場合」である。

5.2.2 杉本武 (1988、2002)

杉本(1988)は、動詞の「テイル」形の表す意味について着目する研究である。同論は、従来の「テイル形は一つの基本的なアスペクト的意味を持ち、場合により、継続相と結果相という異なった現れ方をする」という考え方について、継続相と結果相のどちらがより基本的な意味であるかをめぐって奥田の「継続説」と寺村の「結果説」の二つの説があると指摘している。一方で、それらの従来の考え方と異なり、「テイル形は二つのアスペクト的意味を持つ多義語である」という立場を新たに取っている。杉本(1988)がこの立場を取るのには、継続相と結果相が時間軸上の「視野」のあり方が異なっているためである。具体的には、「継続相の場合、基準時の局面が問題となっているのに対して、結果相の場合、それと共に、基準時以前の出来事時の局面も問題になっている」(杉本1988:103)ことが理由として説明されている。また、これは、「結果相の場合には、「今」という時の副詞句は付け加えられるが、「今まさに」という時の副詞句を付け加えることはできない」という現象によって支持されることが補足されている。

杉本(1988)は「テイル」形の進行相と結果相が全く別のアスペクトであることを主張し、その根拠として進行相の「テイル」形には「ところだ」「てしまおう」「続ける」などのアスペクト形式を後続させることができるが、結果相の場合にはできないことを挙げている。また、進行相の「テイル」形には受身の「られる」を後続させることができるが、結果相の「テイル」形の場合にはできないとしている。

- (10) a. 花子はその部屋で本を読んでいる。(進行相)
- b. 太郎は花子にその部屋で本を読んでいられた。

- (11) a. 花子が財布を落としている。(結果相)
b. *太郎は花子に財布を落としていられた。

(杉本 1988 : 106)

さらに、杉本(1988)は「進行相の「テイル」と「結果相」の「テイル」とでは、動詞の格結合能力に対する影響力が異なる」という指摘を行なっていることも注目される。同論によると、結果相の場合、「テイル」が後続すると、元々取ることのできない二格を取れるようになるが、進行相の「テイル」形の場合はそのような現象が起こらないとされる²⁵。

- (12) a. 道端で人が死んだ。
b. *道端に人が死んだ。
a. 道端で人が死んでいる。
b. 道端に人が死んでいる。
- (13) a. 図書館で太郎は勉強した。
b. *図書館に太郎は勉強した。
a. 図書館で太郎は勉強している。
b. *図書館に太郎は勉強している。

(杉本 1988 : 107)

以上のような杉本(1988)の議論を発展させ、杉本(2002)は、受動文における「テイル」形の振る舞いを検討している。同論は、(14)に示す「動作主不在仮説」を提案しており、動作主との関係から「テイル」形の結果相解釈を説明しようとしている。

(14) 「動作主不在仮説」

変化動詞文において動作主が存在しない場合、結果相解釈が許される。

(杉本 2002 : 43)

²⁵ ただし、これは田川(2003)によって否定されている。田川(2003)は、進行相解釈の例を許す動詞として、「待つ」「休む」「生きる」などの「存在出現動詞」と、「泳ぐ」「走る」「飛ぶ」などの「移動様態・運動様態動詞」という二つの動詞群を挙げている。また、「他動詞の内項と[場所]ニ句が叙述関係を結ぶことは原理的に許されるはずである」と指摘し、その傍証として「駅前のスーパーが店先にイチゴを売っている」という例を提示している。特に、他動詞文がテイル存在文になれる条件に関して、田川(2003)の指摘は本章の考察にとって示唆的な研究であると言える。

- (15) a. 地割れが村を分断している。
 b. 地割れで村が分断されている。
- (16) a. 倒れたクレーンが家押し潰している。
 b. 倒れたクレーンで家が押し潰されている。
- (17) a. 雪が車を覆っている。
 b. 雪で車が押し覆われている。 (杉本 2002 : 43)

杉本 (2002) では、(15) ~ (17) の a の場合は、主語が無生物である点で、動作主ではなく、原因や手段であるとしており、b のように原因や手段をデ格で示した受動文と置き換えられることを示している。これらの例文において、a と b とともにガ格で標示されているのは主語ではなく、また、「テイル」形はいずれも結果残存 (或いは結果相) であると解釈される。杉本 (2002 : 44) によると、(15) ~ (17) では「目的語「村」「家」「車」の状態を叙述していることになる。したがって、多くの場合はそうであるものの、結果相の解釈を受けるのが主体変化動詞文に限られるという記述は正確ではない」と指摘されている。

5.2.3 川野靖子 (2001、2006)

川野 (2001) は、〈結果の局面の有無〉と〈限界点の有無〉という二つの基準に基づいてヲ格句を伴う移動動詞句の意味特徴を分析している。特に、アスペクト的観点からヲ格句を伴う移動動詞の位置付けを考察しており、(18) のような結論を導いている。

(18)

	結果の局面の有無 (変化動詞句か 動作動詞句か)	限界点の有無 (Telic か Atelic か)
[経路]ヲ格句を伴う動詞句 例) 舗道を歩く	— (動作動詞句)	— (Atelic な動詞句)
[通過点][起点]ヲ格句をも伴う 動詞句 例) 山を越える／公園	— (動作動詞句)	+ (Telic な動詞句)

を出る		
_____	+	+
	(変化動詞句)	(Telic な動詞句)

(川野 2001 : 36)

また、〈結果の局面の有無〉〈限界点の有無〉に基づいて移動動詞句の分類を行った結果として (19) (20) を示している。

(19) 〈結果の局面の有無〉による移動動詞句の分類

変化動詞句 = 運動 (移動) の局面 + 結果 (存在) の局面

動作動詞句 = 運動 (移動) の局面 (川野 2001 : 26)

(20) 〈限界点の有無〉による移動動詞句の分類

Telic な動詞句 = 必然的な終了点のある運動 (移動) を表す

Atelic な動詞句 = 必然的な終了点のない運動 (移動) を表す

(川野 2001 : 27)

(19) (20) を導出するにあたって川野 (2001) は持続期間を表す副詞との共起と、「テイル」形の解釈という二つのテストを用いて、ヲ格句を伴う動詞句の〈結果の局面の有無〉を判定している。

(21) a. #太郎が一時間公園を歩く (川野 2001 : 30)

b. #太郎がさっきからずっと公園を歩いている (川野 2001 : 30)

(22) a. *登山客が一時間峠を越える (川野 2001 : 31)

b. *登山客がさっきからずっと峠を越えている (川野 2001 : 31)

(23) a. *太郎が一時間友達の家を出る (川野 2001 : 32)

b. *太郎がさっきからずっと友達の家を出ている (川野 2001 : 33)

川野によると、(21) の a は「運動の持続が一時間」であるという意味でのみ解釈が可能であり、b は「運動が進行中」であるという解釈のみあり得るとされる。一方、(22a) (23a) においては、「一時間」のような副詞によって結果の局面を取り出すことができず、(22b) (23b) においては、「テイル」形が結

果残存²⁶の解釈を導くこともできない。これらのテストの結果、[経路]、[通過点]、[起点]を示すヲ格を伴う動詞句は、結果の局面を持たないことにおいて一致するが、限界点の有無に関してはさらに、[経路]を示すヲ格句が[通過点][起点]を示すヲ格句と異なる性質を持つことが指摘されている。

川野（2001）に後続する川野（2006）は、アスペクチュアルな概念である結果性と限界性の関係を明らかにした上で両概念による動詞分類を提示している。また、提示した動詞分類に基づいて移動動詞文にみられるヲ格句（起点・通過点・経路ヲ格句）とニ格句（着点ニ格句）の共起制限を説明しようとしている。まず、結果性と限界性の関係について、これまでは「結果性を持つ動詞は限界性を持ち、限界性を持つ動詞は結果性を持つ」（川野 2006 : 274）というように捉えられることが多かったようであるが、川野（2006）は、〈+結果性、+限界性〉の動詞や〈-結果性、-限界性〉の動詞だけではなく、〈-結果性、+限界性〉という第3のタイプの存在を指摘している。また、結果性と限界性の関係を踏まえて次のような動詞分類が得られるとしている。

(24) 結果性と限界性による動詞分類

〈+結果性、+限界性〉の動詞 ex. 立つ

〈-結果性、-限界性〉の動詞 ex. 歩く

〈-結果性、+限界性〉の動詞 ex. 越える

(川野 2006:279)

川野（2006 : 286）は、「起点ヲ格句や通過点ヲ格句は〈-結果性、+限界性〉の動詞と結びつき、経路ヲ格句は〈-結果性、-限界性〉の動詞と結びつくが、一方着点ニ格句をとれるのは〈+結果性、+限界性〉の動詞である。よって、起点・通過点・経路ヲ格句と着点ニ格句は共起できない」と指摘している。さらに、起点・通過点・経路ヲ格句をとる動詞に共通している〈-結果性〉は他動詞にも共通する意味特徴であるとし、「動詞の自他を問わず、ヲ格句をとるすべての動詞が〈-結果性〉によって特徴づけられる」と予測している。

²⁶ 川野（2006）は「結果継続」としている。

5.2.4 北原博雄 (2006)

北原 (2006) は、経路句及び着点句との共起可能性にのみ基づいて移動動詞を次のように分類している。

(25) A. フ格句の経路句と共起する移動動詞

①ニ格句の着点句と共起しない移動動詞：経路指向動詞

例) 走る、歩く、駆ける、這う、泳ぐ、滑る、急ぐなど

②ニ格句の着点句と共起する移動動詞：経路/着点指向動詞

例) のぼる、くだる、行く、来る、上がる、おりる、戻る、帰るなど

B. フ格句の経路句と共起しない移動動詞

③ニ格句の着点句と共起する移動動詞：着点指向動詞

例) 着く、到着するなど

同論は、(25) に挙げた動詞の「テイル」形を述語として取る文がどのように解釈されるのか、また、文ごとの解釈の違いは何に起因するのかを考察している。具体的には、経路/着点指向動詞において経路句と着点句が同等に扱われるかどうか注目し、「どこ、Vシタの?」「どこ、Vシテイルの?」のVに経路/着点指向動詞を入れた際、「どこ」が経路と着点のどちらに解釈されるかというテストを行っている。

(26) a. どこ、{のぼったの? / くだったの? / おりたの? / 上がったの?}

b. どこ、{行ったの? / 来たの? / 戻ったの? / 帰ったの?}

(27) a. どこ、{のぼっているの? / くだっているの? / おりているの? / 上がっているの?}

b. どこ、{行っているの? / 来ているの? / 戻っているの? / 帰っているの?}

(北原 2006 : 302,303)

テストの結果について、北原 (2006 : 297) は、「すべての経路/着点指向動詞で着点を表す解釈ができるが、経路を表す解釈は、一部のものには自然にで

きるが、それら以外ではしにくい」と述べている。例えば (27a,b) の「テイル」文の解釈について、北原 (2006 : 303) は、(27a) は「結果状態解釈と動作継続解釈が可能である」が、(27b) は「結果状態解釈が動作継続解釈よりも優位である」と指摘しており、経路／着点指向動詞を (28) のように二分して整理している。

- (28) 経路／着点指向動詞における、経路重視性の高さの序列
A. くだる、のぼる、上がる、おりる > B. 行く、来る、戻る、帰る²⁷
(北原 2006 : 303)

同様に、着点指向動詞と経路指向動詞の「テイル」形が表すアスペクト的意味について、北原 (2006) は次のようにまとめている。

- (29) テイルが述語である文の解釈
A. V が経路指向性を持つ場合は動作継続解釈を表す。
B. V が着点指向性を持つ場合は結果状態解釈を表す。
(北原 2006 : 305)

上記 (28) で示されている、一つの動詞に二通りのアスペクト的意味がある動詞は工藤 (1995) における「二側面動詞」にほぼ対応する。北原 (2006) によれば、(28B) の着点重視動詞の「テイル」形が経路句と共起する場合、動作継続解釈を受け、二格句と共起する場合、結果状態解釈を受けると指摘される。このように、工藤の言う「構文的条件」は (28B) の着点重視動詞に当てはまるようである。

- (30) a. 春子が階段を{上がっている／おりている}
b. 春子が5階に{上がっている／おりている}
(31) a. 春子が登山道を{登っている／くだっている}
b. 春子が山頂に登っている

²⁷ 北原 (2006) は、(28A) の動詞のように経路と着点の双方に意味的な重点を置く動詞を経路／着点重視動詞と呼び、(28B) の動詞のように経路よりも着点の方に焦点を置く動詞を着点重視動詞と呼ぶ。また、北原によると、「x 指向性」は x 句と共起しやすい性質を指し、「x 重視性」は x に意味的な焦点が置かれやすいことを指す。

c. 春子が麓にくだっている

(北原 2006 : 307, (30) は原文 (18b)、(31) は原文 (19b,c))

北原 (2006 : 307) は、「工藤の二側面性にとって問題になるのは、二格句と共起した (18b)・(19b,c) が、結果状態だけでなく動作継続も表すという点である」と指摘している。(30b)・(31b,c) が結果状態と解釈されるのは (29B) によるが、動作継続と解釈されるのは、二格句において方向解釈ができるためである。北原は「テイル」形において二格句が方向解釈を持つ程度を次のようにまとめている。

(32) テイル文における二格句の方向解釈のしやすさの序列

A. くだる、のぼる > B. 上がる、おりる、戻る、行く > C. 来る、帰る

(北原 2006:308)

また、(28) と (32) を踏まえると次のような一般化が得られるとしている。

(33) 経路／着点指向動詞のテイル形が述語である文では、動詞および動詞のテイル形の経路重視性の高さと、二格句の方向解釈の可能性とが相関する。

(北原 2006:309)

5.2.5 許宰碩 (2008)

許 (2008) は、アスペクト的観点から、日本語及び韓国語の移動動詞の格パターンと、「テイル」の意味との関係について捉えようとしている。同論は、「動作進行の解釈は、移動物と移動場所が線 (+) か点 (-) かにより異なる」と指摘しており、その組み合わせを (34) ~ (37) のように四つのタイプに整理している。

(34) [移動物- / 移動場所-] 太郎が白線を出ている。(<??動作進行)

- (35) [-/+] 太郎が山を越えている。〈動作進行〉
 (36) [+/-] 蛇が穴を出ている。〈動作進行〉
 (37) [+/+] 電車がトンネルを出ている。〈動作進行〉

(許 2008 : 145)

(34) ~ (37) からわかるように、動作進行の解釈が可能かどうかは、移動物と移動場所の素性と対応している。すなわち、移動物と移動場所のうち、少なくとも一つが線 (+) であるという条件を満たせば、動作進行と解釈しやすいとされる。また、許 (2008 : 146) は、特に (34) (36) (37) では、起点ヲ格をカラ格にすると、結果状態として解釈しやすくなり、動作進行として解釈しにくくなると指摘しており、このことから、「日本語は起点ヲ格と共起する移動動詞句とカラ格と共起する移動動詞句の間においてアスペクト的意味の違いが見られる」としている。

さらに、許 (2008 : 146) では、移動場所が線 (+) である例文であっても動作進行と解釈しにくい場合があると指摘している。

- (38) 太郎が図書館を出ている。〈?動作進行〉
 (39) 飛行機が羽田を離陸している。〈?動作進行〉
 (40) 電車が東京駅を出発している。〈?動作進行〉

(38) ~ (40) について、許 (2008 : 146) では、「起点と共起する移動動詞句は移動場所が線 (+) であっても離脱の瞬間だけを捉えているため、動作進行の解釈がされにくい」と説明されている。

以上、許 (2008) が韓国語との比較を通して分析した、日本語の移動動詞の格パターンと、「テイル」の意味との関係は、(41) (42) のようにまとめられる。

- (41) 日本語の起点ヲ格と着点ニ格は移動の瞬間を捉えるだけで、移動のプロセスとして捉えられにくいため、「テイル」の意味が動作進行を表しにくい。
 (42) 起点「カラ／ヲ」格と共起する移動動詞の中には結果性に関して度合いの差があるようである。

5.2.6 先行研究の問題の所在

ここまで、格のパターンとアスペクトの意味的關係に関する先行研究を概観した。それぞれの議論を振り返ると、まず、工藤（1982a）については、動き動詞が「変化の結果の継続」、変化動詞が「動きの継続」を表す現象に触れており、この現象が成立する条件を指摘している点で注目に値する。また、工藤（1995）は、「構文的条件」によって「二側面動詞」が動作継続と結果状態のどちらの解釈を受けるかが決定されることを指摘している。ただし、これら工藤の議論では、北原（2006）の指摘する通り「構文的条件」が一部の「二側面動詞」のみに適応しているという不備が見られる。

次に、杉本（1988、2002）は、「テイル」形が表す意味と動詞の格結合能力との關係に注目している点と、他動詞文の「テイル」形の結果相解釈を分析している点で重要な意義があり、特に本章の考察にとって示唆的な研究であると言える。

続いて、川野（2001、2006）については〈-結果性、+限界性〉動詞の存在を指摘している点で重要であると言える。ただし、川野の議論ではヲ格句とニ格句を中心に考察されているため、カラ格句についての考察が不十分であると言える。また、〈-結果性〉が他動詞にも共通する意味特徴であるとされ、「動詞の自他を問わず、ヲ格句を取るすべての動詞が〈-結果性〉によって特徴づけられる」とする推測を行なっているが、この点は更なる検証を要するであろう。

さらに、北原（2006）は、上述した工藤（1995）の言う「二側面動詞」のアスペクト的意味解釈に関する「構文的条件」の不備を踏まえ、「テイル形の経路重視性の高さと、ニ格句の方向解釈とが相関する」という一般化を提案している。しかし、この一般化が具体的にどのような動詞にまで適用できるのかは言及されていない。特に、「上がる」「おきる」のような経路／着点指向動詞と対応する他動詞においても似たような傾向性が見られるかどうかはさらなる検討が必要である。

最後に、許（2008）では、移動物と移動場所のうち、少なくとも一つが線（+）という条件を満たせば、動作進行と解釈されやすいことと、ただし、移動場所

が線（+）である「離陸する」「出発する」「出す」といった動詞においては例外的に動作進行と解釈にくい場合もあることが分析されている。許(2008)は、特に例外が生じる理由として起点と共起する点から説明を行なっているが、実際には、この問題は動詞のタイプそのものによって生じているものと考えることができる。たとえば「離陸する」「出発する」は従来、「起点志向型」と言われるタイプの動詞であり、開始限界を突破するとその後の結果状態が続いていく性質を持つ。したがって「テイル」形は動作進行より結果状態と解釈されやすいと捉える余地がある。

以上のような先行研究を踏まえ、この章ではコーパスにおける「テイル」形と共起格との結合頻度を調査し、対象移動動詞の格パターンと「テイル」形が表すアスペクト的意味との関係を整理する。また、そのような過程においては、各グループの動詞が持つ「継続性」と「結果性」という素性を導出する。

5.3 テイル形の格結合頻度の調査結果

前述したように、対象移動動詞が「テイル」形を取る際には、動作進行と結果残存の違いが現れやすい。この2つの異なる意味は、前接する動詞の意味の違いに由来すると思われる。一方、先行研究を概観すると、近年のアスペクト研究は、動詞句の分類と意味記述を行う段階から、格のパターンとアスペクト的意味との関係を整理する方向へと発展してきているように見える。このような本論文の立場とアスペクト研究の潮流の違いを踏まえてここでは、共起する格の頻度をもとに第3章で取り上げた四種類の動詞に「テイル」が付いた際、動作進行以外に結果残存も表すことができるかどうかを調査した。結果を以下の表5-1に示す。表中では、グループごとの対象移動動詞の「テイル」形とニ格、へ格、マデ格、カラ格との結合頻度をまとめている。

表 5-1 「テイル」形とニ格・へ格・マデ格・カラ格との結合頻度²⁸

動詞 分類	V テイル形	ニ格		へ格		マデ格		カラ格		そ の	合 計
		動	結	動	結	動	結	動	結		

²⁸ 「テイル」形が「～カラ～ニ／へ／マデ」のような複合形式と共起する例や「テイル」形が動作進行か結果残存かが判断しにくい例は「その他」に入っている。

		作	果	作	果	作	果	作	果	他	
A グループ	入れている	5	253	4	1	0	0	0	8	3	632
	置いている	0	181	1	1	0	0	0	0	0	278
	下げている	0	46	0	0	0	0	0	18	0	114
	並べている	2	43	0	0	0	0	0	0	1	113
	出している	0	30	0	2	0	0	1	5	4	313
	積んでいる	0	26	0	0	0	0	0	0	0	98
	配っている	3	24	2	0	0	0	0	0	2	90
	吊るしている	0	15	0	0	0	0	0	4	0	24
	集めている	1	12	0	0	0	0	1	8	3	298
	浮かべている	0	6	0	0	0	0	0	0	0	7
B 1 グループ	送っている	67	0	13	0	1	0	3	0	0	265
	運んでいる	42	0	13	0	6	0	9	0	0	183
	移している	13	8	1	1	0	0	3	0	5	42
	届けている	2	19	4	0	0	0	0	0	0	43
	落としてしている	4	5	3	0	0	0	4	0	2	69
	下ろしている	2	4	0	0	0	0	5	0	0	56
	上げている	2	2	0	0	0	0	0	0	0	60
B 2 グループ	流している	4	3	2	1	0	0	20	0	10	223
	進めている	3	0	4	0	1	0	3	0	0	19
	動かしている	2	0	1	0	0	0	0	0	0	43
	飛ばしている	2	0	5	0	0	0	1	0	3	55
	転がしている	2	0	1	0	0	0	0	0	0	18
	通している	0	5	0	0	0	0	0	0	1	17

C グ ル ー プ	奪っている	0	0	0	0	0	0	0	2	0	15
	抜いている	0	0	0	0	0	0	0	3	0	66
	外している	0	0	0	0	0	0	1	6	0	106
	離している	0	0	0	0	0	0	0	5	0	64

5.4 テイル形が述語としての意味

「テイル」形のアスペクト的意味を考えるにあたって、ここでは改めて第3章で取り上げた動詞分類を挙げ、表 5-1 における格結合頻度と対照する。

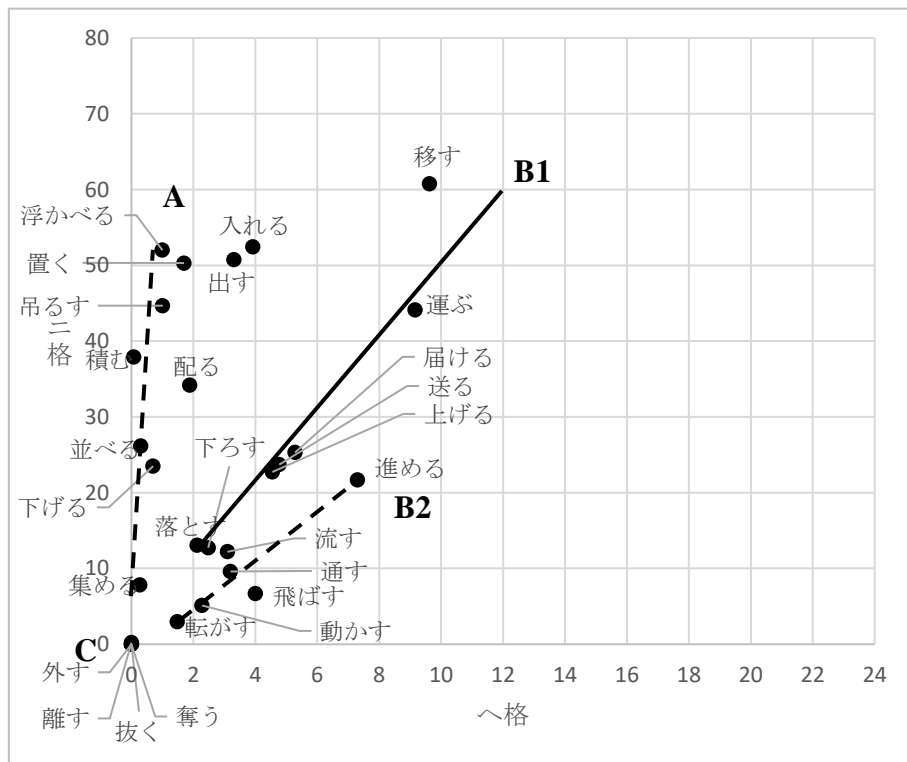


図 3-6 対象移動動詞と二格及びへ格の結合頻度（再掲）²⁹

図 3-6 と表 5-1 を比べると、図 3-6 の A グループに属する動詞のテイル形はほとんどへ格を取らず、専ら二格と共起する傾向を示しており、動作進行より

²⁹ 図 3-6 は第 3 章 p43 が初出となる。

結果残存を表す傾向が強いことがわかる。これに対して、B1 及び B2 グループの動詞の「テイル」形はへ格の共起例が増えており、その場合、主に動作進行を表すことが窺える。なお、B1 及び B2 グループの動詞の「テイル」形がニ格と共起する場合、動作進行を表すこともあれば、結果残存を表すこともあることが読み取れる。さらに、A、B1、B2 各グループの動詞の「テイル」形がカラ格と共起する場合は、それぞれニ格と共起する場合と似たような傾向がある様子が見られる。但し、B1 及び B2 グループの動詞の「テイル」形がカラ格と共起する場合はニ格と共起する場合と違って主に動作進行を表すことが窺える。最後に、C グループの動詞の「テイル」形については、専らカラ格とのみ共起する傾向があり、「テイル」形が主に結果残存を表していることがわかる。

以下では、具体的な例文を通して「テイル」のアスペクト的意味を見ていく。まず、A グループの着点志向型動詞の「テイル」形がニ格、へ格、カラ格と共起する例文を取り上げる。

- (43) と言うのは、紙綱は半袖のシャツを着ていて、その胸のポケットに煙草の袋と銀製のライターを入れていた。弾はそのライターに当って、横に逸れたんです。

(泡坂妻夫著『花火と銃声』1988)

- (44) 読んでよかった本は、社員も読めるように会社へ持って行き、六つのキャビネットにすらりと並べています。

(出口和生著『駅前不動産屋奮闘記』2005)

- (45) 青鷹丸からラジコンボートを下ろす。ボートには自動水温測定器、音響測深器、採水器を積んでいる。

(小坂丈予著『日本近海における海底火山の噴火』1991)

- (46) 寝るときは必ずそれに腕か脚をかける。また弾を装填したピストルをそばへおいていた。

(ナサニエル・フィルブリック著相原真理子訳『復讐する海』2003)

- (47) 「早くおまえが名の知られた売れっ子になってくれなければ、こんなにいい着物を着せて座敷へ出しているあたしがつまらない」と、いった。

(梅本育子著『代表作時代小説』1995)

- (48) お洒落のつもりなのか、真ん中で日の丸とフィリピン国旗を組み合わせた大きなプカシエルを首から下げている。

(恩田礼, 伊武桃内著『鳳凰家の掟』1995)

- (49) 「たぶんそうだと思いますけど…確証はありません。ただ、不思議なことに、旅行バッグを二つばかり、物置部屋から出しているんです。そこへ、着替えの衣類とか旅行用品を詰め込むつもりじゃなかったかと思うんですけど…よくわかりません」

(和久峻三著『京都奥嵯峨柚子の里殺人事件』2005)

- (50) 以前は、スピーカーをただ重ねるだけでしたが、今はエビぞった形のスピーカーを上からつるしているはずです。(Yahoo!知恵袋2005)

次に、Aグループ同様、着点志向型動詞とされるB1グループの動詞の「テイル」形がニ格と共起して結果残存を表す例文を見よう。

- (51) 野火制作室は親会社のシェア拡張の方針を受けて、現在は独立する形で事務所を九州の宮崎に移している。

(瀬口黎生著『潮のわかれ』2003)

- (52) 先月末頃から御苑内のハシブトガラスの大部分が観瀑亭付近に居を移している、多分そのせいであろう。

(中村賢二郎著『吹上の季節』1993)

- (53) ニクソンは大統領就任早々の時点で、地下にあった安全担当補佐官室にメモを届けていた。

(大森実著『激動の現代史五十年』2004)

- (54) 森川は、急に恐ろしい声で笑いだしたくなる。「あっ!」「うわっ!」森川と小清水が同時に叫んだ瞬間、車は森川のもくろみ通り右の後輪を側溝に落としていた。

(大岡玲著『ブラック・マジック』2002)

- (55) 片方の手の平に収まるくらい小さいフクロウが、迷子の花火のように、興奮して部屋中をヒュンヒュン飛び回っている。気がつくと、豆フクロウはハリーの足下に手紙を落としていた。

(J.K.ローリング作;松岡佑子訳『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』2002)

さらに、経路志向型とされるB2グループの動詞の「テイル」形がニ格と共

起して結果残存を表す例文としては次のようなものがある。

- (56) 間左衛門は、既に五カ所[□]に血を流していた。しかも、彼の面に浮んだ微笑は、いよいよ怪しい愉悦の色をたたえてきていた。

(南條範夫著『駿河城御前試合』2005)

- (57) 私はまた藤子のほうを見た。あからさまな笑顔こそ見せてはいなかったが、目元と口元がほころび、背中[□]に通っていた針金を抜いたように、からだ丸くなっているのが、はっきりと見て取れた。

(日下圭介著『「天の酒」殺人事件』1991)

第3章と第4章では、対象移動動詞と共起する格のあり方から、限界性、継続性、着点性、起点性といった素性を導き出した。また、この章では、「テイル」形に関わる素性として、継続性と結果性があることを考察した。ここでは、改めて以上の各素性の認定基準と、関係する言語現象を示しておく。

まず、〈限界性〉については、工藤(1995)など従来の動詞分類の定義に従って判断することができる。開始限界突破、または終了限界突破を示すと思われるCグループ、Aグループ、B1グループはいずれも〈+限界性〉と捉えることができるが、経路志向型とされるB2グループは必然的な終了限界を持たない非限界動詞であるため、〈限界性〉が〈-〉となると言えよう。

次に、〈継続性〉及び〈結果性〉について、第3章では、へ格及びマデ格と対象移動動詞との共起の傾向をもとに、へ格・マデ格を伴う動詞グループは〈+継続性〉を持つことを示した。また、本章の考察では、「テイル」形が動作進行を表すことに関与することを論じたが、一方、結果残存を表す場合、〈+結果性〉を抽出することができることを示した。

続いて、〈着点性〉については対象移動動詞のニ格、へ格、マデ格との共起関係から判断できる。特に、原点に集まっているCグループの動詞は〈-着点性〉として捉えられ、ニ格、へ格、マデ格と共起できるそれ以外の動詞は、〈+着点性〉として捉えられる。

最後に、〈起点性〉については、カラ格との共起関係から判断できる。本論文が対象とした動詞では、Aグループの着点専用動詞を除き、すべての動詞がカラ格と共起できる。

対象移動動詞は、以上の五つの素性の組み合わせにより、分類することがで

きる（表 5-2）。

表 5-2 動詞別と限界性、継続性、結果性、着点性、起点性との関係

A グループ	+限界性、-継続性、+結果性、 +着点性、-起点性	ex. 入れる、置くなど
B1 グループ	+限界性、+継続性、+結果性、 +着点性、+起点性	B1a ex. 移す、落とすなど
	+限界性、+継続性、-結果性、 +着点性、+起点性	B1b ex. 送る、運ぶ
B2 グループ	-限界性、+継続性、-結果性、 +着点性、+起点性	ex. 進める、動かすなど
C グループ	+限界性、-継続性、+結果性、 -着点性、+起点性	C1 ex. 離す、奪うなど
	(-限界性、+継続性、-結果 性、-着点性、+起点性)	C2 ex. 経路ヲ格を取る動詞

5.5 本章のまとめ

本章では、コーパスに現れる対象移動動詞の「テイル」形と、共起する格の結合頻度を調査し、対象移動動詞の格パターンと、アスペクト形式「テイル」の意味との関係を考察してきた。具体的には、「テイル」形が動作進行を表すか結果残存を表すかによって、グループごとに対象移動動詞が持っている〈継続性〉〈結果性〉といった素性を導出した。表 5-2 で示した通り、「テイル」形が〈結果性〉を表せるかどうかによって、B1 グループはさらに二分できる。本章ではこのように、共起格との結合頻度に基づいて、対象移動動詞「テイル」形の表す意味をより詳細に分析することができた。

第6章 移動表現における自動詞と他動詞

6.0 本章の概要

第6章では、自他の対応がある移動動詞について、自動詞と他動詞で格結合頻度（あるいは動詞のタイプ）が変化するもの、変化しないものに分けて検討する。

本章の構成の次の通りである。まず、6.1節では、移動動詞を分析する際、自動詞と他動詞を同様に扱うことが妥当であるかという問題について取り上げる。次に、6.2節では、移動を表す自動詞と他動詞を共に扱う先行研究を概観した上、残されている課題を述べる。続いて、6.3節では、本章で扱う調査対象、調査基準及び調査結果を示す。6.3節を踏まえて6.4節では、ニ格及びへ格、ニ格及びマデ格、ニ格及びカラ格、マデ格及びカラ格、へ格及びカラ格、ニ格及びヲ格と、自他の対応がある移動動詞との結合頻度を散布図でそれぞれ示す。その上で、格結合頻度に関して自他で生じる違いと、その要因について考察する。最後に、6.5節では、本章の内容をまとめる。

6.1 はじめに

従来、移動動詞の研究は自動詞を中心に進められてきた。これは自動詞の移動表現の分析がそのまま他動詞にも当てはまると見なされてきたためであると考えられる。

- (1) 子どもが虫ヲ出す。
- (2) 虫が箱ヲ出る。
- (3) *子どもが虫ヲ箱ヲ出す。
- (4) 子どもが虫を箱カラ出す。 (寺村 1982 : 194)

一方、(1)～(4)に見られるように、他動詞文では対象のヲ格と場所のヲ格がぶつかり、いわゆる二重ヲ格の制約が生じることがある。その結果、(4)のようにヲ格をカラ格で替えなければならなくなる現象が見られる。このように、他動詞文では自動詞文で生じない独自の制約があることを考慮に入れると、同じく移動動詞でも自動詞と他動詞で共起する格の現れ方は一様ではないことが推測される。すなわち移動表現の自動詞で言えることがそのまま他動詞にも当てはまるという考え方は妥当であるかどうか改めて検討する余地があるということである。

そこで、以下では、格結合頻度の観点から自他が対応する移動動詞を調査・分析する。

6.2 先行研究

まず、移動を表す自動詞と他動詞を共に扱う先行研究について確認する。本論文では、第2章で対象移動動詞一般に関する先行研究について、第3章と第4章で移動に関わるニ格、へ格、マデ格、カラ格についての先行研究について、それぞれ取り上げた。この章では、ここまで取り上げた諸論考のうち、6.2.1節において移動を表す自動詞と他動詞を扱うものについて、6.2.2節において場所を表すヲ格に関するものについて、それぞれ再度言及する。

6.2.1 移動の自他を扱う先行研究

これまでの移動動詞に関する研究は主に自動詞を中心に行われてきたが、寺村秀夫(1982)、宮島達夫(1986)、森山卓郎(1988)では自動詞と形態的に対立をなす他動詞についてもふれられている。第2章では、それらのうち、森山(1988)が対となる自他の移動動詞を同じタイプの動詞に分類していることを既に述べた。以下では、自他で異なる動詞分類を行っている寺村(1982)と宮島(1986)を中心に確認する。

6.2.1.1 寺村秀夫 (1982)

寺村 (1982) は、移動を表す自動詞以外に、自動詞と形態的な対立をなす他動詞についてもふれている。寺村 (1982: 122) は働きかけと移動の組合せを、「主体 (仕手) X が、受け手 Y に働きかけて、その力で Y がある場所から出たり、通ったり、入ったりする」表現としており、「このうち、出たり、通ったりは、場所 Z が「～ヲ」という形をとるため、働きの受け手 Y の形「～ヲ」とぶつかり」、同じ助詞の衝突という問題が起こると指摘している。

(5) 「入ル、着ク；泊マル」類

A: 入る、乗る、届く、着く、上がる、降りる、移る、届くなど
(出どころ「カラ」が副次補語)

B: 集まる、集中する、近づく、沈む、広まる、広がるなど
(出どころ「カラ」が副次補語)

C: 浮く、浮かぶ、並べる、倒れる、泊まる、住む、寝るなど
(出どころ「カラ」を取らない)

(6) 「入レル」類－働きかけと移動の複合

A: 上げる、入れる、移す、置く、落とす、近づける、着ける、届けるなど

(出どころ「カラ」が副次補語)

B: 集める、沈める、捨てる、広める、広げるなど
(出どころ「カラ」を取らない)

C: 浮かべる、並べる、倒す、立てる、泊める、寝かすなど
(出どころ「カラ」を取らない)

寺村 (1982) の動詞分類において、(5) (6) に示す A 類、B 類、C 類はいずれも到達点のニ格を取ることができる。また、(5A) (6A) と (5C) (6C) は出どころのカラ格を副次補語として取ることができる点において一致している。一方、(5B) と (6B) について寺村 (1982) では、(5B) がカラ格を副次補語として取るのに対し、(6B) はカラ格を取らないことが指摘されている。

6.2.1.2 宮島達夫 (1986)

宮島 (1986 : 50) では、すでに言及した通り「自動詞と他動詞とは、移動について、よくにた型の格支配をする」と指摘されているものの、同論において自他が対応する移動動詞は、以下の表 6-1 のように自動詞と他動詞で異なる整理がなされているものもある。

表 6-1 宮島 (1986) が扱う、自他の対応を持つ動詞の分類

動詞	種類
あがる〈自〉	到着経過型
あげる〈他〉	純粹到着型
おちる〈自〉	到着出発型
おとす〈他〉	純粹到着型
おりる〈自〉	出発到着型
おろす〈他〉	到着出発型
でる〈自〉	到着出発型
だす〈他〉	
とおる〈自〉	純粹経過型
とおす〈他〉	純粹到着型
はいる〈自〉	純粹到着型
いれる〈他〉	

表 6-1 から、宮島 (1986) が取り上げている 6 対の自他対応移動動詞のうち、対応する他動詞と自動詞で同じ整理がなされているのは「はいる—いれる」と「でる—だす」の 2 対のみであることが読み取れる。一方、「あがる」「あげる」、「おちる」「おとす」、「とおる」「とおす」は他動詞と自動詞で異なる整理がなされており、特に他動詞は、いずれも〈純粹到着型〉に属することが分かる。また、「おりる」と「おろす」の対は、自動詞で優位な要素〈出発点〉が他動詞で二番目に下がり、逆に自動詞で二番目の要素〈到着点〉が他動詞で優位になることが分かる。以上の 4 対の動詞（「あがる」「あげる」、「おちる」「おとす」、「とおる」「とおす」）を観察すると、〈到着点〉を示す度合いが他動詞におい

ていずれも強化される点で共通していることが窺える。

6.2.1.3 移動に自他に関する課題

以上の先行研究を概観すると、未だ以下の3点が課題として残されていると考えられる。

- (7) 寺村（1982）の動詞分類では、(5B) (6B) の自他動詞について、カラ格を副次補語として取るかどうかという点で異なる整理を行っていることが分かる。また、同論では、(5A) に含まれる「置く」がカラ格を副次補語として取ることができる。一方、(5B) に含まれる「集める」はカラ格を取らないことが指摘されている。しかし、そのような指摘は、本論文の第3章と第4章で観察された結果と一致していない。
- (8) 宮島（1986）では自他が対応する移動動詞と場所名詞句との結合頻度について分析されているが、調査の妥当性については未だ十分な検証が行われていない。
- (9) 宮島（1986）の動詞分類から導き出された他動詞において〈到着点〉の要素が優位にあるという傾向を検証する。

6.2.2 「ヲ」格についての先行研究

本論文の第3章と第4章では、移動に関わるニ格、へ格、マデ格、カラ格についてすでに検討を行った。以下では、第3章と第4章でも一部触れた先行研究のうち、いわゆる場所のヲ格に関する先行研究を確認しておこう。

- (10) 教室を出る。 (起点)
- (11) 道を走る。 (経路)
- (12) 峠を越える。 (経由点)

本論文では、(10)～(12)のような「起点」「経路」「経由点」の意味役割を担う場所のヲ格を扱う。

先行研究において、場所のヲ格の意味役割に関しては、「経由点」と「経路」を区別する立場と、区別しない立場がある。前者の立場を取る代表的な研究として、成田徹男(1979)、杉本武(1995)、川野靖子(2001)などが挙げられる。一方、後者の立場を取る代表的な研究には、宮島達夫(1972)、寺村秀夫(1982)、岡田幸彦(1998)などがある。本論文は川野(2001)に従って、「経由点」と「経路」を区別する立場を取ることとする。川野(2001)については、第5章5.2.3節ですでに概略を説明したため、ここでは結論のみを述べる。川野(2001)は、〈結果の局面の有無〉と〈限界点の有無〉という二つの基準に基づいてヲ格句を伴う移動動詞句の意味特徴を分析している。同論では特に、アスペクト的観点からヲ格句を伴う移動動詞の位置付けを考察しており、限界点の有無に関して「経路」を示すヲ格句は〈-限界性〉を持つが、「通過点」「起点」を表すヲ格句は〈+限界性〉を持つことを指摘している。

6.3 調査対象、調査方法及び調査結果

6.3.1 調査対象

本章の考察対象となるのは、6.2.1.2で言及した「あがる」「あげる」、「おちる」「おとす」、「おりる」「おろす」、「とおる」「とおす」の4対に、本論文が第3章で提示したA、B1、B2、Cに属する動詞の一部を加えたものである(表6-2)。

表 6-2 本章が扱う考察対象³⁰

	他動詞	自動詞
A グループ	下げる	下がる
B1 グループ	上げる	上がる
	移す	移る

³⁰ 表 6-2 に示す A、B1、B2、C グループは他動詞のみに適用できる分類であり、自動詞がその分類に当てはまるかどうかは自明ではない。この点の考察は後述する。

	落とす	落ちる
	おろす	おりる
B2 グループ	転がす	転がる
	通す	通る
	飛ばす	飛ぶ
	流す	流れる
C グループ	離す	離れる

6.3.2 調査方法

この章は第3章で提示した方法と基準に従って調査を行った。具体的には、「中納言」のキーの語彙素を表6-2で挙げた語に指定し、用例の検索を行った。また、次の基準に従って、実際に分析の対象とする用例を選定した。

- (12) 各動詞の表記上の違い（漢字か平仮名かなど）は問わない。
- (13) 各動詞の原形と「～テイク／テクル」形について、宮島（1986：46）では、「移動に直接関係する格支配のうえで、ちがった性質をもっている」と指摘し、別の動詞とみなしている。本論文もその考えに従うことにする。すなわち本章では、原形と「～テイク／テクル」形を区別して観察を行う。
- (14) 「足を運ぶ」「腰を下ろす」のようなコロケーションは移動を表すというより、慣用句であると考えられるため、対象外とする。
- (15) 「キッチンから運んできた料理」のように、連体修飾的なものも考察対象として扱う。
- (16) 「～はじめる」「～つづける」など局面動詞が付いたものは考察対象から除外する。

6.3.3 調査結果

6.3.2 節で示した調査方法と選定の基準に従って用例の選定を行った結果、実際に分析の対象とする用例数を得た。これをもとに、表6-2で掲げた動詞の

うち自動詞が取る格のパターンと結合頻度を調査した結果を以下の表 6-3 に示す。

表 6-3 自動詞と場所名詞句の結合頻度³¹

	に	へ	まで	から	を	から に	から へ	から まで	から を	を に	を へ	を まで	合計
上がる	998 32	167 5.35	75 2.4	196 6.28	241 7.7	23 0.74	9 0.29	1 0.03	7 0.22	1 0.03	1 0.03	3 0.1	3120
移る	997 42.8	271 11.6	0	27 1.16	0	96 4.1	43 1.8	0	0	0	0	0	2328
落ちる	1187 29.7	84 2.1	9 0.22	397 9.9	6 0.15	25 0.6	5 0.12	0	0	0	0	0	4003
おりる	528 11.7	166 3.68	54 1.2	616 13.6	678 15	33 0.7	16 0.4	4 0.01	20 0.44	0	4 0.01	0	4515
転がる	436 41	12 1.1	6 0.6	8 0.75	69 6.5	0	2 0.2	0	0	0	0	0	1063
下がる	219 20.8	57 5.4	16 1.5	45 4.3	20 1.9	4 0.4	2 0.2	0	0	0	0	0	1052
通る	64 1.2	54 1.02	2 0.04	2 0.04	2536 47.8	1 0.02	4 0.08	0	4 0.08	0	0	0	5306
飛ぶ	176 6.3	123 4.4	32 1.1	20 0.7	369 13.2	15 0.5	17 0.6	4 0.14	3 0.1	0	0	0	2800
流れる	300 9.14	68 2.1	12 0.37	127 3.87	571 17.4	18 0.55	27 0.8	2 0.06	5 0.15	14 0.4	1 0.03	0	3281
離れる	8 0.1	4 0.05	3 0.04	1965 25.9	1927 25.4	2 0.02	6 0.08	0	1 0.01	0	3 0.04	0	7582

³¹ 表 6-3 について、上の数字は格成分を取る用例数を表しており、下の数字は格成分を取る用例が全体に占める割合を表している。また、用例数には、格成分を取っていない例も含めている。

6.4 考察

6.4.1 自他動詞と二格及びへ格の結合頻度

まず、6.3 節の調査を踏まえて自動詞および他動詞が取る二格、へ格の結合頻度を図 6-1 に示す。図中では動詞と二格との結合頻度を縦軸とし、動詞とへ格との結合頻度を横軸として示している。また、自動詞と他動詞で二格及びへ格を取る割合がどのように変化するかを分かりやすく示すため、対応を持つものを同じマーカーで標示してある³²。

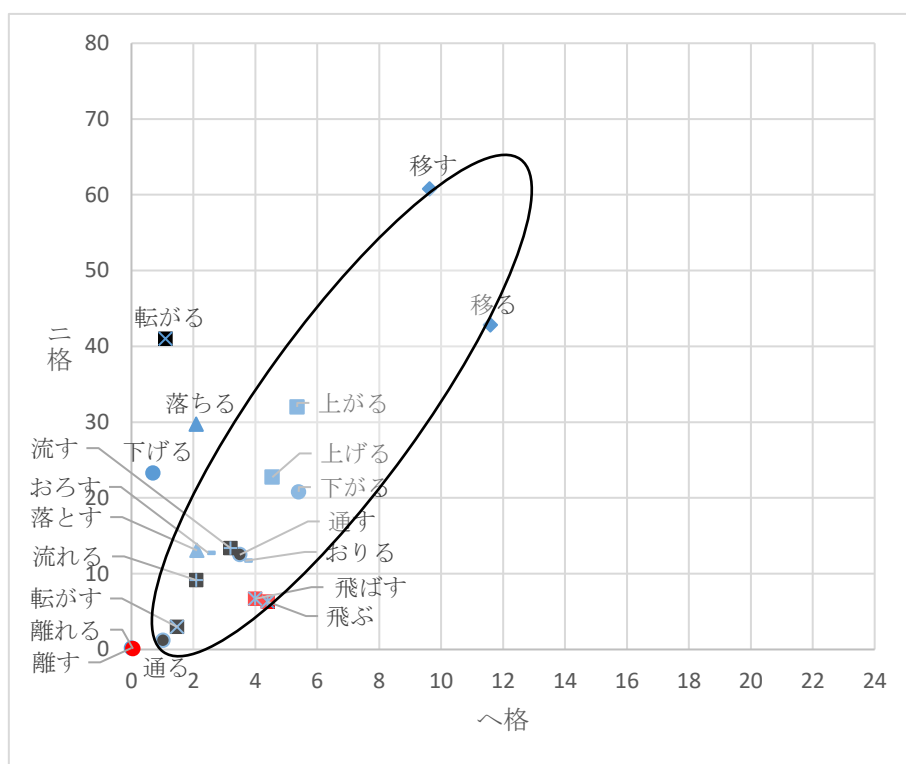


図 6-1 自他動詞と二格及びへ格の結合頻度

まず、動詞と二格との結合頻度の変化に注目すると、大きく三つの傾向が見られる。一つ目は、起点志向型とされる「離す～離れる」の対は、自他で差が見られないということである。他動詞「離す」と自動詞「離れる」はともに原点の位置に出現しており、二格とへ格のいずれとも共起しない傾向がある。

³² 特に断らない限り、以下では同様に図示することとする。

また、二つ目は、他動詞の方が二格とより高い頻度で共起している。この傾向を示す動詞群には「移す」「下げる」「おろす」「飛ばす」「通す」「流す」がある。

三つ目は、他動詞より自動詞と二格の共起が優位にある。この傾向を示す動詞群には「転がる」「落ちる」「上がる」がある。これらの動詞は二格との共起で移動した後その場に存在していることを表す。

次に、動詞とへ格との結合頻度の変化について考察してみよう。図6-1では、原点の位置にある「離す」「離れる」、「転がす」「転がる」、「落とす」「落ちる」、「下げる」「下がる」を除くと、残る動詞がいずれも右肩上がりの楕円に含まれることが窺える。この楕円に入る自他対応を持つ動詞と二格及びへ格の相関関係を確かめるため、自他対応を持つ動詞と二格、へ格との相関係数を、それぞれ求めることにする。まず、自動詞と二格の格結合頻度を独立変数とし、他動詞と二格の格結合頻度を従属変数として、ピアソンの積率相関係数を算出すると、 $r=.90$ という結果が得られた。同様に、自動詞とへ格及び他動詞とへ格の相関係数を求めたところ、 $r=.94$ という結果が得られた。石川・前田・山崎 (2010) の指摘に従えば、「移る」「移す」、「上がる」「上げる」、「おろす」「おろす」、「流れる」「流す」、「飛ぶ」「飛ばす」、「通る」「通す」の6対は二格、へ格とそれぞれ「強い正の相関」を持っていると言える。

それに対して、「転がす～転がる」「落とす～落ちる」「下げる～下がる」の3対はへ格との結合頻度において上記の各動詞と大きな違いが見られる。図6-1では、「転がる」「落ちる」はともに縦軸の方へ引っ張られており（すなわち横軸の値が低く）、二格と優先して結びつきやすい傾向を示している。一方、それらと対応する他動詞の「転がす」「落とす」と、自動詞の「下がる」はいずれも楕円に入っており、へ格と結びつきやすい傾向を示している。そこで以下では、このようにへ格との結合分布に関してその他の自他動詞と違う傾向が見られる「転がる～転がす」「落ちる～落とす」「下がる～下げる」の3対について詳しく分析する。

まず、「下がる」と「下げる」について言及する。BCCWJから収集した用例を個別に観察し、『明鏡国語辞典（第三版）』の記述を照らし合わせて見ると、自動詞である「下がる」は「公的な所や目上の人のいる所から離れる」または

「後ろへ移動する」³³という意味を表す場合、特にへ格と共起しやすい傾向が見られる。一方、他動詞である「下げる」は「上部を固定して他方が下に垂れるようにして取り付ける」³⁴という意味を表す用例が数多く観察され、特に移動がなされた後、その場に存在していることを表しやすい様子が見られる。このように「下がる～下げる」の対では表される意味用法の違いによって、二格、またはへ格と共起する頻度が異なっているものと推測される。

次に、ともに二格と共起しやすい傾向を示す「転がる」「落ちる」について言及する。自動詞である「転がる」については、BCCWJから収集した1063例のうち、二格と共起する例が436件確認された。これらの用例を個別に観察し、『明鏡国語辞典（第三版）』の記述と照らし合わせると、「物が無造作に置かれている。放置されている」、あるいは「たやすく手に入るものとしてどこにでも存在している」³⁵という意味を表す用例が多くあり、特に「テイル」の形で用いられることが分かる。また、同じく自動詞である「落ちる」については、二格と共起して物が落下した後の存在場所を示す用例が多く観察された。したがって、「転がる」と「落ちる」は二格と共起して移動を表すというより、むしろ移動した後の存在場所に注目する形で現れることが推測される。この点で「転がる」と「落ちる」は縦軸に近い位置で出現していると言えるだろう。

以上見てきたように、他動詞と比べて「下がる」「転がる」「落ちる」における格結合頻度が大きく変動しているのは、他動詞に見られない用法によって生じた意味変化に基づくものと考えられる。

6.4.2 自他動詞と二格及びマデ格の結合頻度

次に、自動詞および他動詞が取る二格及びマデ格の結合頻度を図6-2に示す。図中では動詞と二格との結合頻度を縦軸とし、動詞とマデ格との結合頻度を横軸として示している。

³³ 『明鏡国語辞典（第三版）』（2021：629）による。

³⁴ 『明鏡国語辞典（第三版）』（2021：635）による。

³⁵ 『明鏡国語辞典（第三版）』（2021：607）による。

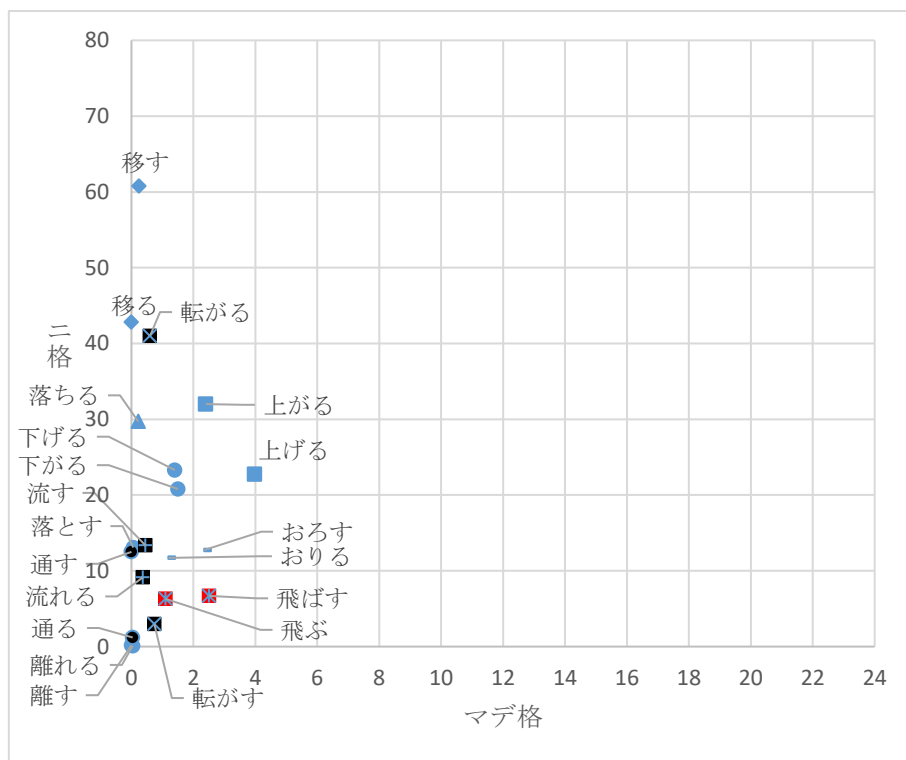


図 6-2 自他動詞とニ格及びマデ格の結合頻度

ニ格の結合頻度の変化についての議論は前節で述べたため、この節では、マデ格の結合頻度に生じる変化に注目する。図 6-2 において、自動詞がマデ格を取る程度と他動詞がマデ格を取る程度を照らし合せると、全体的に似たような傾向が見られるが、「上げる」「上がる」、「おろす」「おりる」、「飛ばす」「飛ぶ」の 3 対では、自動詞と他動詞でマデ格との結合頻度に大きな差があることがわかる。この 3 対はいずれも他動詞の方がマデ格と結びつきやすい。一方、それ以外の 7 対は自他の違いがマデ格との結合頻度に影響を与えないと言える。

また、第 3 章の考察では、へ格とマデ格が「+継続性」を持つ点において共通していることを論じた。図 6-1 と図 6-2 を比べると、図 6-2 において「移す」「移る」、「通す」「通る」、「流す」「流れる」の対はいずれも縦軸に引き寄せられており、マデ格と共起せず専らニ格と共起していることがわかる。

さらに、第 4 章では、非限界動詞がマデ格句とは共起する一方、ニ格句とは共起しにくいとする先行研究の指摘を踏まえつつ、他動詞とニ格及びマデ格との結合頻度を調査した。調査の結果、言語資料における実際の傾向は、先行研究の指摘と必ずしも一致していないこと、また、そのような先行研究の議論と実際の傾向の違いの背後に、自他の違いに関わる可能性があることが示された。

一方、図 6-3 において、非限界動詞とされる「転がる」「転がす」、「流れる」「流す」、「通る」「通す」の対ではマデ格との結合頻度に関して、自他が関与する様子が見られない。従って、結合頻度の変化に動詞の自他が関わるのは、「飛ぶ」「飛ばす」の対をはじめとする一部の語の問題であることが窺える。

6.4.3 自他動詞と二格及びカラ格の結合頻度

続いて、着点の二格、へ格、マデ格と同様、起点のカラ格が動詞の格結合にどのような変化をもたらすのかを考察する。まず、自動詞および他動詞が取る二格とカラ格の結合頻度を図 6-3 に示す。図中では、動詞と二格との結合頻度を縦軸とし、動詞とカラ格との結合頻度を横軸として示している。

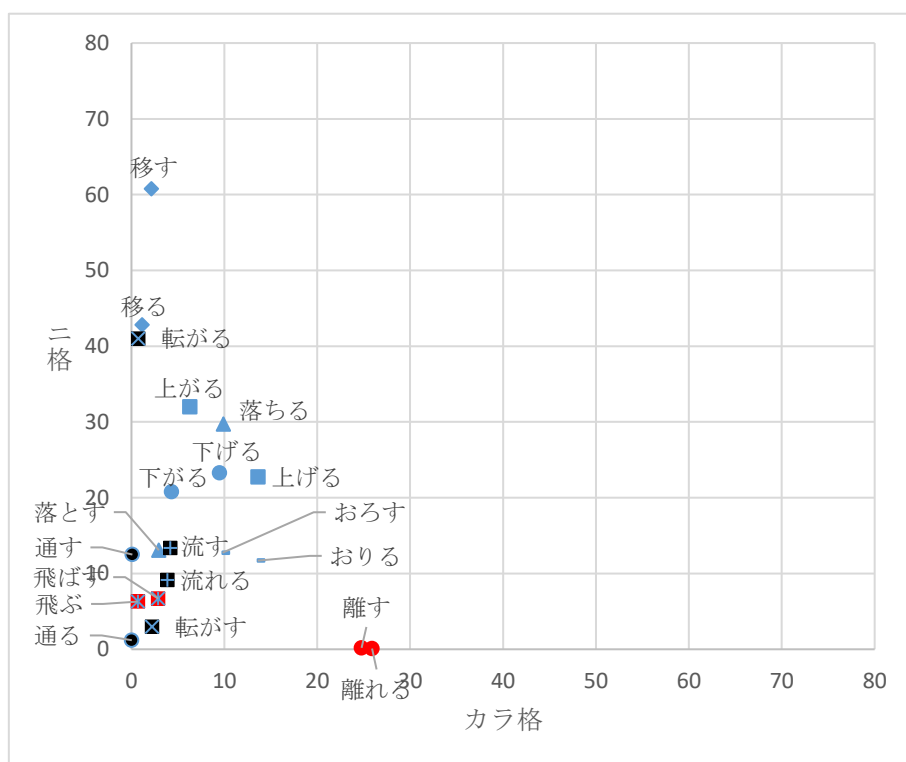


図 6-3 自他動詞と二格及びカラ格の結合頻度

図 6-3 において、自動詞と他動詞のあり方を巡ってはカラ格との結合頻度の観点で 2 つの傾向が見られる。一つ目は、自動詞と他動詞でカラ格との結合頻度があまり変わらない傾向である。二つ目は、自動詞と他動詞のどちらかがよ

りカラ格と結びつきやすい傾向である。特に、カラ格との結合頻度にはっきり差が見られる動詞に注目すると、自動詞において他動詞より起点に注目する傾向があるものとして「落ちる」「おりる」が挙げられる。一方、他動詞において、自動詞より起点に注目するものとして「上げる」「下げる」³⁶が挙げられる。

宮島（1986）によると、「落ちる」「おりる」「上げる」といった動詞は、上下のような客観的な基準をもった動詞であるとされる。宮島（1986：49）では、「上下の移動をくらべると、〈上〉が到着点へのつよい志向をもっているのに対し、〈下〉は、やや出発点よりである」と指摘されている。また、そのような違いが生じる理由について、同論（1986：49）では、「われわれの生活している平面は、上への移動では出発点に、下への移動では到着点になるのが自然で、表現されずにすまされることがおおいはずだ」と説明されている。この説明を援用すると、上下の移動を表す「落ちる」「おりる」「上げる」がいずれも起点志向性を高く持つことについて、統一的に解釈できると言える。

6.4.4 自動詞とマデ格及びカラ格の結合頻度

さらに、自動詞および他動詞が取るマデ格及びカラ格の結合頻度を図 6-4 に示す。ここでは動詞とマデ格との結合頻度を縦軸とし、動詞とカラ格との結合頻度を横軸として示している。

³⁶ 「下げる」は「吊るす」と同様に、カラ格と二格の両方を取ることができる上に、両者が交替しても意味の変化を伴わない点で特殊な動詞であるため、本章における以下の議論では「下げる」を考察対象から外すことにする。

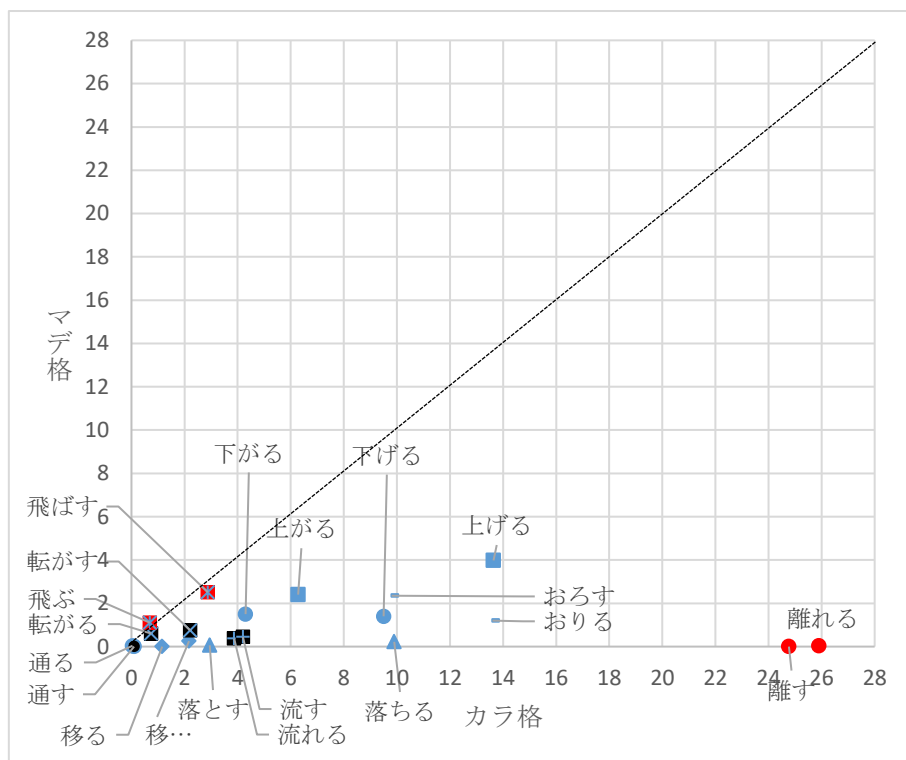


図 6-4 自他動詞とマデ格及びカラ格の結合頻度

図 6-4 において、原点を起点として引いてある斜めの点線は、動詞が 1:1 の比率でマデ格及びカラ格と共起することを示している。この点線との位置関係によってすべての動詞を大きく 4 つのグループに分けることができる。まず、原点に集まる「通る」「通す」の対はカラ格とマデ格のいずれとも共起しない。また、点線に沿って並んでいる「飛ぶ」「飛ばす」の対は 1:1 の割合でカラ格とマデ格の両方と共起している。一方、横軸に沿って出現する動詞グループとして「移る」「移す」、「落ちる」「落とす」、「流れる」「流す」、「離れる」「離す」の 4 対があり、これらはマデ格と共起せず、専らカラ格と共起している。さらに、点線と横軸の間に分布している動詞グループがあり、それらはカラ格とマデ格のいずれとも共起でき、かつマデ格よりカラ格と結びつきやすい傾向を持っている。

6.4.5 自他動詞とへ格及びカラ格の結合頻度

以下では、自動詞および他動詞が取るへ格及びカラ格の結合頻度を図 6-5 に

示す。図 6-5 では、動詞とへ格との結合頻度を縦軸とし、動詞とカラ格との結合頻度を横軸として示している。

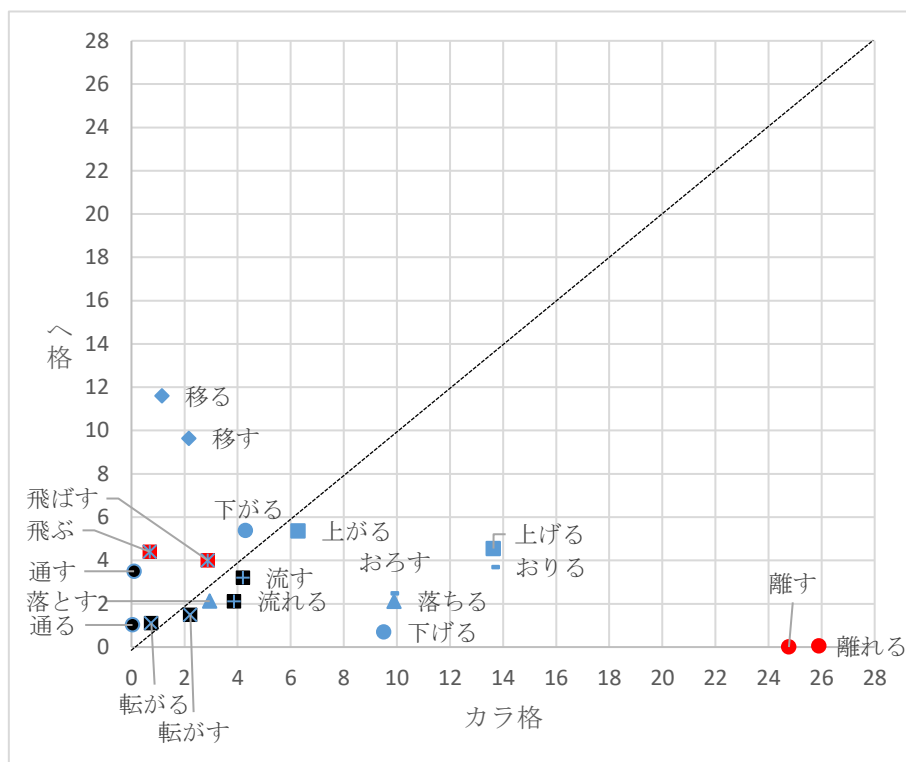


図 6-5 自他動詞とへ格及びカラ格の結合頻度

図 6-5 では、原点を起点として引いてある点線により、動詞が 1 : 1 の割合でへ格及びカラ格を取る際の分布が可視化されている。この点線との位置関係によってすべての動詞を 3 つのグループに分けることができると言える。まず、縦軸に沿って並んでいる動詞グループがあり、これらの動詞はへ格しか取らない。これに対して、横軸に沿って出現する動詞グループがあり、これらの動詞はへ格と共起せず、専らカラ格のみと共起している。さらに、縦軸と横軸の間に分布している動詞グループがあり、このグループの動詞はカラ格とへ格のいずれとも共起できる。

6.4.6 自他動詞と二格及び場所ヲ格の結合頻度

最後に、自動詞および他動詞が取る二格及び場所ヲ格の結合頻度を図 6-6 に

示す。図 6-6 では、動詞と二格との結合頻度を縦軸とし、動詞と場所ヲ格との結合頻度を横軸として示している。

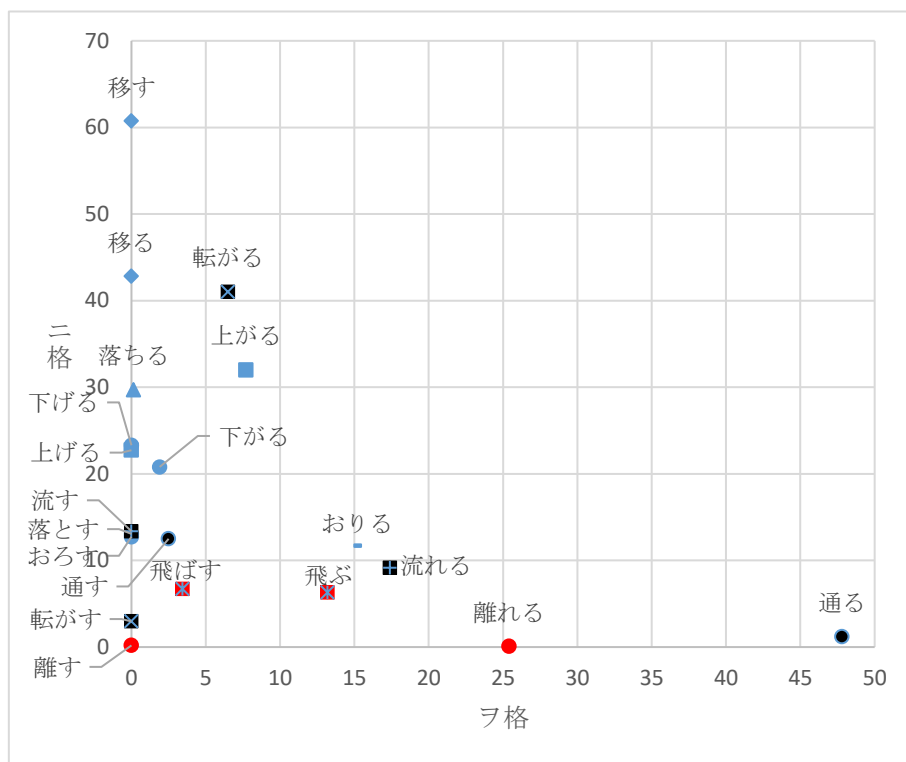


図 6-6 自他動詞と二格及びヲ格の結合頻度

図 6-6 では、すべての動詞を大きく 4 つのグループに分けることができる。まず、縦軸のみに沿って出現する動詞群があり、これらはヲ格を取らず、専ら二格を取っている。このグループに過半数の他動詞と自動詞の「移る」「落ちる」が入っている（他動詞の多くがそのようなふるまいを見せるのは、二重ヲ格制約のため、場所ヲ格を取ることができないことによるものと思われる）。一方、横軸に沿って並んでいる動詞群があり、それらは二格と共起せず、場所のヲ格しか取らない傾向を持っている。このグループに属するのは「離れる」のような純粹起点志向型の自動詞である。また、縦軸に沿う形でも横軸に沿う形でもない中間的な位置に、二格と場所のヲ格のいずれとも共起できる動詞群が分布している。このグループには自動詞が多く含まれるが、「飛ばす」「通す」のような場所のヲ格を取ることができる他動詞も入っている。最後に、原点に集まる動詞があり、この動詞は二格とヲ格のいずれとも共起しない。このグループには純粹起点志向型の他動詞とされるものがある。

以上をまとめると、自動詞では他動詞より経路志向性が高いが、「飛ばす」「通す」のような場所のヲ格を取ることができる他動詞も一部ではあると言えよう。

6.5 本章のまとめ

本章では、移動表現で用いられる、自他が対応する動詞について、自他で格結合頻度（あるいは動詞のタイプ）が変化するものと、自他で格結合頻度が変化しないものに分けて検討した。具体的には、移動のあり方と自他の対立がどのように関わっているのか、他動詞の分析と同様に散布図を用いて分析した。

調査の結果、自他でタイプが変わらないものも多い一方、タイプが変更するものも見られた。変更する場合、以下の3つの傾向性があった。

- ① 移動動詞とニ格及びへ格との結合頻度を観察する限り、自動詞と他動詞はともに5:1の割合で共起しており、大きな差が見られない。ただし、「転がる」「転がす」、「落ちる」「落とす」は自動詞で他動詞より着点指向性が高い様子が見られる。一方、「下がる」「下げる」は自動詞で他動詞より継続性が高いことが窺える。
- ② カラ格に注目すると、自他で全体的な差はない。ただし、「落ちる」「落とす」、「おりる」「おろす」は自動詞で他動詞より起点指向性が高いと言える。
- ③ 場所のヲ格に注目すると、自動詞では他動詞より経路志向性が高いが、「飛ばす」「通す」のような場所のヲ格を取ることができる他動詞も見られる。

自他の間で生じた上記の違いは、自動詞が持っている意味用法が他動詞には見られないことによると考えられる。

第7章 テイク形の格結合頻度について

7.0 本章の概要

第3章～第5章では、対象移動動詞の格結合頻度に基づいて新たな動詞分類を行った上、対象移動動詞の格のあり方に「着点性」「起点性」「限界性」「結果性」「継続性」といった5つの意味素性が関わっていることを論じた。第7章では、本動詞としての対象移動動詞に「テイク」が付いた場合、格の結合頻度が本動詞と比べてどのように変化するか分析し、そのような違いが生じた要因について考察する。

この章の構成の次の通りである。まず、7.1節では、空間的移動を表す「Vテイク」形を考察対象として取り上げることについて述べる。次に、7.2節では、「Vテイク」に関する諸研究のうち、格結合頻度に関する先行研究に注目し、それらの問題点を指摘した上、この章で取り組む課題を整理する。さらに、7.3節では、第3章で本動詞の格結合頻度を調査する際に用いた手法に倣い、「Vテイク」形の格結合頻度について調査する。続いて、7.4節では、コーパスにおける「Vテイク」形の用例とニ格、へ格、マデ格、カラ格との格結合頻度の実態を散布図で示す。その上で、本動詞の格結合頻度との比較を通して、「テイク」に後続した場合に生じる格の結合頻度の変化に「限界性」「結果性」「継続性」「着点性」「起点性」といった5つの素性が関わっていることを示す。最後に、7.5節では、この章の内容をまとめる。

7.1 はじめに

現代日本語において、「Vテイク」と「Vテクル」は大きく空間的移動を表す場合とアスペクトを表す場合とに分けることができる。本論文では、(1)～(4)に示すような空間的移動を表す「Vテイク」を扱う³⁷。

³⁷ 本章の調査では、アスペクトを表す用例は対象としない。

- (1) 二人は、ホテルを出ると、午後の陽差しの中を、南禅寺まで歩いていった。
(山村美紗著『燃えた花嫁』2005)
- (2) 十兵衛が立ちあがり、大刀で刺客の首を刎ねる。それが目黒川へ飛んでいった。
(宮城賢秀著『女首領』2005)
- (3) 一緒に映画館を出て、最寄のタクシー乗り場まで送っていった。彼女は丁寧に礼を述べ、車に乗り込んで去っていった。
(宮部みゆき著『誰か』2003)
- (4) ひさは二つほど重要な証言をした。一つは手紙の件で、昨晚伊都の部屋まで夕食を運んでいったとき、便箋に何か書いていたというのである。
(麻耶雄嵩著『翼ある闇』1993)

(1) (2) は主体の移動を表し、(3) (4) は対象の移動を表している。従来の移動動詞に関する研究では、(1) (2) のような移動を表す自動詞に重きが置かれてきたが、(3) (4) のような他動詞が移動を表す現象は十分に考察されていないと言える。

第3章と第4章では、対象移動動詞の格結合頻度に基づいて動詞分類を行ったが、この章はそこで導かれた枠組みをもとに、(3) (4) のような対象の空間的移動を表す「V テイク」について考察を行う。対象移動動詞は〈移動性〉という素性を持ち、カラ格、ニ格、へ格、マデ格と結びつくことが可能であるとされている。したがって、対象移動動詞の「テイク」形も本動詞の〈移動性〉を継承しており、カラ格、ニ格、へ格、マデ格と共起することが想定できる。しかしながら、実際の用例の観察からは、本動詞とカラ格、ニ格、へ格、マデ格との結合頻度と、本動詞に「テイク」が付いた場合の格結合頻度で大きな違いがある様子が見られる。また、従来同じグループであるとされてきた動詞が「テイク」の有無によって、まったく異なった振る舞いを示すことも窺える。本章ではこのように、「V テイク」形の格結合頻度の実態及び、本動詞の格結合頻度と比較した結果を示し、その要因について考察する。

7.2 先行研究

「V テイク」と「V テクル」については、これまで両形式の意味や本動詞との共起関係といった観点から様々な分析がなされてきた（森田良行 1968、寺村秀夫 1984、今仁生美 1990、近藤泰弘 2000 など）。そのうち、格結合頻度に基づく代表的な研究として宮島達夫（1986）と、同論をさらに発展させた李善姫（2009）がある。以下、二つの論をそれぞれ概観する。

7.2.1 宮島達夫（1986）

宮島（1986）は、移動動詞と場所名詞句との結合頻度に基づいて動詞分類を行った。具体的には、調査の結果に基づき、移動動詞を大きく〈到着点志向型〉〈出発点志向型〉〈経過点志向型〉（本論文では、それぞれ「着点志向型」「起点志向型」「経路志向型」という）の3種類に分けている。また、動詞分類を行う際、「V テイク/テクル」形は「移動に直接関係する格支配のうえで、ちがった性質をもっている」（宮島 1986 : 46）ため、別の単語と見なしている。以下の表 7-1 では、同論の調査における、移動動詞の「テイク/テクル」形と共起する場所名詞句との結合頻度を示した。

表 7-1 宮島（1986）による「テイク/テクル」形の格結合頻度

	到着	出発		到着	出発
あるいていく	8	—	—くる	5	2
かえっていく	4	—	—くる	15	13
つれていく	10	—	—くる	4	—
でていく	10	11	—くる	8	11
とんでいく	3	1	—くる	2	—
のぼっていく	2	—	—くる	2	—
はいていく	16	—	—くる	10	—
もっていく	7	—	—くる	4	—
計	60	12	計	50	26

宮島（1986）は、「テイク」に比べて「テクル」の方がやや出発点のカラ格と結合頻度が高いのは、「クル」の中心地志向性（本論文では「一遠心性」あるいは「求心性」と呼ぶことにする）によるためであることを指摘している。

7.2.2 李善姫（2009）

李（2009）は宮島（1986）が提示した結合頻度調査を参考にし、移動動詞と場所名詞句との結合頻度を調べ、移動動詞の範疇的意味を明らかにした上で動詞の分類を行った。李（2009）によると、移動動詞の範疇的意味の違いは「移動動詞のテ形+イク/クル」にも表れるとされ、コーパスに基づき「移動動詞のテ形+イク/クル」の結合頻度を調査した結果、次の二点の考察を導いている。

- (5) 移動様態経路動詞のテ形+イク/クル」は前項動詞が「イク/クル」の移動様態を表す。
- (6) 「出発の位置変化・到着の位置変化・経路動作、経路動作を表す動詞のテ形+イク/クル」の形は前項動詞で表される移動の視点の違いを表す。

7.2.3 先行研究の問題点と本章の立場

以上確認したように、宮島（1986）は格結合頻度の観点から移動動詞の分類を行ったものであり、「V テイク/テクル」形に考察の主眼を置くものではない。したがって、同論では、本動詞に比べて「V テイク/テクル」形が異なった性質を持っていることや、「テクル」と出発点のカラ格の結びつきの背後に、「クル」の中心地指向性（本論文では「一遠心性」あるいは「求心性」と呼ぶことにする）があること等、重要な指摘がなされているが、いずれも十分な検証がなされているわけではない。

一方、李（2009）による「V テイク/テクル」についての結合頻度調査では、

移動様態経路動詞及び出発の位置変化動詞が「イク」と結びつきやすいのに対して、到着の位置変化動詞は「クル」と結びつきやすいという観察が得られている。ただし、同じく着点志向型のものである際、「イク」と「クル」で異なるタイプの前項動詞を選ぶ理由については、言及されていない。

以上の先行研究の問題点を踏まえ、本章では主に、次の2点を議論する。

- (7) a. それぞれ起点志向型、着点志向型、経路志向型の本動詞に着点志向型とされる「イク」を付けると、格結合にどのような影響があるのか。
- b. 本動詞の格結合頻度と、「テイク」形の格結合頻度の間には、どのような違いがあるのか。また、そのような違いが生じた要因は何であるか。

具体的な検討の方法として、コーパスに現れる対象移動動詞の「V テイク」形とニ格、へ格、マデ格、カラ格との結合頻度を調査し、「V テイク」形の格結合頻度の実態を示す。さらに、本動詞とニ格、へ格、マデ格との結合頻度との詳細な比較を通じて、「テイク」が本動詞の格結合頻度に与える影響について考察していく。

7.3. 考察対象と調査結果

まず、移動を表す「テイク」の付いたものについて、第3章で本動詞の格結合頻度を調査する際に用いた手法と同様の手法で調査を行った³⁸。表7-2は、第3章で示した本動詞と格の結合頻度と、新たに調査した「テイク」の付いた形の格の結合頻度とを対照させたものである。

³⁸ 「テイク」の格結合頻度を調査する際に、『筑波ウェブコーパス』を用い、以下の基準に従い、用例採取を行った。

- (1) 格動詞の表記上の差異は問わず、同一の動詞とみなす。
- (2) 「足を運ぶ」「腰を下ろす」のようなコロケーションは移動を表すというよりむしろ慣用句であると一般的に認識されることが考えられるため、対象外とする。
- (3) 一つの動詞に格が二つ以上出てきた場合は「その他」として扱う。
- (4) 「キッチンから運んできた料理」のように、連体修飾的なものも考察対象として扱い、主節と従属節の区別はしない。
- (5) 「～はじめる」「～つづける」など局面動詞が付いたものは対象外とする。

また、「テイク」に「テイル」が後続する用例は極まれであり、格の結合頻度に影響を与える程度は少ないと判断し、対象外とする。

表 7-2 本動詞とテイク形の格結合頻度の比較表³⁹

形式格 動詞	本動詞				テイク形			
	ニ	へ	マ デ	カ ラ	ニ	へ	マ デ	カ ラ
上げる	22.7	4.6	4	13.6	7.1↓	0↓	0↓	7.1↓
集める	7.8	0.3	0	5.8	0↓	0↓	0	11.5↑
入れる	52.4	3.9	0.9	9.7	69.7↑	0.7↓	0↓	3↓
浮かべる	52	1	0	0.5	50↓	0↓	0	0↓
動かす	5.1	2.3	1.1	1.1	16.7↑	5.6↑	0↓	0↓
移す	60.7	9.6	0.3	2.2	53.9↓	0↓	0↓	0↓
奪う	0	0	0	21.7	0	0	0	25↑
置く	50.3	1.7	0	0	30.1↓	0.7↓	0	0
送る	23.7	4.7	3.7	4.1	17.5↓	7↑	36.7↑	0↓
落とす	13.1	2.1	0.1	3	18.3↑	0↓	0↓	0↓
下ろす	12.7	2.5	2.4	9.8	14.3↑	0↓	0↓	28.6↑
配る	34.2	1.9	0	1	34.8↑	1.4↓	0	12.4↑
転がす	3	1.5	0.7	2.2	20↑	2.5↑	10↑	2.5↑
下げる	23.2	0.7	1.4	9.5	8.7↓	0↓	0↓	4.3↓
進める	21.7	7.3	4.7	1.5	12.5↓	12.5↑	0↓	0↓
出す	50.7	3.3	0.1	23.6	0↓	0↓	0↓	28.6↑
積む	40.5	0.1	0.2	0.4	43.8↑	0↓	0↓	0↓
吊るす	44.7	1	0	11.4	60↑	0↓	0	0↓
通す	9.6	3.2	0	0.1	23.5↑	5.9↑	0	5.9↑
届ける	25.3	5.3	2.5	2.5	26.5↑	23.5↑	0↓	8.8↑
飛ばす	6.7	4	2.5	2.9	0↓	6.7↑	0↓	0↓
流す	12.2	3.1	0.4	3.9	23.5↑	5.9↑	11.8↑	0↓
並べる	26.1	0.3	0.1	0.8	39↑	0↓	0↓	2.4↑

³⁹ 表 2 における数値は、「一つの場所格のみが現れる当該動詞句の数／移動を表す当該動詞句の総数」をもとに算出された割合を百分率で表す。なお、「↑」と「↓」は格結合比率の本動詞に対する上昇及び下降を示しており、「-」はコーパスにおいて当該の用例が見つからないことを表している。また、特に格結合頻度が上昇する場合は網掛けで強調している。

抜く	0	0	0	8.7	0	0	0	0↓
運ぶ	44.1	9.2	8.2	10.1	28.9↓	20.7↑	10.7↑	3.3↓
外す	0	0	0	12.4	0	0	0	3↓
離す	0	0	0	24.8	3.6↑	0	0	30.1↑

表 7-2 を見ると、以下の二点が注目される。

- (8) 本動詞が取るニ格、へ格、マデ格、カラ格の割合に比べ、「テイク」が付いた場合は大きく変動しているが、これについて、先行研究では十分に説明されていないこと
- (9) 本動詞はテイクによって、よりニ格と結びつきやすいものと、よりへ格と結びつきやすいものとに分かれる。

(8) について、これまでの先行研究では、「テイク/テクル」が付いたものが本動詞と別の動詞であるとする言及がなされてきたが、一方、「テイク/テクル」が付いたものと本動詞とが具体的にどのような関係を持つかということや特に「テイク」形がどのようなものであるかについては、ほとんど説明がなされてこなかった。同様に、これまでの研究では「テイク」とへ格が遠心的に捉えられており、したがって、「テイク」の付加によってへ格との共起が助長されると予測できるが、実際には「テイク」とへ格との共起がむしろ減少している動詞も少なくない。すなわち、そのような例外は単に遠心性だけでは説明できないと言えるだろう。

また、(9) について、表 7-2 から、「奪う」「抜く」「外す」「離す」以外の本動詞は「テイク」によって、よりニ格と結びつきやすいものと、よりへ格と結びつきやすいものとに分かれることが窺える。例えば、コーパスを対象に本動詞としての「移す」「置く」と、それらに「テイク」が後続する形の格結合頻度を調査すると、以下の (10) ~ (13) のように、本動詞はへ格と共起しやすいが、「テイク」形は、へ格とほとんど共起しない様子が見られる。そこで、なぜこのような違いが生じるかについて、検討の余地がある。

- (10) 冷蔵庫の中に、なお消費しきれなかった食品があったので、保冷が必要なものは階下の冷蔵庫へ移しました。

(Yahoo!ブログ 2008)

- (11) いや、ほんとは、その花を生けた花瓶を、この部屋ではなく、奥の居間へ置き、吉岡を居間へ案内しようかとも思っていたのだ。

(田辺聖子著『ジョゼと虎と魚たち』1987)

- (12) タマゴがダメになるだけでなくクーラー内も汚れるので、やはり専用のケースに必要な数だけ移していくのがベターといえる。

(実著者不明『ダッチオープン料理入門』2002)

- (13) ところが今朝は、マーマレードと砂糖入れの間にパタパタと降りてきて、ハリーの皿に手紙を置いていった。

(J・K・ローリング著/松岡佑子訳『ハリー・ポッターと賢者の石』1999)

7.4 対象移動動詞のテイク形の格結合頻度についての考察

7.3 節の調査結果は、本動詞に「テイク」を付けることによって共起可能な格と共起格の結合頻度に変化がもたらされることを示唆するものである。以下、7.4.1 節～7.4.4 節ではさらに、「テイク」形と、ニ格及びへ格、ニ格及びマデ格、ニ格及びカラ格、マデ格及びカラ格との結合頻度を散布図で示し、本動詞の格結合頻度と比較することによって、「テイク」形が取るニ格、へ格、マデ格、カラ格がそれぞれどのように変化していくのかを明らかにする。さらに、そのような変化が生じる要因について言及する。

7.4.1 テイク形とニ格及びへ格の結合頻度について

まず、対象移動動詞の「テイク」形がニ格とへ格を取る割合を散布図で示す。図 7-1 では、「テイク」形とニ格との結合頻度を縦軸とし、「テイク」形へ格との結合頻度を横軸として示している。

図 7-1 から、「テイク」が付加される際、すべての動詞を大きく 3 つのグループに分けることができると言える。まず、縦軸のみに沿って出現するグループがあり、このグループの動詞は専らニ格と共起している。次に、縦軸から離れて横軸の方に散在しているグループがあり、これらの動詞はニ格よりへ格と

共起しやすい傾向を示している。また、原点に集まっているグループがあり、これらは「テイク」によって二格とへ格のいずれとも共起しない。

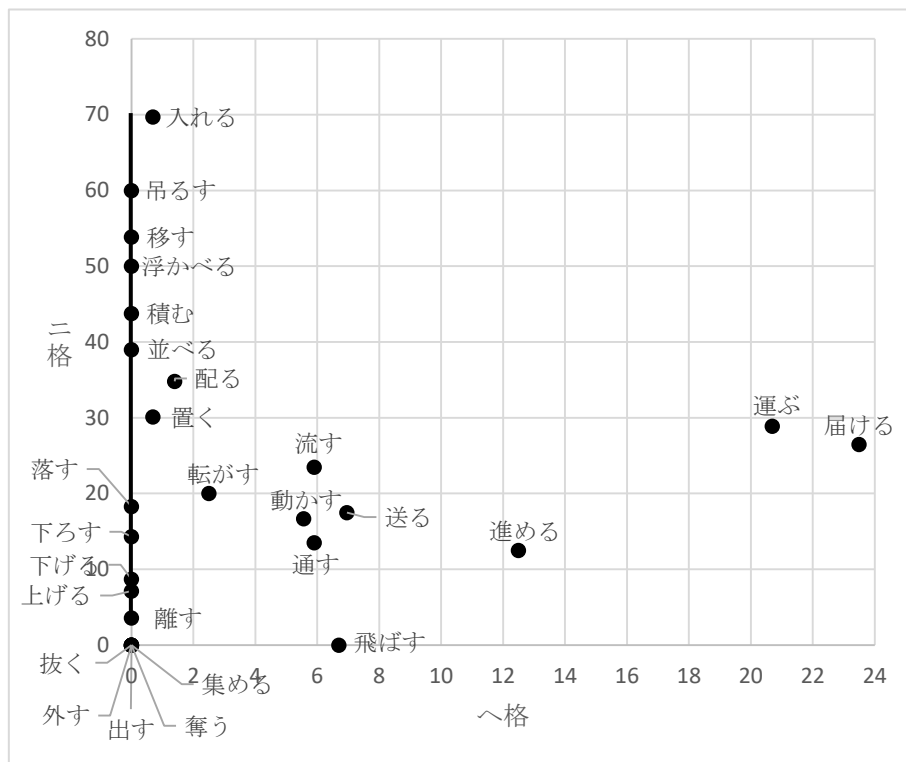


図 7-1 テイク形とニ格及びへ格の結合頻度

図 7-1 における「テイク」形とニ格及びへ格との結合頻度が本動詞の格結合頻度と比べてどのように変化するのかを考察するため、ここでは本動詞とニ格及びへ格との結合分布を改めて取り上げる。

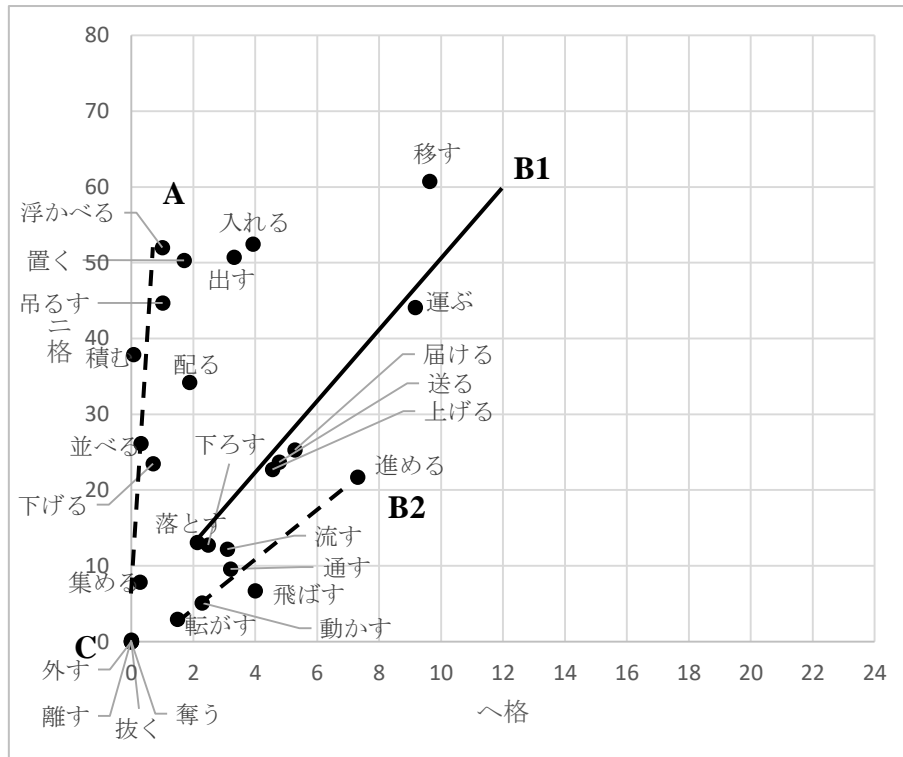


図 3-6 対象移動動詞と二格及びへ格の結合頻度 (再掲) ⁴⁰

第3章では、図 3-6 に示すように、二格及びへ格との結合頻度に基づいて本動詞が4つのグループに分けられることを指摘した。図 7-1 と図 3-6 を合わせて見ると、本動詞に「テイク」を付けることによって、図 3-6 における動詞は図 7-1 において大きく変動していることが読み取れる。まず、A グループの動詞は「テイク」が付いた場合、二格とより強く結びついており、完全に縦軸に引っ張られている (すなわち、へ格と結びつかない) 傾向が示された。これに対し、B2 グループの動詞は「テイク」が付くと、へ格とより一層強く結びつくようになり、横軸の方に引き寄せられていることが分かる。また、C グループは「離す」が二格を伴うようになるが、他の動詞は「テイク」が付いても二格ともへ格とも共起しない。これら (A、B2、C) はグループ全体でのまとまった傾向の存在が示唆されるが、一方、B1 グループの動詞では、「テイク」が付いた場合にへ格とより強く結びつくものや、二格の方に引き寄せられるものが混在しており、まとまった傾向はないと言える。

以上見てきたように、本動詞と「テイク」形では、グループごとに格の結合

⁴⁰ 図 3-6 は第3章 p43 が初出となる。

のあり方に違いが生じることが分かる。ここでは、そのような現象を考察するにあたって、第3章と第5章から導き出された素性をまとめている表5-2を改めて取り上げる。特に以下、動詞がグループごとに持っている素性を明確にした上、表5-2で取り上げている意味素性が「テイク」の格結合頻度にどのような関わっているかを論じる。

表5-2 動詞別と限界性、継続性、結果性、着点性、起点性との関係

動詞の種類	意味素性	用例
A グループ	+限界性、-継続性、+結果性、 +着点性、-起点性	入れる、置くなど
B1 グループ	+限界性、+継続性、+結果性、 +着点性、+起点性	B1a 移す、落とすなど
	+限界性、+継続性、-結果性、 +着点性、+起点性	B1b 送る、運ぶ
B2 グループ	-限界性、+継続性、-結果性、 +着点性、+起点性	進める、動かすなど
C グループ	+限界性、-継続性、+結果性、 -着点性、+起点性	C1 離す、奪うなど
	〈-限界性、+継続性、-結果性、 -着点性、+起点性〉	C2 経路ヲ格を取る動詞

まず、図7-1から分かるように、表5-2におけるAグループとB1aグループの「移す」「落とす」「下ろす」「上げる」は「テイク」が付いた場合、縦軸のニ格へ引き寄せられ、へ格と共起しなくなる様子が見られた。一方、表5-2におけるB2グループとB1bグループの「送る」「運ぶ」「届ける」⁴¹は「テイク」が付くと、よりへ格と共起するようになる様子が見られた。また、Cグループでは、「離す」がニ格を伴うようになることを除き、他の動詞は「テイク」が付いてもニ格とへ格のいずれとも共起していない。

次に、表5-2を見ると、共に縦軸に引き寄せられた動詞は〈+限界性、+結果性、+着点性〉を持つところにおいて共通していることが分かる。これらの

⁴¹ B1aグループに属する「届ける」は縦軸に引き寄せられるはずであるが、ここでは例外となる。

動詞が持っている素性は、〈-継続性〉やスタティックに捉えられる二格と親和性が高いと思われるため、AグループとB1aグループの動詞に「テイク」を付けると、二格とより優先して共起するようになり、〈+継続性〉に捉えられるへ格との共起が制限されたものと推測される。また、一方で横軸の方に引張られた動詞は〈+継続性、-結果性、+着点性〉において共通しており、〈+継続性〉やダイナミックに捉えられるへ格と親和性が高い。そのため、「テイク」が付くことでへ格との共起がより助長されたものと思われる。

以上をまとめると、対象移動動詞に「テイク」が付いた場合、AグループとB1aグループは二格との共起が助長され、その背後に〈+限界性、+結果性、+着点性〉といった素性があると言える。一方、B2グループとB1bグループがよりへ格と共起するようになる背後には〈+継続性、-結果性、+着点性〉といった素性が関わっていると考えられる。

7.4.2 テイク形と二格及びマデ格の結合頻度について

次に、対象移動動詞の「テイク」形が二格とマデ格を取る割合を散布図で示す。図7-2は、「テイク」形と二格との結合頻度を縦軸とし、「テイク」形とマデ格との結合頻度を横軸として示している。

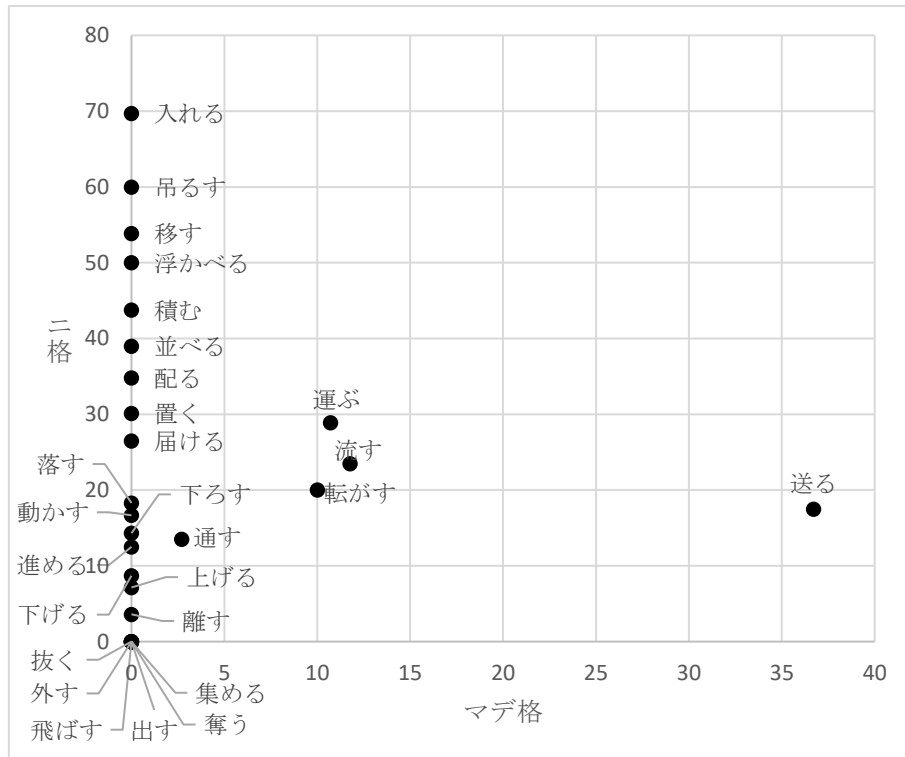


図 7-2 テイク形とニ格及びマデ格の結合頻度

図 7-2 を見ると、動詞の「テイク」形とニ格及びマデ格との共起に関しては三つの傾向が示されている。一つ目は、「集める」「奪う」「出す」「飛ばす」「抜く」「外す」が原点の位置にあり、いずれもニ格とマデ格を取らないことである。二つ目は、縦軸に沿って並んでいる動詞グループがあり、それらの動詞はマデ格を取らず、専らニ格を取る傾向を示していることである。三つ目は、一つ目及び二つ目以外の動詞も複数あり、右下に行けば行くほどニ格とは結びつかず、マデ格と結びつきやすくなる傾向を示していることである。

本動詞の格結合に比べて「テイク」形とニ格及びマデ格との結合頻度がどのように変化しているのかを明らかにするため、以下では対象移動動詞とニ格及びマデ格との結合分布を改めて取り上げる（図 3-7）。

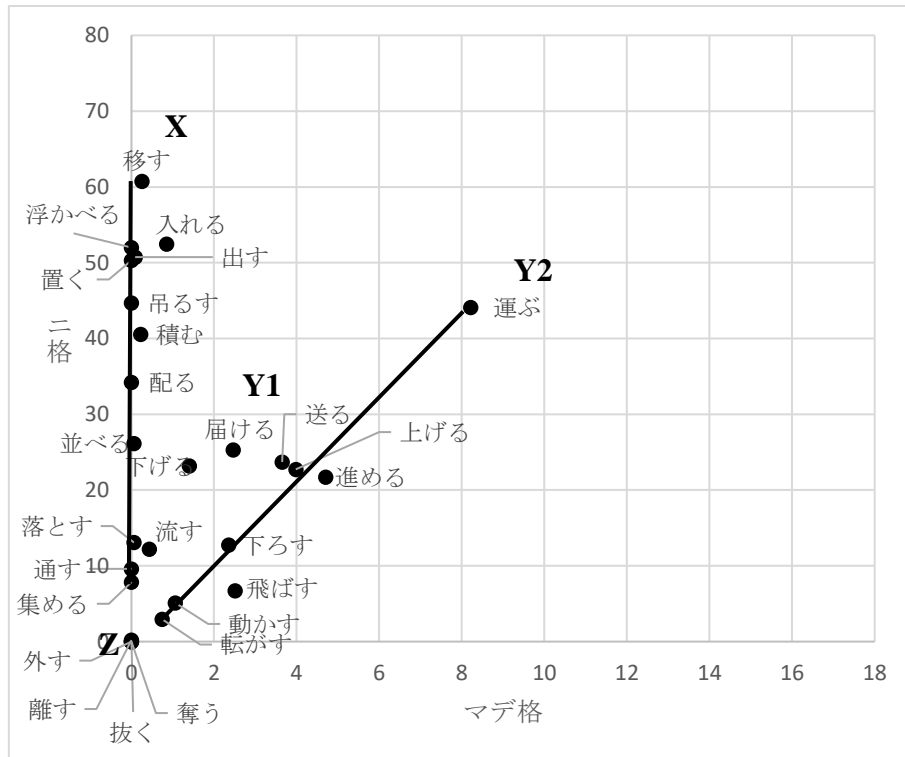


図 3-7 対象移動動詞とニ格及びマデ格の結合頻度 (再掲)⁴²

第3章では、図 3-7 に示すように、ニ格とマデ格の現れ方に基づいて対象移動動詞を大きく 4 つのグループに分けられることと、その際の分類とニ格及びマデ格の現れ方に基づいた動詞分類が概ね重なるものであることを述べた。

また、図 7-2 と図 3-7 を比べると、X グループと Y1 グループの「届ける」「下げる」「上げる」は「テイク」が付いた場合、ニ格とより強く結びついており、完全に縦軸に引っ張られている (=横軸の値が 0 に等しくなる) 傾向を示している。これに対して、Z グループは「テイク」が付いた場合もニ格とマデ格のいずれとも共起しないことが窺える。同様に、X グループの「通す」「流す」と Y2 グループの「運ぶ」「送る」「転がす」は「テイク」が付いた場合、マデ格とより一層強く結びつくようになり、横軸の方に引き寄せられていることが分かる。

さて、「テイク」によってマデ格との共起が助長された動詞に注目すると、これらの動詞は〈+継続性、-結果性、+着点性〉といった素性を持つ点において共通していることが分かる。第3章で述べたように、マデ格は移動の到達

⁴² 図 3-7 は第3章 p45 が初出となる。

範囲を表し、必ずしも移動の着点を表すわけではないとされるが、この点で共起が助長されたものと推測される。一方、縦軸に引き寄せられた動詞はいずれも〈+限界性、+結果性、+着点性〉を持っており、これらの動詞は、〈-継続性〉やスタティックに捉えられる二格と親和性が高いと思われる点から共起がさらに強まる傾向について説明することができる。

7.4.1 節と 7.4.2 節の考察は、以下のようにまとめられる。

(14) 〈+限界性、+結果性、+着点性〉⇒二格助長

(15) 〈+継続性、-結果性、+着点性〉⇒へ格またはマデ格助長

7.4.3 テイク形と二格及びカラ格の結合頻度について

続いて、対象移動動詞の「テイク」形と二格及びカラ格との結合頻度を以下の図 7-3 に示す。図 7-3 では、「テイク」形と二格との結合頻度を縦軸とし、「テイク」形とカラ格との結合頻度を横軸として示している。

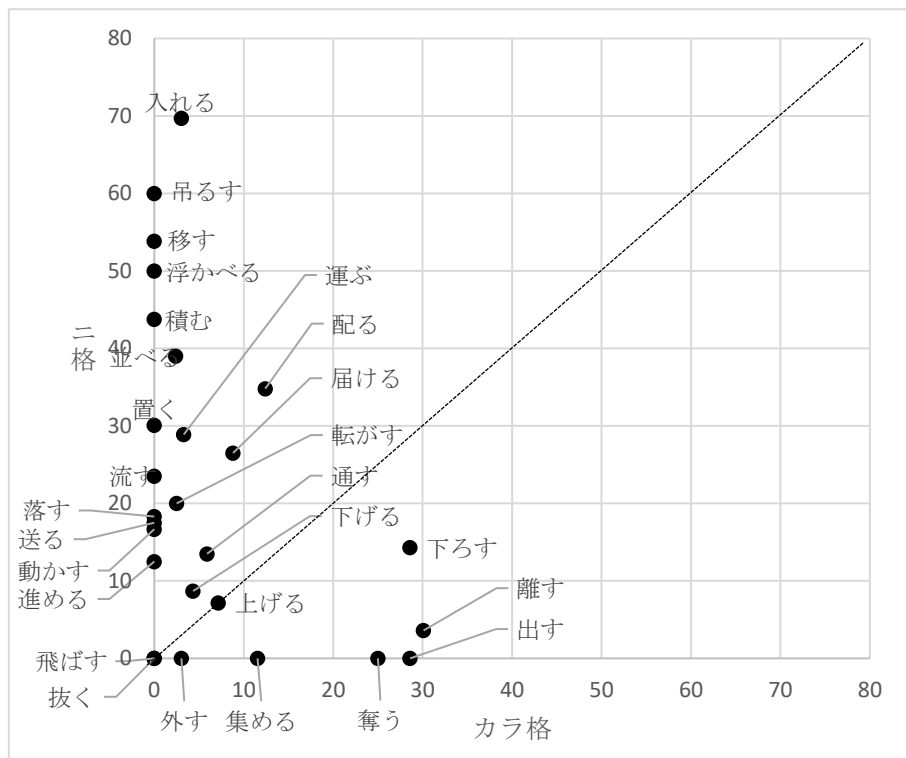


図 7-3 テイク形と二格及びカラ格の結合頻度

図 7-3 において、原点を起点として引いてある点線は、対象移動動詞の「テイク」形が 1 : 1 の比率で二格及びカラ格と共起することを示している。この点線より上方向に行けば行くほど二格を取る割合が高くなり、右方向に行けば行くほどカラ格を取る割合が高くなる。また、原点にある動詞は「テイク」によって二格とカラ格のいずれとも共起しない。

また、図 7-3 との比較対象として、本動詞が取る二格とカラ格の結合頻度を示す図 4-1 を再度掲示する。図中では本動詞と二格との結合頻度を縦軸とし、本動詞とカラ格との結合頻度を横軸として示している。

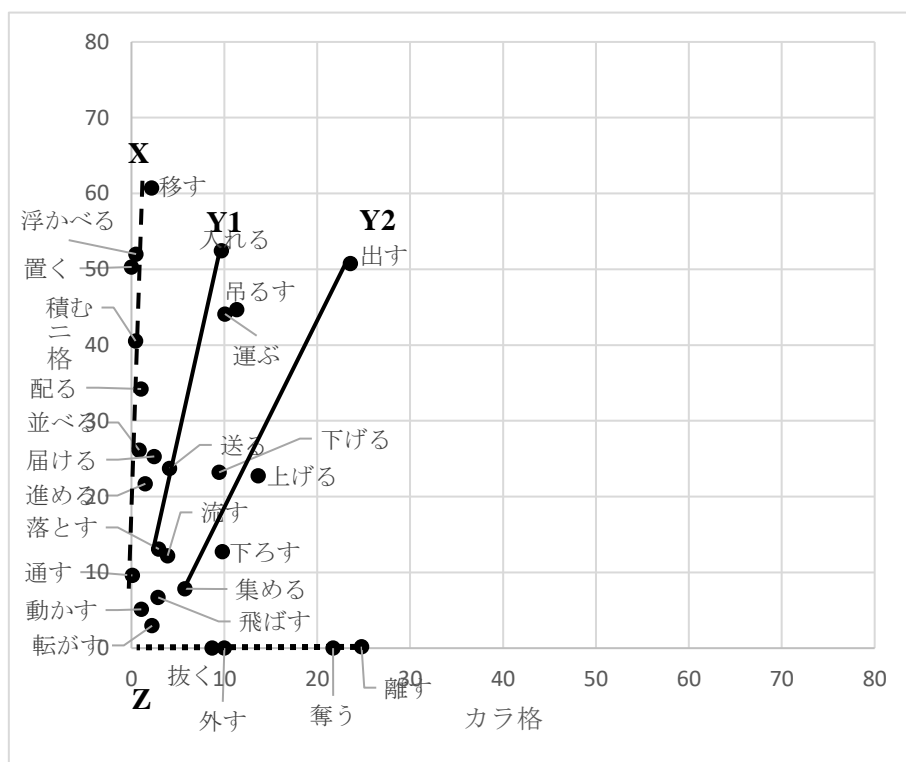


図 4-1 対象移動動詞と二格及びカラ格の結合頻度 (再掲)⁴³

第 4 章では、図 4-1 における動詞が大きく 4 つのグループに分けられることと、また、そのうち Y グループはさらに、二格とカラ格が 5 : 1 (Y1) で共起するものと、2 : 1 (Y2) の割合で共起するものとに分けられることを指摘した。本論文では、対象移動動詞が二格とカラ格を取る割合の段階性、ずなわち X、

⁴³ 図 4-1 は第 4 章 p52 が初出となる。

Y1、Y2 の 3 つの傾向は「V テイク／テクル」の格結合頻度の変化に関わるものとする。

図 7-3 と図 4-1 を合わせて見ると、図 7-3 において横軸の方に引っ張られた動詞は、図 4-1 における Y1 グループと Z グループの動詞に当たることが分かる。これに対して、図 7-3 において縦軸の方に引き寄せられた動詞は、図 4-1 の X グループと Y1 グループの動詞に相当することが読み取れる。すなわち、本動詞がカラ格と結びつきやすい動詞は「テイク」によってカラ格との共起が一層強化される一方、本動詞がニ格と共起しやすい動詞は「テイク」によってニ格との共起が助長されるということである。

第 4 章の分析では、図 4-1 における Y1、Y2 グループが同じく着点起点共用動詞に属するものの、そのうち Y2 の直線上に並んでいる動詞は、Y1 よりもカラ格と結びつきやすい傾向があることを示した。このことを踏まえると、「テイク」形にはもともとニ格に重きを置いている動詞（着点志向型動詞）に対してさらにニ格と結びつくようにさせる機能と、もともとカラ格に重きを置いている動詞（起点志向型動詞）に対してさらにカラ格と結びつくようにさせる機能の、双方の機能がある可能性がある。すなわち、(16) (17) に示すように、ニ格の助長には〈+着点性〉が関与しているが、カラ格の助長には〈+起点性〉が大きく関与していることが示唆される。

(16) 〈+着点性〉⇒ ニ格の助長に大きく関与している

(17) 〈+起点性〉⇒ カラ格の助長に大きく関与している

7.4.4 テイク形とマデ格及びカラ格の結合頻度について

続いて、「テイク」形とマデ格及びカラ格との結合頻度を図 7-4 に示す。図中では「テイク」形とマデ格との結合頻度を縦軸とし、「テイク」形とカラ格との結合頻度を横軸として示している。

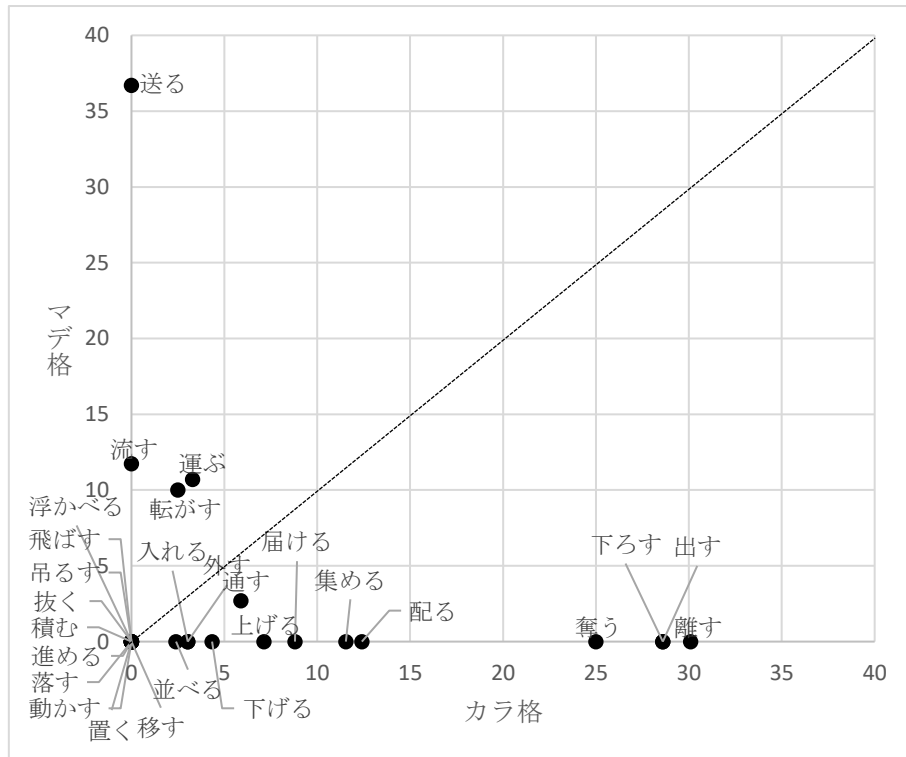


図 7-4 テイク形とマデ格及びカラ格の結合頻度

図 7-4 において、原点を起点として引いてある点線は対象移動動詞の「テイク」形が 1 : 1 の比率でマデ格及びカラ格と共起することを示している。この点線より上方向に行けば行くほどマデ格を取る割合が高くなり、右方向に行けば行くほどカラ格を取る割合が高くなる。また、原点に集まって出現する動詞群もあり、これらの動詞は「テイク」が付いた際、マデ格とカラ格のいずれとも共起しないことを意味する。

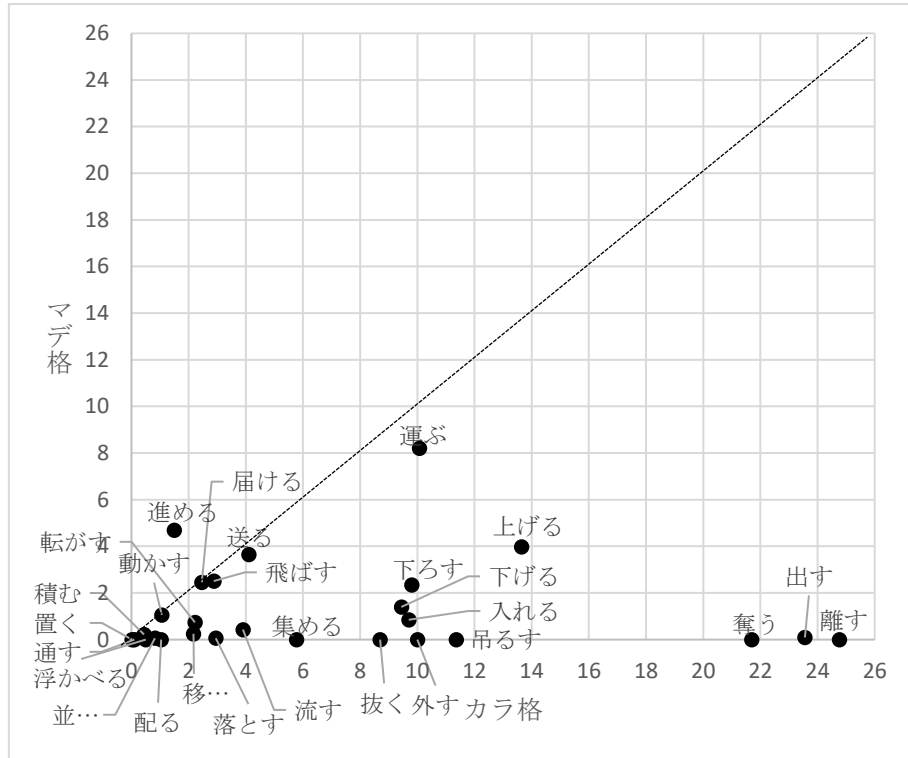


図 4-2 対象移動動詞とマデ格及びカラ格の結合頻度（再掲）⁴⁴

第 4 章では、図 4-2 における動詞が大きく、横軸に沿って並んでいる動詞グループと横軸から離れている動詞グループに分けられることを指摘した。

また、図 7-4 と図 4-2 を比べると、図 7-4 に含まれる動詞は、図 4-2 に含まれる動詞よりもはっきりと 3 つのグループに分けられると言える。まず、横軸の方に引っ張られた動詞はもともと図 4-2 においてもカラ格と共起しやすい傾向があるが、「テイク」によってそのうち概ね 7 割の動詞において、よりカラ格との共起が強化される一方、マデ格とは共起しなくなっていることがわかる。次に、縦軸の方に引き寄せられた動詞に注目すると、これらの動詞は「テイク」によってカラ格との共起が制限されたが、反対にマデ格との共起が助長されていることが読み取れる。以上をまとめると、カラ格の助長には〈+起点性〉が関与しているが、マデ格の助長には〈+継続性〉が大きく関与していることが示唆される。

(18) 〈+起点性〉⇒ カラ格の助長に大きく関与している

(19) 〈+継続性〉⇒ マデ格の助長に大きく関与している (B1、B2 グル

⁴⁴ 図 4-2 は第 4 章 p56 が初出となる。

ープの一部)

7.4.5 テイク形とへ格及びカラ格の結合頻度について

最後に、「テイク」形とへ格及びカラ格との結合頻度を図 7-5 に示す。図中では「テイク」形とへ格との結合頻度を縦軸とし、「テイク」形とカラ格との結合頻度を横軸として示している。

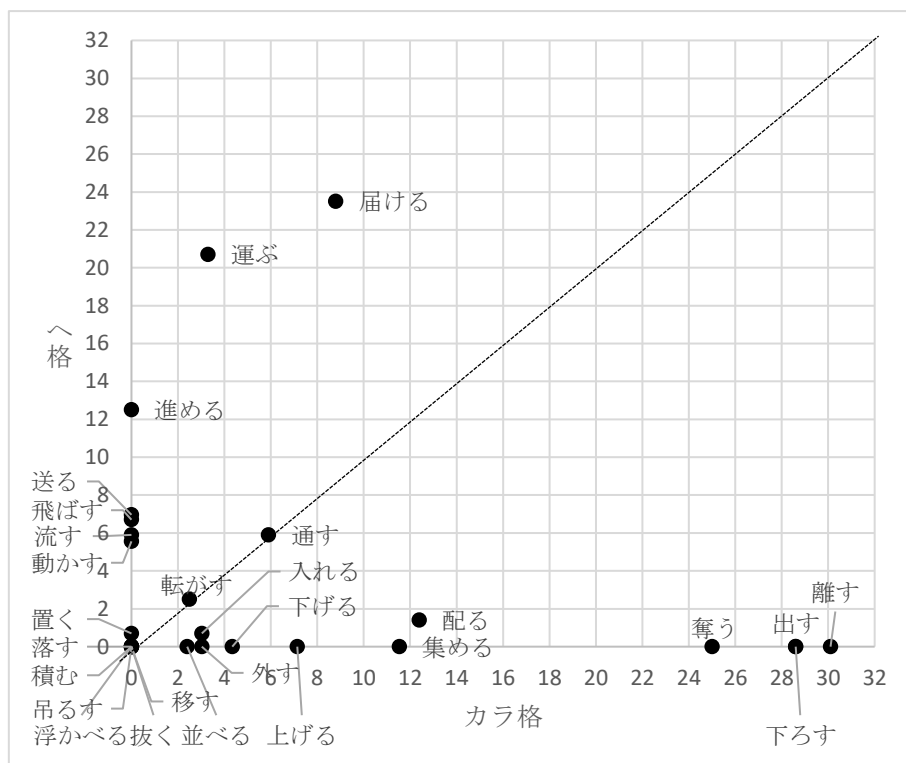


図 7-5 テイク形とへ格及びカラ格の結合頻度

図 7-5 において、原点を起点として描いてある点線は「テイク」形が 1:1 の割合でへ格及びカラ格を取ることを示している。この点線との位置関係によって、すべての動詞を大きく 4 つのグループに分けることが出来る。まず、点線に沿って並んでいる「転がす」「通す」は、1:1 の割合でへ格及びカラ格と共起している。続いて、点線の左上方向に散らばっている動詞は、縦軸の値が高くなれば高くなるほどへ格との結合頻度が高くなる傾向を示している。一方、点線の右下方向にほぼ横軸に沿って出現する動詞群があり、これらはへ格と共起

しにくく、専らカラ格と共起していると言える。最後に、原点に集まっている動詞群が見られ、このグループの動詞は「テイク」によってへ格とカラ格のいずれとも共起しなくなる。

対象移動動詞がへ格及びカラ格を取る割合が「テイク」の付加によって、どのような影響を受けているかを明らかにするため、以下では、本動詞とへ格及びカラ格との結合頻度を改めて取り上げる。

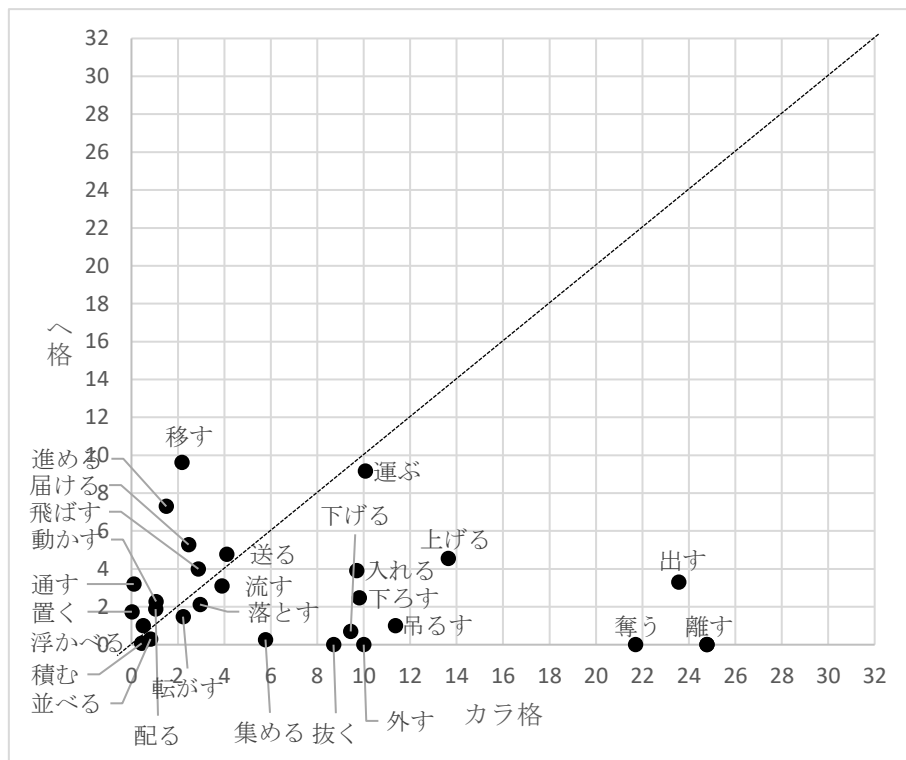


図 4-3 対象移動動詞とへ格及びカラ格の結合頻度 (再掲) ⁴⁵

第 4 章で示した図 4-3 を見ると、図 7-5 と同様にすべての動詞を点線との位置関係によって 4 つのグループに分けることができる。また、図 4-3 と図 7-5 を比べると、図 4-3 に含まれる動詞は大きく 3 つの形で変動している様子が見られる。まず、図 7-5 において特に縦軸の方へ引っ張られており、へ格との共起の助長される動詞グループがある。また、図 7-5 において横軸に引き寄せられ、へ格との共起が完全に制限される一方、カラ格との共起が助長される動詞グループがある。さらに、図 7-5 において原点に集まっており、へ格とカラ格

⁴⁵ 図 4-3 は第 4 章 p58 が初出となる。

のいずれとも共起できなくなっている動詞グループがある。

上記のうちへ格との共起が助長される動詞には、経路志向型とされる B2 グループの「進める、動かす、飛ばす、通す、流す、転がす」と、B1b グループに属する「運ぶ、送る、届ける」が入っている。第5章の分析では、これらの動詞が〈+継続性、-結果性〉という共通の素性を持っていることを示した。この点でへ格との相性が良いため、結合頻度が高くなるものと推測される。一方、着点志向型とされる A グルと B1a グループの動詞は、へ格との共起が減少するか、または完全に制限される傾向がある。これは〈+限界性、+結果性、+着点性〉の素性を持つためであろう。さらに、カラ格との共起が助長される動詞に注目すると、これらは起点志向型、あるいはカラ格と共起しやすいとされる動詞が多いようである。つまり、〈+起点性〉によってカラ格との共起が助長されていると言える。

(20) 〈+起点性〉 ⇒ カラ格の助長に関与している

(21) 〈+継続性、-結果性〉 ⇒ へ格の助長に関与している (B1b、B2
グループ)

7.5 本章のまとめ

本章では、対象の空間的移動を表す「V テイク」形に注目し、コーパスに現れる「V テイク」と共起する二格、へ格、マデ格、カラ格との結合頻度を調査した。本動詞と二格、へ格、マデ格、カラ格との結合頻度との比較を通して、本動詞に「テイク」が付いた場合の格結合頻度には三つの傾向があることを示した。一つ目は、「テイク」によって動詞が専ら二格とのみ共起するようになる傾向である。二つ目は、「テイク」によって動詞がへ格、あるいはマデ格とより結びつきやすくなる傾向である。三つ目は、「テイク」によって動詞が二格、へ格、マデ格のいずれも取らなくなる傾向である。

本章の議論を通して、本動詞に「テイク」が後続した場合に生じた格の結合頻度の変化には、「結果性」「限界性」「継続性」「着点性」「起点性」といった5つの素性に関わっていることが分かった。具体的に言えば、対象移動動詞に「テイク」が付いた場合、動詞が〈+限界性、+結果性、+着点性〉において共通

すれば、ニ格との共起が助長され、へ格及びマデ格との共起が制限される。また、動詞が〈+継続性、-結果性、+着点性〉において共通すれば、へ格との共起もマデ格との共起も助長される。さらに、起点のカラ格と、ニ格、へ格、マデ格のそれぞれの組み合わせを考慮すると、「テイク」が後続した場合、カラ格の助長には〈+起点性〉が大きく関与していること、ニ格の助長には〈+着点性〉が関与していること、へ格とマデ格の助長には〈+継続性、-結果性〉が関与していることが窺える。

第8章 テクル形の格結合頻度について

8.0 本章の概要

第7章では、対象移動動詞に「テイク」が付いた場合、格の結合頻度が本動詞と大きく変わることを、また、その背後に「限界性」「結果性」「継続性」「着点性」「起点性」という5つの素性があることを指摘した。第8章では、第7章と同様の手法を用いて、対象移動動詞に「テクル」が後続する場合の格結合頻度について検討を行う。

この章の構成の次の通りである。まず、8.1節では、空間的移動を表す「Vテクル」形をこの章の考察対象として取り上げることが述べられる。次に、8.2節では、「Vテクル」に関する諸研究のうち、格結合頻度に関する先行研究に注目し、それらの先行研究の問題点を指摘した上、この章で取り組む課題を整理する。さらに、8.3節では、第7章で「Vテイク」形の格結合頻度を調査する際に用いた手法と同様の手法を用いて、「Vテクル」形の格結合頻度を調査する。続いて、8.4節では、コーパスに現れる「Vテクル」形とニ格、へ格、マデ格、カラ格との格結合頻度の実態を散布図で示し、本動詞の格結合頻度との比較を通して、「テクル」が後続した場合に生じる格の結合頻度の変化に「起点性」という素性が関わっていることを示す。最後に、8.5節では、この章の内容をまとめる。

8.1 はじめに

本章では、(1)～(4)に示すような空間的移動を表す「Vテクル」を扱う。

- (1) 「鞍のことを、おぼえておけ」と言い、棚から筒形に載った寸短かの丸太をおろしてきてすわりなおしたのには、小次郎もおどろいた。

(司馬遼太郎著『箱根の坂』1984)

- (2) ここに荒川や、利根川が流れこみ上流から砂や石を流してきて三角州をつくった。このようにできた土地を、地質学では沖積層という。
(実著者不明『親子であるく東京』2004)
- (3) 犯人は清風荘の一室でさくら女史を殺し、トランクに詰めて大阪へ送ってきた。
(横溝正史著『蝶々殺人事件』1998)
- (4) この絵はがきは夏休みの日光へ東京から届けてきたものだ。
(榎原喜佐子著『徳川慶喜家の子ども部屋』1996)

(1) ～ (4) はいずれも対象の移動を表している。第7章で既に述べたように、従来の移動動詞に関する研究は移動を表す自動詞を中心に行われてきたが、対象移動動詞あるいは(1)～(4)のような対象移動動詞の「テクル」形に関する研究は十分になされていないと言える。

本章では、第3章と第4章で提示した動詞分類の枠組みをもとに、第7章と同様の手法を用いて対象の空間的移動を表す「テクル」形の格結合頻度について検討する。本動詞とカラ格、ニ格、へ格、マデ格との結合頻度と、本動詞に「テクル」が付いた場合の格結合頻度には、第7章で取り上げた「テイク」形同様、大きな違いが見られる。本章ではこのように、「V テクル」形の格結合頻度の実態及び、本動詞の格結合頻度と比較した結果を示し、その要因について考察する。

8.2 先行研究

8.2.1 宮島達夫 (1986)

宮島 (1986) は、移動動詞と場所名詞句との結合頻度に基づいて動詞分類を行った。ただし、動詞分類を行う際、「V テイク/テクル」形は「移動に直接関係する格支配のうえで、ちがった性質をもっている」(宮島 1986:46) ため、別の単語と見なされている。以下の表 8-1 では、同論の調査における、移動動詞の「テクル」形と共起する場所名詞句との結合頻度を示した。

表 8-1 宮島 (1986) によるテイク/テクル形の格結合頻度

	到着	出発		到着	出発
あるいていく	8	—	—くる	5	2
かえっていく	4	—	—くる	15	13
つれていく	10	—	—くる	4	—
でていく	10	11	—くる	8	11
とんでいく	3	1	—くる	2	—
のぼっていく	2	—	—くる	2	—
はいていく	16	—	—くる	10	—
もっていく	7	—	—くる	4	—
計	60	12	計	50	26

表 8-1 から、「テイク」形は到着を表す場所名詞句との結合頻度が「テクル」形の結合頻度よりやや高いが、一方、「テクル」形は出発を表す場所名詞句との結合頻度が「テイク」形の結合頻度より高いことが見て取れる。このことについて、宮島 (1986) は、「テクル」の方にやや出発点のカラ格が多いのは「クル」の中心地志向性によるためであることを指摘している。

8.2.2 日高俊夫 (2018)

日高 (2018) は「V テイク/テクル」両形式の多義的な意味と統語構造の関係を議論している。同論は「V テイク/テクル」の分析に先立って、本動詞「イク」「クル」の意味を検討しており、その違いを次のようにまとめている。

(5) a. イク：着点を表示しない場合は経路表示が可能だが、その場合でも活動継続の解釈は困難。

b. クル：着点、経路の表示が非義務的であり、活動継続の解釈が可能。

(日高 2018: 27)

日高 (2018: 26) は、着点の表示について、「イク」の着点は具体的に表示しない限り不明であるが、「クル」の着点は話者 (もしくは話者の視点保持者) のいる位置であると予め決まっている」と指摘している。

宮島（1986）のいう中心地指向性によるカラ格の増加と日高（2018）のいう着点表示が義務的ではないことは、本質的には同一の事象を指すと言える。ただし、両者の検討において、カラ格との結合頻度の増加が着点格との結合頻度の減少と同時に起こるものであるのか、それとも動詞によってバラつきが見られるのかははっきりしていない。これを踏まえ以下では、まず対象移動動詞の「テクル」形とニ格、へ格、マデ格、カラ格との結合頻度を調査し、その実態を示す。

8.3 調査結果

本章では、移動を表す「テクル」が付いた対象移動動詞について第7章と同様の手法で調査を行った⁴⁶。表 8-2 は、第3章で示した本動詞と格の結合頻度と、新たに調査した「テクル」のついた形の格の結合頻度とを対照させたものである。

表 8-2 本動詞とテクル形の格結合頻度の比較表⁴⁷

形式 格 動詞	本動詞				テクル形			
	ニ	へ	マ デ	カ ラ	ニ	へ	マ デ	カ ラ
上げる	22.7	4.6	4	13.6	11.1↓	0↓	16.7↑	33.3↑
集める	7.8	0.3	0	5.8	4.6↓	0↓	0	21.6↑
入れる	52.4	3.9	0.9	9.7	0↓	0↓	0↓	78.8↑
浮かべる	52	1	0	0.5	0↓	0↓	0	0↓
動かす	5.1	2.3	1.1	1.1	0↓	0↓	0↓	0↓
移す	60.7	9.6	0.3	2.2	44.7↓	0↓	0↓	7.7↑
奪う	0	0	0	21.7	0	0	0	35.3↑
置く	50.3	1.7	0	0	50↓	1.8↑	0	0

⁴⁶ 「テクル」の格結合頻度の調査においては、『筑波ウェブコーパス』を用い、本論文の第3章で提示した基準に従い、用例採取を行った。その際、「テクル」に「テイル」が後続する用例は極まれであり、格の結合頻度に影響を与える程度は少ないと判断したため、対象外とした。

⁴⁷ 表 8-2 における数値は、「一つの場所格のみが現れる当該動詞句の数／移動を表す当該動詞句の総数」をもとに算出された割合を百分率で表す。なお、「↑」と「↓」は格結合比率の本動詞に対する上昇及び下降を示しており、「-」はコーパスにおいて当該の用例が見つからないことを表している。また、特に格結合頻度が上昇する場合は網掛けで強調している。

送る	23.7	4.7	3.7	4.1	6.8↓	1.4↓	4.6↑	9.2↑
落とす	13.1	2.1	0.1	3	7.8↓	0↓	0↓	10.9↑
下ろす	12.7	2.5	2.4	9.8	20↑	0↓	0↓	30↑
配る	34.2	1.9	0	1	26.9↓	0↓	0	0↓
転がす	3	1.5	0.7	2.2	10↑	0↓	10↑	20↑
下げる	23.2	0.7	1.4	9.5	13.6↓	0↓	0↓	0↓
進める	21.7	7.3	4.7	1.5	12.5↓	0↓	0↓	0↓
出す	50.7	3.3	0.1	23.6	3↓	0↓	0↓	38↑
積む	40.5	0.1	0.2	0.4	39.3↓	0↓	0↓	0↓
吊るす	44.7	1	0	11.4	—	—	—	—
通す	9.6	3.2	0	0.1	0↓	0↓	0	0↓
届ける	25.3	5.3	2.5	2.5	34.9↑	14↑	0.9↓	0.9↓
飛ばす	6.7	4	2.5	2.9	0↓	0↓	5↑	35↑
流す	12.2	3.1	0.4	3.9	0↓	0↓	0↓	15.4↑
並べる	26.1	0.3	0.1	0.8	0↓	0↓	0↓	11.1↑
抜く	0	0	0	8.7	0	0	0	35↑
運ぶ	44.1	9.2	8.2	10.1	9.9↓	3.5↓	5.1↓	13↑
外す	0	0	0	12.4	0	0	0	24↑
離す	0	0	0	24.8	—	—	—	—

表 8-2 を見ると、以下の二点が注目される。

- (6) 「テイク」によってニ格、へ格、マデ格との結合頻度が上昇する動詞の割合に比べ、「テクル」が付いた場合、ニ格、へ格との結合頻度が上昇する動詞の割合が大幅に下がるが、マデ格の場合はほぼ変わらない。
- (7) 「テイク」によってカラ格との結合頻度が上昇する動詞の割合に比べ、「テクル」が付いた場合、カラ格との結合頻度が上昇する動詞が増加している。

まず、(6)について、「テイク」形が付加された際、本動詞に比べてニ格、へ格、マデ格との結合頻度が上昇する動詞の割合はそれぞれ 48%、33.3%、11.1% であるが、「テクル」が付いた際、本動詞に比べてニ格、へ格、マデ格との結

合頻度が上昇する動詞の割合は 11.1%、7.4%、14.8%となる。求心的な性質を持つと捉えられる「テクル」は遠心的なへ格、マデ格の出現を制限すると考えれば、表 8-2 のデータは概ねそのような説明に従っている。しかしながら、「テクル」によってへ格及びマデ格との共起が寧ろ増えてしまうものの中にはあり、そのような例外の存在は単に遠心性や求心性といった観点では説明できない。

また、(7) について、「テイク」形が付加された際、本動詞に比べてカラ格との結合頻度が上昇する動詞の割合は 37%であるが、「テクル」が付いた場合、本動詞に比べてカラ格との結合頻度が上昇する動詞の割合は 59%に上がる。先述の通り宮島（1986）では、「テクル」の方がやや出発点のカラ格との結びつきが強いのは「クル」の中心地志向性によるという指摘がなされているが、表 8-2 を見ると、動詞によってカラ格との結合頻度が上がるものと下がるものがある。なぜこのような違いが生じたかについて、先行研究からは十分な説明を導くことができず、一考の余地がある。

8.4 対象移動動詞のテクル形の格結合頻度についての考察

8.3 節の調査結果は、本動詞に「テクル」を付けることによって共起可能な格と共起格の結合頻度に変化がもたらされることを示唆するものである。以下、8.4.1 節～8.4.4 節ではさらに、「テクル」形と二格及びへ格、二格及びマデ格、二格及びカラ格、マデ格及びカラ格、へ格及びカラ格の結合頻度を散布図で示し、本動詞の格結合頻度と比較することによって、「テクル」形が取る二格、へ格、マデ格、カラ格がそれぞれどのように変化していくのかを明らかにする。さらに、そのような変化が生じる要因について言及する。

8.4.1 テクル形と二格及びへ格の結合頻度について

まず、対象移動動詞の「テクル」形が二格とへ格を取る割合を散布図で示す。図 8-1 は、「テクル」形と二格との結合頻度を縦軸とし、「テクル」形とへ格との結合頻度を横軸として示している。

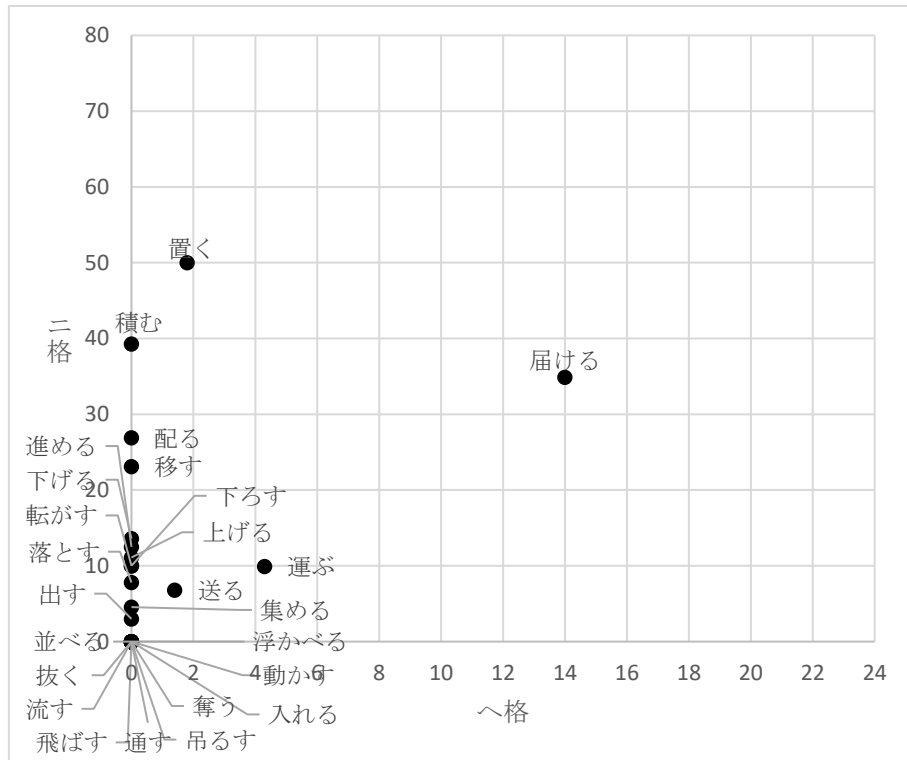


図 8-1 テクル形とニ格及びへ格の結合頻度

図 8-1 から、「テクル」が付加される際、すべての動詞を大きく 3 つのグループに分けることができると言える。まず、縦軸のみに沿って出現するグループがあり、このグループはへ格を取らず、専らニ格と共起している。また、縦軸から離れて横軸の方にいくつかの動詞が散見され、このグループの動詞はよりへ格と結びつきやすい傾向を示している。最後に、原点に集まる動詞があり、これらの動詞は「テクル」によってニ格とへ格のいずれとも共起しない。

「テクル」の付加によってニ格及びへ格との結合頻度がどのように変化するかを観察するため、以下では、本動詞とニ格及びへ格の結合頻度を改めて取り上げる。図 8-1 と図 3-6 を合わせて見ると、本動詞に「テクル」を付けることによって、「届ける」と C グループ以外の動詞はニ格ともへ格とも共起しにくくなっていることが読み取れる。まず、A グループと B2 グループの動詞は「テクル」が付いた場合、縦軸に引っ張られる傾向と原点の方に引っ張られる傾向のふたつに傾向がある。

これに対し、B1 グループは「テクル」が付いた場合、「運ぶ」「送る」「届ける」を除けば、すべての動詞がニ格の方に引き寄せられている。このことから、「運ぶ」「送る」「届ける」は一見して同じグループのように見えるが、実際は

異なった振る舞いことが示唆される。特にそのうち、「運ぶ」「送る」は「テクル」によって、二格及びへ格との結合頻度がいずれも下がる。一方、「届ける」は「テクル」によって、より二格及びへ格と共起しやすくなっている。また、Cグループは「テクル」によって二格とへ格のいずれとも共起せず、原点に引き寄せられる様子が見られる。以上のように、第3章で示した分類のうちCグループのみは「テクル」が付いた場合もグループ全体で一様な傾向を示すが、A、B1、B2グループの動詞は、「テクル」が付いた場合に、いずれも二つの方向に引き寄せられており、まとまった傾向を示さないと言える。

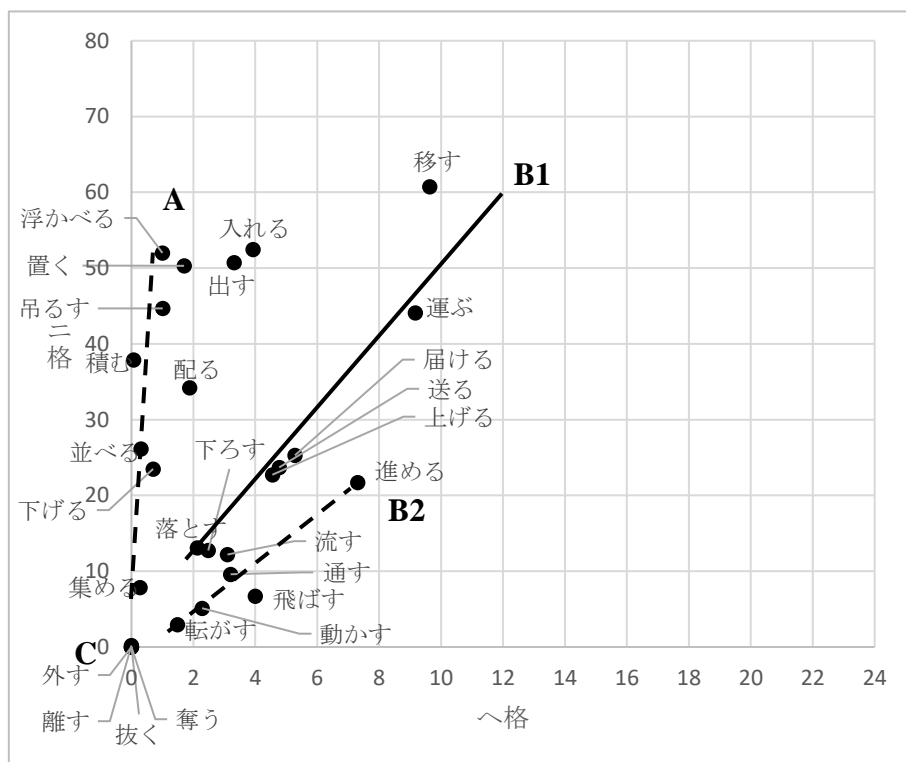


図 3-6 対象移動動詞と二格及びへ格の結合頻度 (再掲) ⁴⁸

なお、先行研究において、本動詞としての「クル」は「イク」と同様に着点志向型動詞と見なされている。この点で起点志向型、着点志向型、経路志向型とされるそれぞれの本動詞に「クル」を付けた場合、起点志向型のものにはカラ格との共起が制限されること、着点志向型のものには二格、へ格、マデ格との共起が助長されること、経路志向型のものにはどちらも言えないこと等が予測され

⁴⁸ 図 3-6 は第 3 章 p43 が初出となる。

る。しかしながら、表 3-2 を見ると、その予測は必ずしも当たっておらず、特に「テクル」形とカラ格との共起傾向二つの形で成立していることが分かる。その一つは、本動詞とカラ格の結合頻度より「テクル」形とカラ格の結合頻度の方が大幅に増え、中でもカラ格と最も高い頻度で共起する動詞では 15% から 56% に上がったことである。もう一つの傾向は、「テクル」によって一部の動詞が完全にカラ格と共起しなくなったことである。

「テクル」が付いた際、カラ格と共起しない動詞に注目すると、これらの動詞は元々本動詞がカラ格と共起しにくい傾向を示している⁴⁹。つまり、着点志向型と経路志向型とされる動詞の一部は、「テクル」によって起点が注目されるようになったと言える。また、これは、「テクル」の「求心性」（或いは「一遠心性」）によって、話者から離れたところから話者のいるところに移動した起点注目の表現が導かれたため、着点を表すニ格及びへ格の出現が制限されたものと解釈できる。すなわち、「テクル」形の場合は、動詞の結果性や限界性、継続性などが関与しないものと考えられるということである。

さらに、図 8-1 と、第 7 章で取り上げた「テイク」形とニ格及びへ格の結合頻度を比較してみると、本動詞は「テイク」あるいは「テクル」の付加によっていずれも 3 つのグループに分けられることが分かる（表 8-3）。

表 8-3 「テイク／テクル」とニ格及びへ格の結合頻度に基づく本動詞の変化

	テクル	テイク
縦軸に引っ張られる（ニ格と共起しやすい）	A、B1、B2	A、B1
原点に引っ張られる（ニ格もへ格も取らない）	A、C、B2	C
横軸に引っ張られる（へ格と共起しやすい）	B1	B1、B2

A グループ着点志向型：

「テイク」によって、ニ格との共起が助長される一方、「テクル」によって、

⁴⁹ 本動詞としてカラ格と高い頻度で共起しているが、「テクル」が付くとカラ格と共起しない「吊るす」「下げる」はカラ格とニ格が交替することができ、交替しても意味は変わらない点から、他の動詞と区別されるべきである。

ニ格との共起が制限される。

B1 グループ：

「テイク」によって、〈+結果性〉の **B1a** 動詞はニ格との共起が助長されるが、〈-結果性〉の **B1b** 動詞はへ格との共起が助長される。また、「テクル」によっても同様の傾向が見られる。

B2 グループ：

「テイク」によって、へ格との共起が助長される。一方、「テクル」によって、「転がす」「進める」はニ格しか取らないようになり、その他の動詞はニ格もへ格も取らなくなる。

C グループ：

「テイク」も「テクル」もほぼ影響を与えない。ただし、「離す」のみは「テイク」によってニ格と共起できるようになっている。

8.4.2 テクル形とニ格及びマデ格の結合頻度について

次に、「テクル」形とニ格及びマデ格の結合頻度について議論を進めたい。以下の図 8-2 は対象移動動詞の「テクル」形とニ格及びマデ格との結合頻度を示す。図中では、「テクル」形とニ格との結合頻度を縦軸とし、「テクル」形とマデ格との結合頻度を横軸としている。

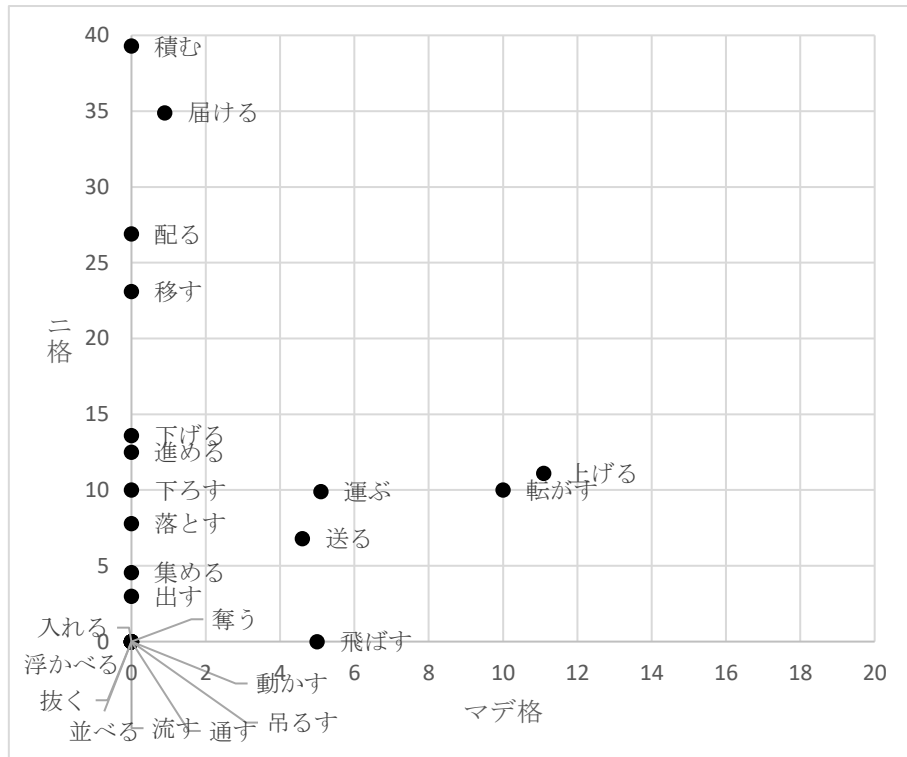


図 8-2 テクル形とニ格及びマデ格の結合頻度

図 8-2 から、「テクル」によって、すべての動詞を大きく 4 つのグループに分けることができることがわかる。まず、縦軸のみに沿って出現するグループがあり、このグループはマデ格を取らず、専らニ格と共起している。次に、縦軸から離れて横軸の方に散在しているグループがあり、このグループの動詞はよりマデ格と結びつきやすくなっている。さらに、横軸のみに沿って並んでいる動詞があり、これらの動詞はマデ格としか共起しない。最後に、原点に集まる動詞があり、これらの動詞は「テクル」によってニ格とマデ格のいずれとも共起しなくなっている。

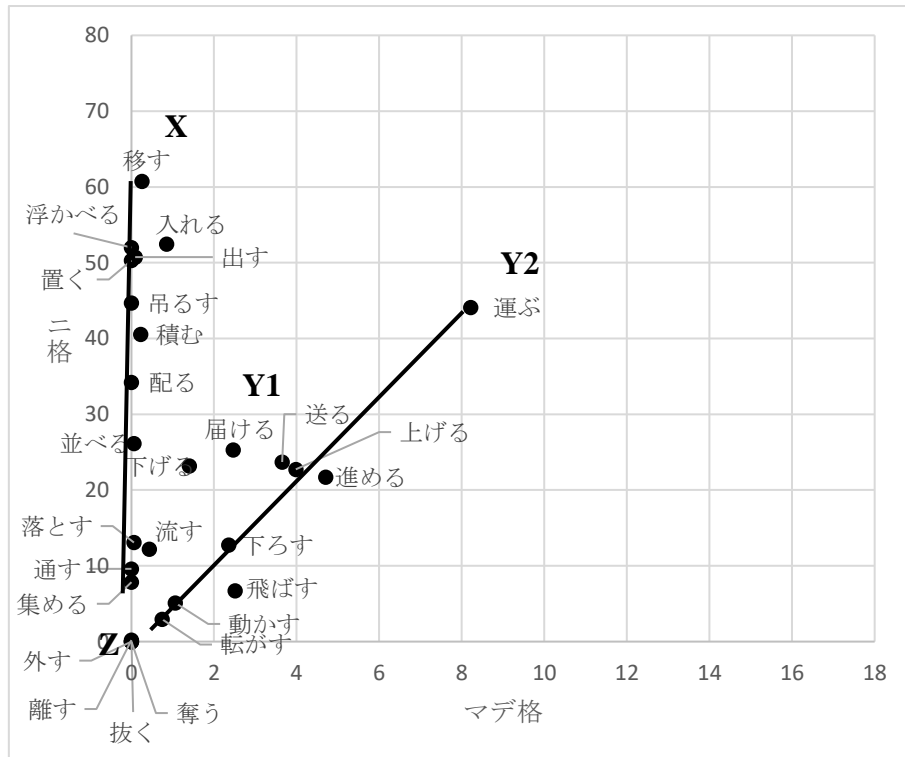


図 3-7 対象移動動詞とニ格及びマデ格の結合頻度（再掲）⁵⁰

図 3-7 は、第 3 章で示した、対象移動動詞とニ格及びマデ格との結合頻度を改めて掲げるものである。図 8-2 と図 3-7 を比べて見ると、図 3-7 における X グループの一部と Y1 グループの「届ける」「下げる」、Y2 グループの「進める」「下ろす」は、図 8-2 において縦軸に沿って並んでおり、ニ格しか取らない傾向がある。また、図 3-7 における Y2 グループは図 8-2 において「動かす」を除いて全て横軸の方に引き寄せられている。最後に、図 3-7 の Y2 グループの「動かす」と X グループに属する「入れる」「浮かべる」「吊るす」「通す」「流す」「並べる」は図 8-2 において、Z グループと同様にニ格もマデ格も取らない原点に集まっている。

8.4.1 節における「テクル」形とニ格及びへ格との結合頻度に対する分析で論じたように、「テクル」の「求心性」によって、離れたところから話者のいるところに移動した起点注目の表現が導かれることを想定すると、着点を表すニ格とマデ格はいずれも共起が制限されるはずであるが、実際にはいくつかの例外も存在することが窺える。例えば、縦軸の右下方向に集まっている動詞は

⁵⁰ 図 3-7 は第 3 章 p45 が初出となる。

一見同じふるまいを持つように見えるが、それらのうち「運ぶ」では「テクル」の付加によってマデ格との共起が制限される一方、「上げる」「送る」「転がす」「飛ばす」では寧ろマデ格との結合頻度が上がっている⁵¹。さらに、「届ける」「転がす」では「テクル」の付加によって二格との結合頻度も上がる様子が見られる。これらの例外に関しては未だ十分な説明ができていないが、本動詞に「テクル」が付いた場合、着点を表す二格とマデ格ともに「求心性」によって共起が制限されると言える。

8.4.3 テクル形と二格及びカラ格の結合頻度について

続いて、「テクル」形と二格及びカラ格の結合頻度を以下の図 8-3 に示す。図 8-3 では、「テクル」形と二格との結合頻度を縦軸とし、「テクル」形とカラ格との結合頻度を横軸としている。

⁵¹ 本論文では、用例採取を行う際、とりたて詞と順序助詞とされるマデの用法は排除される。「送る」「転がす」の「テクル」形とマデ格共起例として、以下の例文を挙げる。

- a. 食事を終え、まずは女性のアパートまで送ってきました。
(アメリカ人とのデート～デートで車で家まで送る場合の注意～)
- b. 一気に庭まで転がしてくる。 (HONDA スティード 再起動計画 マルボロマンへの道)

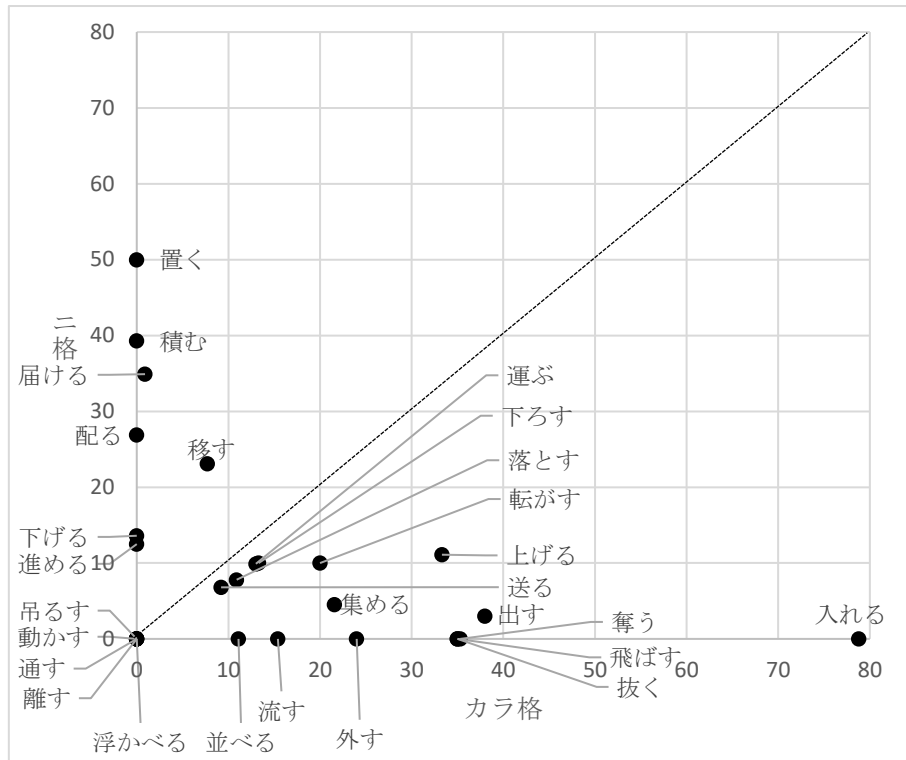


図 8-3 テクル形とニ格及びカラ格の結合頻度

図 8-3 において、原点を起点として引いてある点線は、対象移動動詞の「テクル」形が 1 : 1 の比率でニ格とカラ格を取ること示している。この点線との位置関係によってすべての動詞を 3 つのグループに分けることができる。まず、点線に対して左上方向に引き寄せられる動詞グループがあり、これらはほぼニ格しか取らない傾向を示している。また、点線に対して右下方向へ引き寄せられる動詞グループがあり、このグループの動詞はニ格よりカラ格と結びつきやすい傾向を示している。最後に、原点に集まっている動詞グループがあり、これらの動詞は「テクル」が付加される際、ニ格とカラ格のいずれとも共起しない。

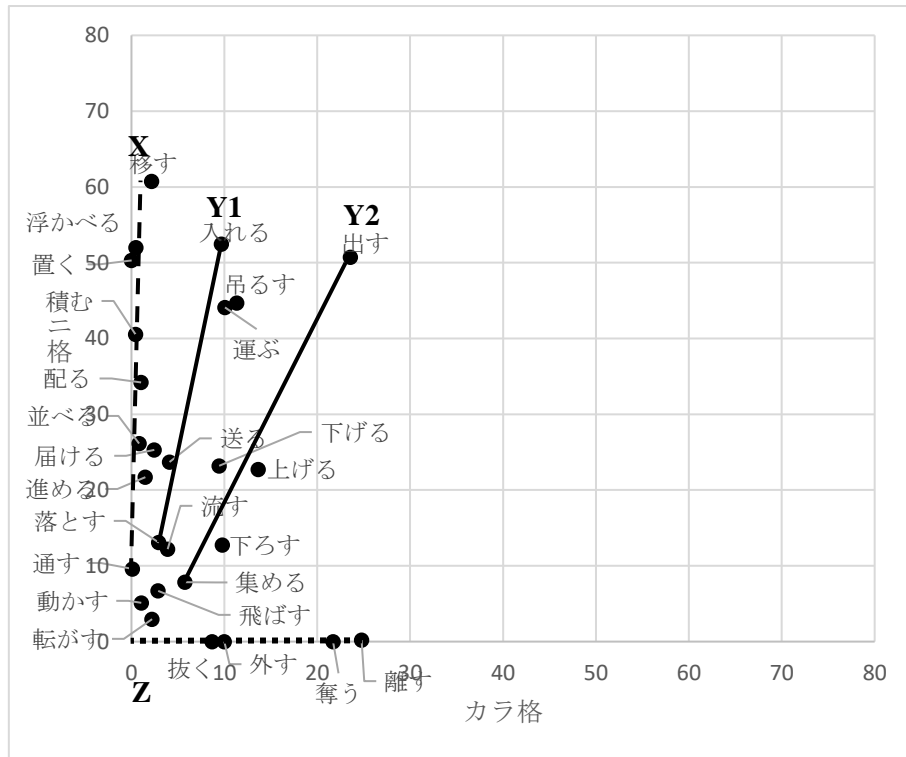


図 4-1 対象移動動詞と二格及びカラ格の結合頻度（再掲）⁵²

第 4 章の議論では、図 4-1 に示す通り、すべての動詞を大きく 4 つのグループに分けることができることを示した。図 8-3 と図 4-1 を比べると、図 8-3 において縦軸に沿って並んでいる動詞は、図 4-1 の X グループに相当するものが多いようであるが、X グループの動詞に「テクル」を付けると、二格を取る割合が減少するか、または共起が完全に制限されることが窺える。また、よりカラ格と共起しやすいグループに注目すると、それらの動詞はほぼ図 4-1 の Y グループに相当することが分かる。Y グループは起点着点共用の動詞であるため、本動詞としても X グループよりカラ格と共起しやすい傾向があり、この傾向は「テクル」によって一層強化されると言える。最後に、原点に集まる動詞がある。これらはいずれも上下のような客観的な基準（「吊るす」「浮かべる」）あるいは相対的な方向性（「離す」）を持った動詞であり、「クル」由来の「求心性」とは相反した性質を持つているため、二格との共起もカラ格との共起も制限されるのではないかと考えられる。

⁵² 図 4-1 は第 4 章 p52 が初出となる。

8.4.4 テクル形とマデ格及びカラ格の結合頻度について

「テクル」形とマデ格及びカラ格との結合頻度を図 8-4 に示す。図 8-4 では、「テクル」形とマデ格との結合頻度を縦軸とし、「テクル」形とカラ格との結合頻度を横軸としている。

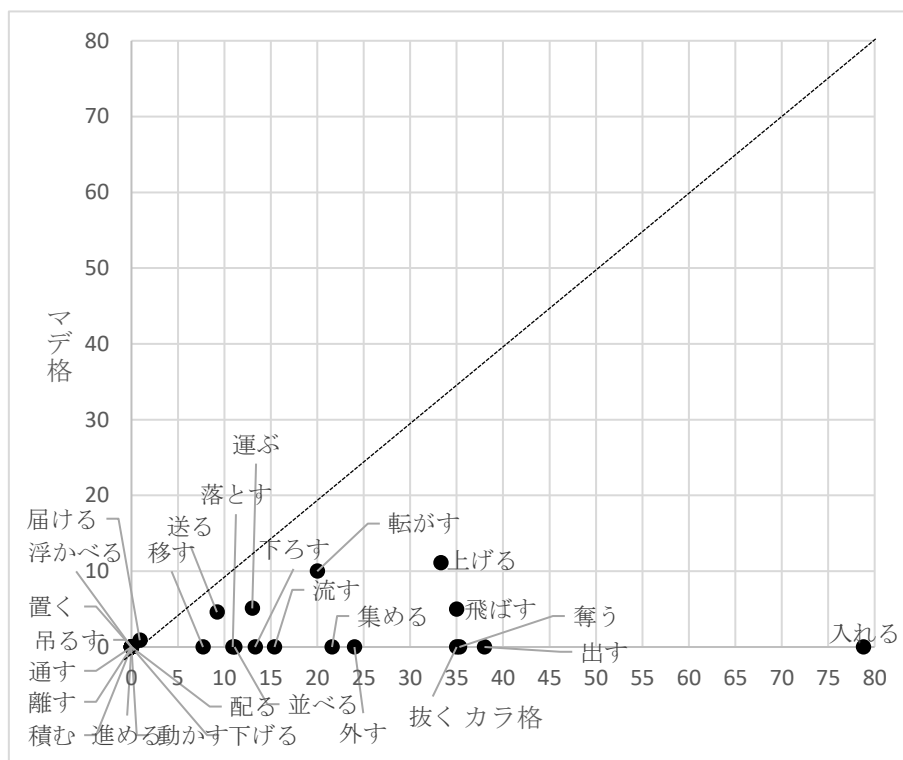


図 8-4 テクル形とマデ格及びカラ格の結合頻度

図 8-4 を見ると、すべての動詞を 3 つのグループに分けることができることが窺える。まず、横軸に沿って出現する動詞群があり、これらの動詞はマデ格と共起せず、専らカラ格と共起している。次に、原点に集まる動詞群があり、これらはマデ格とカラ格のいずれとも共起しない。さらに、原点を起点として引いてある点線は、対象移動動詞の「テクル」形が 1:1 の比率でマデ格とカラ格と共起することを示すが、この点線と横軸の間にいくつかの動詞が散見される。このグループの動詞は、マデ格よりカラ格と結びつきやすい。

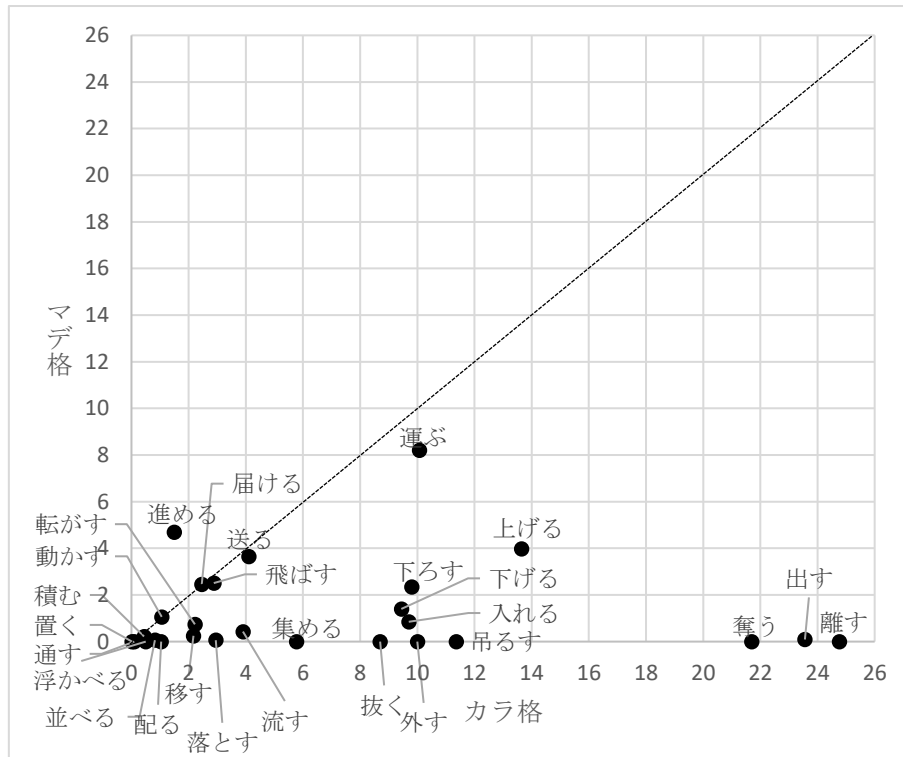


図 4-2 対象移動動詞とマデ格及びカラ格の結合頻度（再掲）⁵³

第 4 章で掲げた図 4-2 では、すべての動詞を大きく、横軸に沿って並んでいる動詞グループと、横軸から離れている動詞グループという 2 つのグループに分けることができる。そのうち、横軸に沿って並んでいる動詞はマデ格と共起せず、専らカラ格と共起する傾向を示している。一方、横軸から離れている動詞は、縦軸の方に行けば行くほどマデ格と共起しやすい傾向を示している。これを踏まえ、図 8-4 と図 4-2 を比べると、図 4-2 の点線及び点線の左上方向にある動詞は、図 8-4 において全体的に右下方向へ引っ張られる傾向が見られる。

「下げる」「吊るす」「離す」を除くと、これらの動詞は、図 4-2 においていずれも 2%以上の頻度でカラ格と共起していることが読み取れる。一方、図 4-2 においてカラ格との結合頻度が 2%以下の動詞群では、「並べる」を除き、すべての動詞が原点に引き寄せられていることがわかる。さらに、先に提示した図 8-3 と図 8-4 を比べて見ると、図 8-3 において縦軸に沿って並んでいる動詞も「テクル」の付加によってすべて原点に引っ張られることが確認される。これは、二格とマデ格が「+継続性」の有無において異なる性質を持っていること

⁵³ 図 4-2 は第 4 章 p56 が初出となる。

によるものと考えられる。

8.4.5 テクル形とへ格及びカラ格の結合頻度について

最後に、「テクル」形とへ格及びカラ格との結合頻度を図 8-5 に示す。図 8-5 では、「テクル」形とへ格との結合頻度を縦軸とし、「テクル」形とカラ格との結合頻度を横軸としている。

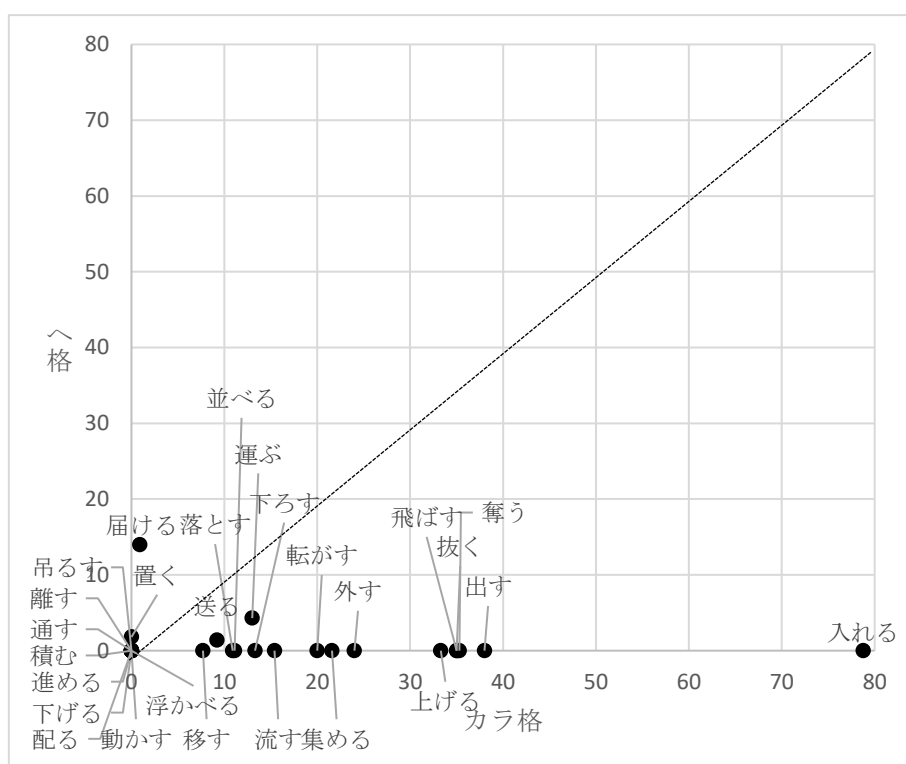


図 8-5 テクル形とへ格及びカラ格の結合頻度

図 8-5 から、すべての動詞を大きく 3つのグループに分けることができることが窺える。まず、縦軸に沿って並んでいる動詞群があり、このグループの動詞はカラ格と共起せず、専らへ格と共起している。次に、横軸に沿って出現する動詞群が見られる。それらの動詞はへ格と共起しない（あるいは共起しにくい）が、専らカラ格と共起する傾向を示している。最後に、原点に引っ張られる動詞群がある。このグループに入る動詞はへ格とカラ格のいずれとも共起しない。

続いて、ここまでの検討同様、本動詞とへ格及びカラ格の結合頻度を示す図4-3と比較する。

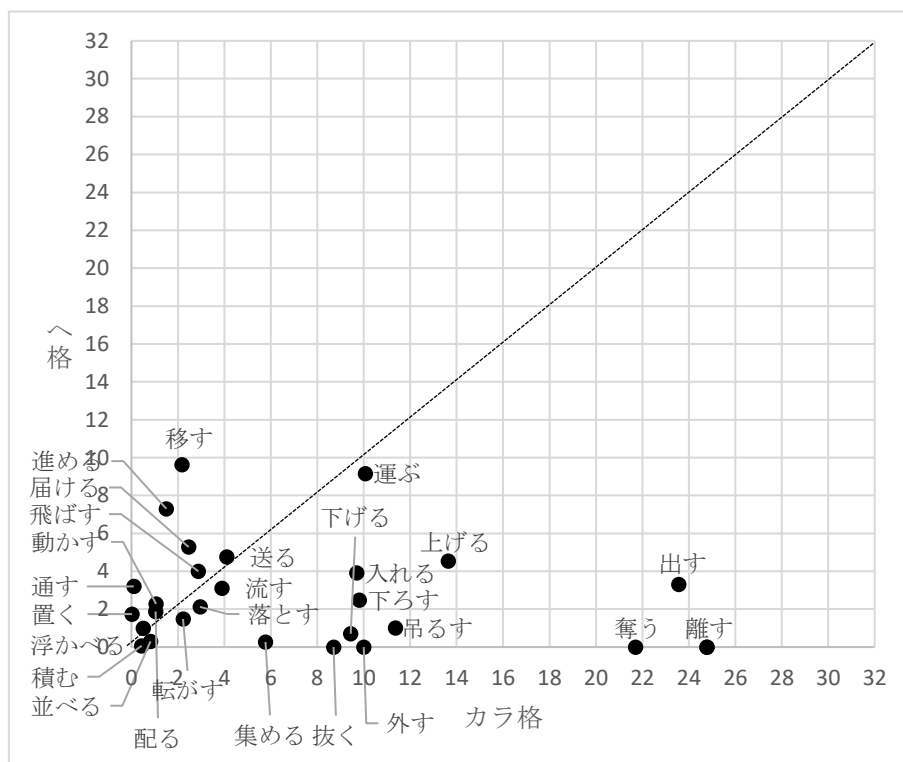


図 4-3 対象移動動詞とへ格及びカラ格の結合頻度（再掲）⁵⁴

図 8-5 と図 4-3 を比べると、図 4-3 における本動詞の方がへ格及びカラ格の結合分布がばらついているように見える。図 4-3 の縦軸と横軸の間に散見される動詞は図 8-5 において縦軸、横軸、原点のいずれかの方へ引き寄せられている。特に、図 4-3 において横軸に沿って並んでいる動詞群は、「テクル」によってカラ格との共起が助長されることが窺える。

なお、図 8-5 において原点に集まる動詞グループに注目すると、図 8-4（「置く」を除くと）と一致していることが分かる。さらに、図 8-3 と比べると、「浮かべる、動かす、通す、吊るす、離す」の 5 つの動詞は、図 8-3、図 8-4、図 8-5 においていずれも原点に位置する点で共通していることが読み取れる。8.4.3 節ですでに指摘したように、これらは上下のような客観的な基準（「吊るす」「浮かべる」「下げる」）あるいは相対的な方向性（「離す」）を持った動詞であり、

⁵⁴ 図 4-3 は第 4 章 p58 が初出となる。

「クル」由来の「求心性」と相反する性質を持っているため、カラ格、ニ格、へ格、マデ格のいずれとも共起が制限されるのではないかと考えられる。

8.5 本章のまとめ

この章では、対象の空間的移動を表す「V テクル」形の格結合頻度について分析を行った。具体的には、第7章と同様の手順でコーパスに現れる「V テクル形」とニ格及びへ格、ニ格及びマデ格、カラ格及びニ格、カラ格及びマデ格、カラ格及びへ格との結合頻度を調査した。また、本動詞とこれらの格パターンとの結合頻度と比較することにより、「V テクル」の格結合頻度の変化に関わる要因について考察した。

本動詞に「テクル」が付く場合、「テクル」形とカラ格の結合頻度が大幅に増える動詞と、反対に結合頻度が大幅に下がる動詞が見られた。これは「テクル」の「求心性」によって着点志向型と経路志向型とされる動詞の一部が起点に注目するようになったためである。前章における、「テイク」が後続する際、「継続性」「限界性」「結果性」「着点性」「起点性」といった素性が格結合頻度の変化に関与しているとする分析と異なり、本章では「テクル」の後続した場合、格の結合頻度の変化に本動詞「クル」に由来する「求心性」のみが関わっていることを示した。

第9章 終章

9.0 本章の概要

本論文ではここまで、格結合頻度の観点から対象移動動詞の分析を行ってきた。本章では、議論のまとめとして本論文の結論、意義、残る課題等について述べる。

本章の構成は次の通りである。まず、9.1 節では、序章で設定した研究課題である、①これまであまり触れられていない対象移動動詞は自動詞と似たような格支配あるいは動詞分類を示すのか②自他が対応する移動動詞は格結合頻度においてどのような異同があるのか③移動に直接関係する格支配を持つ「テイク／テクル」形は本動詞の格結合頻度と比べてどのような違いがあるのか、の3点に関してここまでの議論をまとめ、そこから得られる結論について述べる。次いで、9.2 節では、上記の3つの課題に沿って本論文の意義をまとめる。①対象移動動詞の格結合頻度の変化を観察する際、二つの格を複合させて散布図で示すことにより、動詞全体の振る舞いが可視化した。②自他が対応する移動動詞を比較することにより、全体的に自他で共通している傾向を確認した同時に、異なった振る舞いを見せた個々の動詞があることを指摘した。③対象移動動詞に「テイク／テクル」形が付いた場合、格結合変化に関与する素性の非対称性が明らかになった。最後に、9.3 節では、本論文で論じきれなかった課題と今後の展望について述べる。

9.1 本論文の結論

本論文では、序章において以下の3点を研究課題として設けておいた。

- (1) a. 自動詞と対応する移動を表す他動詞については、これまで十分に研究されていない。他動詞は、自動詞と似たような格支配あるいは動詞分

類を示すのか。

- b. 移動表現について、自動詞を対象として言われてきたことはそのまま他動詞にも当てはまるのか。他動詞と比べてどのような違いがあるのか。
- c. 別の語と見なされている「V テイク/テクル」形はどのような格結合関係を持っているのか。本動詞の格結合頻度と比べてどのような違いがあるのか。

(1a) については第3章から第5章まで、(1b) については第6章で、(1c) については第7章と第8章で、それぞれ扱った。以下では、上記の3つの課題に沿って、各章で明らかになったことをまとめる。

第3章では、対象移動動詞と二格、へ格、マデ格との結合頻度に基づいて、新たな対象移動動詞の分類案を提示した。宮島(1986)では二格、へ格、マデ格をすべて着点として同様に扱っているが、本論文は二格と、へ格及びマデ格は「継続性」の有無において異なっているという先行研究の指摘を踏まえ、対象移動動詞と二格及びへ格、対象移動動詞と二格及びマデ格、それぞれの結合頻度を散布図で示すことにより、動詞分類の可視化を図った。対象移動動詞と二格及びへ格の結合分布により、本論文で扱う動詞は大きくA、B、Cの3つのグループに分けることができた。宮島(1986)の分類との対応において、Aグループは着点志向型とされる動詞であり、Cグループは起点志向型とされる動詞である。この二種類の動詞に関しては、本章の二格とへ格の結合分布から宮島の分類の妥当性が確認された。一方、本論文では、Bグループの動詞に関して、着点志向型と経路志向型が混在していることを指摘した。宮島(1986)では、経路志向型とより近い位置に出現する着点志向型の存在について言及されていないが、本論文ではそのような動詞の存在が確認された。

また、動詞の限界性に注目すると、AグループとCグループは限界動詞である一方、BグループはさらにB1とB2の二つに分けることができた。それらのうちB1グループは着点志向型とされる限界動詞であり、B2グループは経路志向型とされる非限界動詞である。動詞の限界性と、従来論じられてきたへ格及びマデ格の継続性、二格、へ格、マデ格の着点性を考慮すると、Aグループは〈+限界性、+着点性、-継続性〉、B1グループは〈+限界性、+着点性、+継続性〉、B2グループは〈-限界性、+着点性、+継続性〉、Cグループは

〈+限界性、-着点性、-継続性〉を持つものと捉えることができた。

第4章では、起点を表すカラ格に着眼し、第3章と同様の方法を用いて、対象移動動詞とニ格及びカラ格、マデ格及びカラ格、へ格及びカラ格との結合頻度を調査した。その上で、宮島(1986)が取り上げている「出発点志向型」「到着点志向型」を検証した。第4章では、対象移動動詞がニ格とカラ格をとる割合を散布図で示し、本論文で扱う動詞がX、Y、Z、Wの4つに分類できることを示した。また、この分類の仕方と第3章の4分類を比較すると、次のような対応関係が見受けられた。

X≡A (「入れる、出す、集まる」を除く)

Z=C

Y≡B1 (「移す」を除く)

W=B2

Aグループは「入れる、出す、集まる」を除き、着点専用、Cグループは起点専用、B1グループは着点起点共用である。この分類から、「起点性」という素性が導き出された。第3章及び第4章における、動詞分類と動詞の類ごとに導き出される素性をまとめると、表9-1のように示すことができる。

表 9-1 動詞別と限界性、着点性、継続性、起点性との関係

X≡A	着点専用型	+限界性、+着点性、-継続性、-起点性
Z=C	起点専用型	+限界性、-着点性、-継続性、+起点性
Y≡B1	着点起点共用型	+限界性、+着点性、+継続性、+起点性
W=B2	経路志向型	-限界性、+着点性、+継続性、+起点性

第5章では、対象移動動詞の「テイル」形と共起する格の結合頻度を検討し、対象移動動詞の格パターンとアスペクト形式「テイル」との関係性を捉えた。具体的には、動詞が「テイル」形を取る際、動作進行のみならず、結果残存を表す場合もあることを示した。第3章で取り上げた動詞分類と結果性、継続性との関係をまとめると、表9-2のように示すことができる。

表 9-2 動詞別と結果性、継続性との関係

A グループ	+結果性、-継続性	ex. 入れる、置くなど
B1 グループ	+結果性、+継続性	B1a ex. 移す、落とすなど
	-結果性、+継続性	B1b ex. 送る、運ぶ
B2 グループ	-結果性、+継続性	ex. 進める、動かすなど
C グループ	+結果性、-継続性	C1 ex. 離す、奪うなど
	<-結果性、+継続性>	C2 ex. 経路ヲ格を取る動詞

第6章では、自他の対応がある移動動詞について、自動詞と他動詞で格結合頻度が変化するものと変化しないものに分けて検討した。この章では、他動詞の分析で用いたものと同様の方法を用い、ニ格及びへ格、ニ格及びマデ格、カラ格及びニ格、カラ格及びマデ格、カラ格及びへ格、ニ格及びヲ格と、自他の対応がある動詞との結合頻度を散布図でそれぞれ示した。その上で、格結合頻度に関して自他で生じた違いと、その要因について考察した。調査及び考察を通して、日本語では、自他で動詞のタイプが変わらないものが多いが、タイプが変更されるものも見られること、また、変更する場合、以下の3つの傾向性があることを示した。

- ① 移動動詞とニ格及びへ格との結合頻度を観察する限り、自動詞と他動詞はともに5:1の割合で共起しており、大きな差が見られない。ただし、「転がる」「転がす」、「落ちる」「落とす」は自動詞の方が他動詞より着点指向性が高い。一方、「下がる」「下げる」は自動詞の方が他動詞より継続性が高い。
- ② カラ格に注目すると、全体的に自他で差は見られない。ただし、「落ちる」「落とす」、「おりる」「おろす」は自動詞の方が他動詞より起点指向性が高い。
- ③ 場所のヲ格に注目すると、自動詞では他動詞より経路に注目するものが多い。ただし、「飛ぶ」「飛ばす」、「通る」「通す」のように他動詞でも経路に注目するものもある。

自他の間で生じた上記の違いは自動詞として持っている意味用法が他動詞には見られないものであることによると考えられる。

第7章では、対象の空間的移動を表す「Vテイク」形の格結合頻度について考察を行った。本論文では第3章から第5章までの議論を通して、対象移動動詞の格のあり方に、「限界性」「継続性」「結果性」「着点性」「起点性」という5つの素性が関わっていることを検討したが、第7章では、「テイク」形の格結合にもそのような素性が関わりと想定した。この章では、コーパスに現れる「Vテイク」形とニ格及びへ格、ニ格及びマデ格、カラ格及びニ格、カラ格及びマデ格、カラ格及びへ格の格結合頻度の実態を散布図で示した。その結果、本動詞に「テイク」が付いた場合、動詞が縦軸の方に引っ張られる、横軸の方へ引っ張られる、または原点に引っ張られる、といった3つの格結合変化の傾向が見られることを指摘した。また、次に、「テイク」が後続する場合に生じる格の結合頻度の変化にも「限界性」「結果性」「継続性」「着点性」「起点性」という5つの素性が関わっていることを示した。具体的にいうと、第一に縦軸の方（すなわちニ格の方）に引き寄せられる動詞は〈+結果性、+限界性、+着点性〉を持つ点で共通しており、〈-継続性〉に捉えられるニ格との共起が助長されることを示した。第二に横軸の方（すなわち、へ格あるいはマデ格の方）に引っ張られる動詞は〈-結果性、+継続性、+着点性〉において共通しており、〈+継続性〉に捉えられるへ格、マデ格との共起が助長されたことを示した。第三に原点に引っ張られる動詞については、起点のカラ格とニ格、へ格、マデ格を一緒に考えると、「テイク」が後続した場合、カラ格との共起の助長に〈+起点性〉が、ニ格との共起の助長に〈+着点性〉が、へ格及びマデ格との共起の助長に〈+継続性〉が、それぞれ関与していることを示した。

最後に、第8章では、対象の空間的移動を表す「Vテクル」形の格結合頻度について考察を行った。この章では第7章と同様の手順を用い、コーパスに現れる「Vテクル形」とニ格及びへ格、ニ格及びマデ格、カラ格及びニ格、カラ格及びマデ格、カラ格及びへ格との結合頻度を調査・分析した。その結果、「テクル」が後続した際、「テイク」の場合と同様に動詞が縦軸の方に引き寄せる、横軸の方へ偏っていく、原点に引っ張られる、といった3つの格結合変化の傾向が見られることを明らかにした。また、本動詞に「テクル」が付いた際、カラ格との結合頻度が大幅に増える動詞と、大幅に下がる動詞があることを示した。これは本動詞「クル」に由来する「テクル」の「求心性」によって着点志向型と経路志向型とされる動詞の一部が起点に注目するようになったためである。「テイク」形の格結合変化に「限界性」「継続性」「結果性」「着点性」「起

点性」が関与しているのとは異なり、「テクル」形の格結合変化には、「求心性」が大きく関わっていることを示した。

9.2 本論文の意義

9.1 節の冒頭で取り上げた3つの課題に沿って本論文の検討が有する意義について述べる。

まず、一つ目の意義として、対象移動動詞の格結合頻度の変化を観察する際、二つの格を複合させて散布図で示した点が挙げられる。これにより、動詞全体の振る舞いを可視化することに成功した。さらに、同様の手法によって、自動詞と他動詞の対立や、「テイル」「テイク／テクル」などの要素が加わった場合についても、格結合頻度の変化をよりよく観察することができた。

次に、二つ目の意義として、自他の対応がある移動動詞を比較した点が挙げられる。本論文ではそのような比較を通して、日本語において移動動詞の振る舞いが全体的に自他で共通している傾向があることを確認した。また、一部では、異なった振る舞いを見せる動詞があることも指摘した。

最後に、三つ目の意義として、対象移動動詞に「テイク」が付いた場合と「テクル」が付いた場合で、格結合変化に関与する素性の非対称性があることを明らかにした点が挙げられる。本論文では、本動詞「イク」に由来する「遠心性」の働きかけが「Vテイク」形の格結合変化にそれほど関わらない一方、本動詞「クル」に由来する「求心性」は「Vテクル」形の格結合変化に大きく関わっていることを明らかにすることができた。

9.3 今後の展望と課題

本論文の検討により、前節で述べたような成果が得られた一方、論じきれなかった問題として、主に以下の3点を挙げておきたい。

まず、複合して出現する格パターンについての考察がある。本論文は第3章と第8章において、他動詞と自動詞が取る場所格の割合について、それぞれ調査した。また、調査の結果、移動動詞が単独で場所格を取る用例数が圧倒的に

多かったことを踏まえ、単独で出現する格パターンを中心に考察を行った。一方、用例の全体に占める割合こそ低いものの、複合して出現する格パターンからも移動動詞の特徴が窺える。例えば、本論文では着点専用動詞とされる「置く」「浮かべる」が「カラ～ニ」「カラ～へ」「カラ～マデ」のいずれとも共起しないことを示した。また、着点起点共用とされる「移す」は、単独のカラ格と極めて低い頻度で共起する一方、「カラ～ニ」のパターンとは高い頻度で共起することを明らかにした。これらの観察を踏まえると、複合形式の格パターンについても今後、より詳しく考察する必要があると言える。

次に、自動詞の「テイル」形及び「テイク／テクル」形の格結合頻度について考察することがある。本論文では、第5章において対象移動動詞の「テイル」形の格結合頻度について、第6章及び第7章において対象移動動詞に「テイク／テクル」が後続した場合の格結合頻度について、それぞれ考察してきた。先行研究では、動作進行を表す他動詞や、結果残存を表す自動詞であっても、一定の構文的条件を満たせば、他動詞が結果残存を、自動詞が動作進行を、それぞれ表すことができることが示唆されている。実際、本論文第5章における対象移動動詞の「テイル」形の格結合頻度に関する考察では、一部の幅のある動詞が「テイル」形で結果残存を表すことができることを論じた。また、第6章では、議論を通して導き出された結果性が、「テイク」形の格結合頻度に影響を与えることを示した。このように、本論文では他動詞を中心に「テイル」形及び「テイク／テクル」形の振る舞いを検討したが、一方、自動詞の「テイル」形と「テイク／テクル」形の格結合頻度については、今後より詳細に調査する余地があると思われる。

最後に、「テイク／テクル」形の格結合に影響をもたらす意味素性の非対称性に対する考察がある。本論文第6章では、対象移動動詞の「テイク」形の格結合頻度を調査することにより、格結合頻度の変化に「限界性」「結果性」「継続性」「着点性」「起点性」という5つの素性が関わっていることを示した。一方、第7章では「テクル」形に対する考察から、格結合頻度の変化に本動詞「クル」に由来する「求心性」が関わっていることを示した。このように、本動詞「イク」に由来する「遠心性」は「テイク」の格結合の変化にそれほど関わらない一方、本動詞「クル」に由来する「求心性」は「テクル」の格結合の変化に大きく関わると言える。ただし、なぜこのような非対称性が生じたのかはまだ明らかになっていない。

以上の課題に対する考察は、いずれも今後の研究に委ねることとする。

参考資料

コーパス

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

筑波大学日本語・日本事情遠隔教育拠点『筑波ウェブコーパス』

辞書類

北原保雄（編）（2021）『明鏡国語辞典（第三版）』大修館書店.

小泉保・船城道雄・本田畠治・仁田義雄・塚本秀樹（編）（1989）『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店.

国立国語研究所（編）（2004）『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書.

参考文献

- 青木怜子 (1956) 「へ」と「に」の消長『国語学』24, 107-120, 国語学会.
- 李善姫 (2009) 『日本語移動動詞の研究』東京外国語大学博士学位論文.
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠 (2010) 『言語研究のための統計入門』くろしお出版.
- 今仁生美 (1990) 「V テクルと V テイクについて」『日本語学』9 (5), 54-66, 明治書院.
- 岡田幸彦 (1998) 「現代日本語の空間移動を表す動詞の語彙的意味の性格—移動のどの部分の重点が置かれるかに基づいて—」『日本語教育年報 (1997 年度)』1-32, 東京外国語大学.
- 奥田靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐって (上) (下)」『教育国語』No. 53, 33-44, No. 54, 14-27, むぎ書房.
- 影山太郎 (1996a) 「日英語の移動動詞」『英米文学』40 (3), 91-121, 関西学院大学文学部.
- 川野靖子 (2001) 「ヲ格句を伴う移動動詞句について—アスペクト的観点からの動詞句分類における位置づけ—」『日本語と日本文学』33, 25-38, 筑波大学国語国文学会.
- 川野靖子 (2006) 「移動動詞と共起するヲ格句とニ格句—結果性と限界性による動詞の分類と格体制の記述—」矢澤真人・橋本修 (編) 『現代日本語文法: 現象と理論のインタラクション』273-296, ひつじ書房.
- 北原博雄 (1998) 「移動動詞と共起するニ格句とマデ格句—数量表現との共起関係に基づいた語彙意味論的考察—」『国語学』195, 左 15-29, 国語学会.
- 北原博雄 (1999) 「日本語における動詞句の限界性の決定要因—対格名詞句が存在する動詞句のアスペクト論—」黒田成幸・中村捷編『ことばの核と周縁—日本語と英語の間—』163-200, くろしお出版.
- 北原博雄 (2006) 「移動動詞のテイル形が述語である文の解釈をめぐって—方向句との共起可能性と経路指向性との相関性—」矢澤真人・橋本修 (編) 『現代日本語文法: 現象と理論のインタラクション』297-324, ひつじ書房.
- 金田一春彦 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房.
- 工藤真由美 (1982a) 「シテイル形式の意味記述」『人文学会雑誌』13 (4), 51-88, 武蔵大学人文学会.

- 工藤真由美 (1982b) 「シテイル形式の意味のあり方」『日本語学』1 (2), 38-47, 明治書院.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト：現代日本語の時間の表現』ひつじ書房.
- 近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』ひつじ書房.
- 杉本武 (1986a) 「格助詞——「が」「を」「に」と文法関係——」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』227-380, 凡人社.
- 杉本武 (1988) 「動詞+テイル」の表すアスペクトについて『論集ことば』101-115, くろしお出版.
- 杉本武 (1995) 「移動格の「を」について」『日本語研究』15, 120-129, 東京都立大学.
- 杉本武 (2002) 「「ている」形の解釈と動作主性について」『文芸言語研究 言語編』42, 37-50, 筑波大学文芸・言語学系.
- 田川拓海 (2003) 「現代日本語における動作主の意味論と統語論」筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科修士論文.
- 田中茂範・松本曜 (1997) 『空間と移動の表現』研究社出版.
- 趙金昌 (2021a) 「格支配の量的分析に基づく対象移動動詞の分類と考察」『日本語と日本文学』67, 105-121, 筑波大学日本語日本文学会.
- 趙金昌 (2021b) 「ヲ格移動動詞のテイク／テクル形とニ格、へ格、マデ格との格結合頻度について—本動詞との格結合頻度との比較を通して—」『日本語学』69, 127-145, 韓国日本語學會.
- 靄岡昭夫 (1979) 「近代口語文章における「へ」と「に」の地域差—「行く」「来る」について—」『中田祝夫博士功績記念国語学論集』621-641, 勉誠社.
- 靄岡昭夫 (1980) 「漱石『坊っちゃん』と鷗外『雁』における助詞「へ」と「に」の比較」『電子計算機による国語研究』65-72, 国立国語研究所報告 67.
- 靄岡昭夫 (1981) 「助詞「へ」と「に」との使い分けの一考察—漱石『坊っちゃん』と鷗外『雁』とを比較して—」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』729-741, 大修館書店.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 第I巻』くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 第II巻』くろしお出版.
- 成田徹男 (1979) 「動詞の意味と格—「移動」に関する動詞を中心に—」『人文学報』132, 47-64, 東京都立大学.
- 原口裕 (1969a) 「近代の文章に見える助詞「へ」」『北九州大学文学部紀要』24-52, 北九州大学文学部.

- 原口裕 (1969b) 「「に」と「へ」の混用—近世初頭九州関係資料の場合—」『福田良輔教授退官記念論文集』427-451, 九州大学文学部国語国文学研究室.
- 日高俊夫 (2018) 「V テイク・V テクルの多義性と統語」『Theoretical and applied Linguistics at Kobe Shoin : トークス』21, 23-40, 神戸松蔭女子学院大学学術研究委員会.
- 許宰碩 (2008c) 「移動動詞の格標示とアスペクト形式との関係—韓国語との対照の観点から—」『日本語と日本文学』47, 39-53, 筑波大学日本語日本文学会.
- 許宰碩 (2008) 『日韓両言語におけるアスペクト形式の対照研究』筑波大学博士学位論文.
- 益岡隆志・田窪行則 (1987) 『日本語文法 セルフマスターシリーズ3 格助詞』くろしお出版.
- 宮島達夫 (1986) 「格支配の量的側面」宮地裕 (編) 『論集日本語研究現代編』, 41-58 明治書院.
- 宮島達夫 (1994) 『語彙論研究』むぎ書房.
- 森田良行 (1968) 「「行く・来る」の用法」『国語学』75, 75-87, 国語学会.
- 森田良行 (1994) 『動詞の意味論的文法研究』明治書院.
- 森山卓郎 (1984b) 「アスペクトの意味の決まり方について」『日本語学』3 (12), 70-84, 明治書院.
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院.
- 矢澤真人 (1985) 「状態修飾成分と〈シテイル〉の意味」『日本語学』4 (2), 63-80, 明治書院.
- 矢澤真人・橋本修 (1998a) 「近代語の語法の変化—『坊っちゃん』の表現を題材に—」『日本語学』17 (6), 13-21, 明治書院.
- 矢澤真人 (1998b) 「「へ」格と場所「に」格—明治期「へ」格の使用頻度を中心に—」『芸言語研究 言語編』34, 135-155, 筑波大学文芸・言語学系.
- 矢澤真人・安部朋世 (2000) 「方向のへト格」, 青木三郎・竹沢幸一 (編) 『空間表現と文法』29-49, くろしお出版.

本論文の各章と既発表論文との関係

第1章 序章

新規執筆

第2章 先行研究と本論文の立場

新規執筆

第3章 格結合頻度に基づく対象移動動詞の分類

一ニ格、へ格、マデ格を中心に一

趙金昌 (2021a) 「格支配の量的分析に基づく対象移動動詞の分類と考察」『日本語と日本文学』67, pp.105-121, 筑波大学日本語日本文学会.

第4章 起点志向型動詞と着点志向型動詞の格結合頻度

一ニ格、マデ格、へ格、カラ格を中心に一

趙金昌 (2021a) 「格支配の量的分析に基づく対象移動動詞の分類と考察」『日本語と日本文学』67, pp.105-121, 筑波大学日本語日本文学会.

趙金昌 (2021c) 「ヲ格移動動詞のテイク／テクル形とニ格、カラ格との格結合頻度について一本動詞の格結合頻度との比較を通して一」『日本語学会 2021 年度秋季大会予稿集』.

第5章 Vテイル形の格結合頻度について

趙金昌 (2021a) 「格支配の量的分析に基づく対象移動動詞の分類と考察」『日本語と日本文学』67, pp.105-121, 筑波大学日本語日本文学会.

第6章 テイク形の格結合頻度について

趙金昌 (2021b) 「ヲ格移動動詞のテイク／テクル形とニ格、へ格、マデ格との格結合頻度について一本動詞の格結合頻度との比較を通して一」『日本語学研究』69, pp.127-145, 韓国日本語學會.

趙金昌 (投稿予定) 「ヲ格移動動詞のテイク／テクル形とカラ格、ニ格、マデ格との格結合頻度について一本動詞の格結合頻度との比較を通して一」.

第7章 テクル形の格結合頻度について

趙金昌 (2021b) 「ヲ格移動動詞のテイク／テクル形とニ格、へ格、マデ格との格結合頻度について一本動詞の格結合頻度との比較を通して一」『日本語学研究』69, pp.127-145, 韓国日本語學會.

趙金昌（投稿予定）「ヲ格移動動詞のテイク／テクル形とカラ格、ニ格、マデ格との格結合頻度について—本動詞の格結合頻度との比較を通して—」.

第8章 移動表現における自動詞と他動詞

趙金昌 (2021d) 「自他対応の移動動詞と場所名詞句との格結合頻度について」『日本語文法学会第22回大会予稿集』.

第9章 終章

新規執筆

全ての既発表論文と学会発表に極めて大幅な修正・加筆を施している。